雪崩るゝ、夥多しい人足も、濁つた空氣の中を大溝の流るゝやうに段々に捌けて薄く成る。アセチリンの臭がもんもと籠つて、赤黑く染つた濃い深い靄の裡に、幕を放して、片づけ際の見世物の光景が茫と浮く。——惡魔が啖ふ血を裝つた白磁製の白鳥を穴藏に積んだ如く、白々と影を映してふッと消えたのは、裸體の婦の懷妊の腹を解いた人形の小屋である。出刃を銜へた白髮の婆々の青い顏が、ぶる〳〵と障子の棧を覗いて引込む。——足を空ざまに上げて、赤い蹴出しの中で、ものを縫ふ婦の看板が横倒しに成つて居る。兩頭の猫、六足の狗、角の生えた鴉、怪しき鳥、不思議な獸が、むらむらと暗夜の欄間に群がつて、其の間を、曲馬の馬は人を乘せて、鬼に追はるゝやうに駈廻る。

不思議に、一世紀の終局のものが、新しき世に一線を劃して、あはや亡びんとする瞬間を、大なる穴に遁籠つたやうである。

鶴樹は頭が疼く成つた。

息苦しい。

二

其の間を人に揉まるゝ。

地は沼のやうな泥で、ちよろ〳〵と這つて殘る露店のかんてらは、血であへるに似て、青く消える影は、燐火に齊しいふら〳〵と鶴樹は辿つた。

何故か、あの宙を飛ぶ看板の馬の一頭に縛められ、可恐き鬼に一鞭くらふとゝもに、九段の空を、外神田まで投出されさうな氣がした。

身はたゞ芥に成つて、人脚と泥の瀨に欄むと思ふ一構への小屋の口に、嬉しや救るゝ、故郷の寺の、欄間の天女——それは上品な紫であるのを、此は滴る紅で描いたやうな婦の姿が、段々幕に添ひ、燈を背にして、色白く丈高く目の前に佇むのを見た……。と同時に、眞珠の首飾を長く胸に垂れたと思つたのは、あゝ、鱗の光る大きな蛇で、縫目のなき衣、袖ある霞に紛ふやう、殆ど半裸體なる婦の胸の乳首の處に鏡首を擡げて居る。

ふと面を合せる、婦が妖艶な顏で莞爾する唇とゝもに、蛇はちよろ〳〵と、燃る凌霄羅の散るやうな舌を吐いた。靜岡の野山は蛇の多い處である、寺には藪學が古い。人の思つたほど忌恐れなかつたからまだ可い、勿論誰もすきではない。岸近い處には可恐い巖がある。よし、其の根には、目も綾な五彩の藻が茂らうとも、渡る船は損はれる。

鶴樹は、人を衝くやうにして、廣場の眞中の方へ外れた。尤も何も見ず、思はない。俯向いて、歸途を急いだのであるが、人なき夜更には、鷹の如く、小手の上に時鳥を留めさうな、高い銅像の周圍を、坂上の常夜燈の方へ行かうとすると、人波が哄と湧いて、どゞどと崩れかゝるのに、壓されて、退つて、倒れようとして辛く一歩わきへ開いた。目の前の泥濘へ、ばしりと泥を飛ばして大の字にのめつた男がある。のめつたのではない、倒されたのである。其の印半纏が倒れた上へ、矢庭に馬乘に跨がつた、角帶が引摺つた股までめりやすを顯した敵手がある。のしかゝると齊しく、拳を上げて續け狀に半纏着の頭を打つた。はずみに帽子が脫けて飛んだ。喧嘩だ、喧嘩だ。——

傍杖の危さに、輪に成つて開く人だかりとゝもに、鶴樹も煽られてあとへ退つた。途端である。組敷かれた半纏が猛然として撥返したと思ふと、上のが勢に怯えてバッと遁げた。追つかけ狀に、汝と叫ぶと、トンと鳴つて鶴樹は横頰から眞面へ掛けてしたゝかな拳を啖つた。

目が眞暗に成つた、耳許を、風を切るやうな人が飛ぶ。

過度に激昂して硬直した拳は力まけがしたらしい、些とも疼くない。或は氣が遠く成つたのであらうも知れない。途方に暮れたのは、目も鼻も口も、耳さへ一方は、半纏が摑つて居た雨上りの泥で、べとりと埋められた事である。

瞬間、輕く地の底に埋められた氣がして、目鼻のつかない粘土細工に成つて倒れようとした。誰も構ひ手はない。

茫然として踞つた。

手を取つたものがある。

が、其の手の感覺さへ傳はらぬ。いま思はず、面を蔽うた兩手の泥に隔てられたのであつた。

「いとしいねえ、まあ。」

と情深く言ふ下から、

「ほゝゝ。」

と花やかに笑つたが、

「此方へ行らつしやい。」

と言ふのは婦の聲で、手を曳いて、ずつと行く。

「怪我はなさらないやうね、痛かつたでせう、まあ飛んでもない。」

あ、とか、う、とか言ひさうな處を、口を動かさうとすると、嘘ではない、齒莖も舌も一杯の泥である。不氣味さと不快さに聲も出ない。唯とぼ〳〵と手を引かれて、地の下を潛るやうな思ひで續くと、幸ひ腦は麻痺して居ず。爽な風が面に通つて、冷い水のさら〳〵と響くのが聞えた。

川なら飛込まうとしたであらう。

情が冷く沁みて衣を透した。胸の處が水に接した。大な石の手水鉢に導かれて立つたのである。

「はい、お水、手をお出しなさい、……さきへ手をお洗ひなさらなくつちやあ……お待ちなさいよ。——私も一寸お轉婆をしないと、だらしがない。——よ。……」

と氣輕な掛聲して、ぞろりと褄をかゝける音。盲ずくひに意氣地なく出す兩手に、ひたと暖に觸つたのは、二の腕に袖を捲いた柔な肱である。

「さあ、澤山。いくらでも構ひません。水は湧くもの、柄杓は手のもの。——玉川の上水で男振をお磨きなさい、まあ、いゝ髪ね……お頭まで泥だらけだよ——構はず、顔をお突込みなさいな。御本殿のお扉も閉つて、最う此處には誰も居ません。——不可ませんか。……神樣のお清めの水、然うね。些と失禮だね。では、さあ、よ、油やさんかね合だ。柄杓で手際よく遣りますから、兩手でうけて……然う、あゝ、間に合ない、そんな事ちやあ。一層、お顏をお貸しなさい。」

と手水鉢にうつむかせて、

「御免なさい。」

と掌で掬つて掛ける。

其の間に、暗さぐりの柄杓で、鶴樹は夥度嗽をした。

「はい、お手拭、粗末なの。……」

「あゝ、何うも。……」

と、何にも言へず受取ると、芬と薫る、薔薇の薫に包まれたと思ふ時、絹手巾の廣いのを、女の髪が端を覗いて潛るや否や、ちゆッと、赤い木の實の熟して落ちるやうな音を立てた。

目をみひらくと、靄ばかり、黑い樹ばかり、何も見えない。

北の方の暗がりで、

「ほゝゝ。」

と冴えた女の笑が、谺するかと凄く聞えた。……

境内の水の音は、深山の清水のやうに響く。

三

中二日經つて、三日めの朝である。學校へ出ようとして、鶴樹が前記の木蓮館の其の象徴たる葉の影に、二階の部屋で

食事を濟すと、女中が膳を引きながら手紙を渡した。

鶴樹は朝が早い。……寢坊だと枕頭へ屆かうと言ふ寸法である。

裏に――黑川生――としてある。……別に珍しい姓ではないが、思出す記憶にない。字體が何うも男にしては柔い……それに表がきだが、友だちは大概、故と鶴樹寺とかいて寄越す、中には其が本姓だと思つて居るものも少くない。處を正しく鶴樹としてある。それに一雛の雛が、かきにくかつたと見えて、(誰)とも(雛)とも言ふやうな形に成つて居るのでも、何となく女らしい。

宛名に間違はないから、封を開くと、果して薄桃色の卷紙に、女もじで、時候の挨拶から、御機嫌よく入らせられからだが、おなつかしい方、おなつかしい貴方、おなつかしい鶴樹樣と頻になつかしがつて、折があつたら是非お目にかゝりたう存じます――失禮おゆるし下さいまし、と一應雜と此の意味で、あやめ、と名が假名でかいてあつた。

黑川あやめ――後に、のつぴきが成らなくなつて、或家へ逢ひに行つた時、取次の女に、

「黑川あやめさん……」

これは眞に言惡くつて、のつけから面をあからめたと言ふ。……何うも堅氣の名らしくない。

處で、一日措いて、翌日も手紙がまた來た。

――何だかお目に懸られないやうな氣がして、私はそれが悲しくつて〳〵――と書いてある。

今度は續いて、翌日すぐ來た。

――私は親も兄弟も何にもない悲しい身の上、世間は暗夜です。貴方ばかりを、お月樣とも思つて、居る。……

其の次のには、唯た一人の兄さんだと思つて居る、思はして下さい、可ござんすか、思ひますよ、思ひますよ、何とおつしやつても思つてよ。――

で、折返して、――餘りあつかましい事を言つて、お目にかゝらない前から、あいそを盡かされたでせうと思つて私は一晩泣いて居た。――と言つて來る。

――此の暗夜に泣く女を、あはれと思つて顏を見せて下さいな――と進んだ頃には、九段上――富士見町の何とか言ふ、一寸した料理屋か、待合らしい處を、をしへて、其處へ來て欲い、と言ふのである。處が返事を求める場處は、淺草馬道の某處であつた。

――手を合せます、後生ですから、かしく。――

菖蒲より、一樣まゐる。

雛樣へ――御存より。

さて、こゝに及ぶと、下宿の女中が默つては納まらない。廊下の往復には、「一寸、黑川さん。」などゝ遣る。身體のがつしりした年增の女中が、一通につき白銅五錢也を皮切に徵發して以來、小婢までが、「黑川先生――イヒヽ。」と笑つて引奪る。中頃、十錢と値上げに成つて、驚いたのは留守中の机の上に、黑川生の手紙と一所に、受取を添へて、金五十錢也、帳場拜としてあつた。

いや、それ處ではない、鶴樹が鬱込むまで持扱つて居る事がまだ別にある。

招魂社の夜は手巾である。

此の手紙のぬしは、あの時の婦であらうとは、讀者も早くお察しの事と思ふのである。が、鶴樹も實は第一信から多分然うだらうと直覺して居た。そんなら、さきで隱して居る場合にも、進んで此方から住居を尋ねて禮を言ひ、出來るだけの酬をもするのが至當である。

其を、いまに至るまで等閑にして居る次第は……一度たよりの中に、「いやしき藝に露命をつなぐ」と言ふのがあつた。あの時の場所と言ひ樣子と言ひ、一應は藝妓かと思つた。が、それにしてさへ世間知らずの臆病ものには少なからず氣とがめがして、おくれを生ずる。……處へ……其の手巾を、あとで何心なく見た時、一方の端が小さく珠にして結んである

のに氣が着いた。一寸袂に、然うして居たのを急いで引出してくれたものに相違ない手巾は白い薄絹で、何處か黄味を帶びつゝ、手擦れたと思ふ處に、ほんのり薄青味がある、と見るうちに、蠱惑さるゝばかり衝動的に指が動いて、熟とつまんで、スッと引伸ばさねば成らなかつたほど、其の結球が蛇の首の形をして居る。

勿論慌てゝ離した。が、絹はほぐれても今度はひとりでにずるりと長く伸びさうに思はれるまで、不思議に巧な蛇である。置場にさへ迷つた。しかし新しい來歴につけても何處へも打棄る事が出來ない。……部屋の隅に置くと、剩へ得も言はれぬ時めいた香が、時々脈々として膚を襲ふ。

逆上るばかりで、これがために寢ると汗を搔く。或晩なぞは、――下宿が自慢の木蓮に面するために、此處は西洋窓に擬へた硝子張にしてある――窓の外へ出して、木蓮の枝に掛けた。雨も降らず、風のなかつた事は言ふまでもない。――月夜だつたが、尙ほ不可い、木蓮が咲いたのではない、青白い首がぼつと大きく覗き込んで、白絹の鱗を着て、梢の月に立つて居る。現に成ると、二階ぐるみ、ずる〳〵と卷くので飛起きた。

よし、それも、わがために仇ではない。聊も、害意のあるものではない。寧ろ恩あり情ある一重の薄絹である。しかし不氣味でない事はない。

鶴樹は、置場所に迷つて、眞夜中に寢床の周をうろ〳〵した。夢に蛇に追るゝ風情である。

夜のあくるまゝに、持てあつかつたが、掃溜に棄て、溝に流すべき物では決してないので、今は旅行鞄に鍵を掛けて、押入に藏つたが、生ものを封じるやうで、其さへ尙ほ心が休まらぬ。

で、夢に魘さるゝまで、まざ〳〵と目に映るのは、招魂社の夜の暗中に、血の燈を背にして佇んだ魔界の姫の姿である。

手紙に、それとは明かさぬけれど、何につけても、其の（露命をつなぐ）と言ふのが、たしかに蛇つかひの婦らしい。

屏風の繪

一

やがて、其の招魂社の祭禮の過ぎた、六月の中旬。

もう半月餘も經つて居るから、景色にも四邊の氣分にも祭禮について何ものも殘つては居ないが、事柄には少なからず關係があるから、祭禮に連絡を取つて、此の物語を進めよう。

おなじ九段坂上の裏通り、富士見町の狹い辻に、一寸棚の達磨とも見えれば、おかめの面とも見えるし、臀の大な白鳥にも似た形に、ごしや〳〵と鬱妓屋、待合、小料理屋などの家の名を書いて組つらねた、電燈の共同看板が、跳の柳もなしに、百日紅か、夾竹桃の、ぽつゝり二三輪咲いたのにあしらはれて出て居る。其處等の門背戸は、打水でなく、晴間の梅雨にしつとり濡れて、軒毎の敷居際に、裝鹽は新しけれど、箱の往來はまだ見えないで、のそ〳〵不遠慮に犬が歩行く。

嗅いだり、追掛けたり……また歩行く。

此の出口へ。……

「想つた通り。」

と横町の奥から、つか〳〵と出て來て、件の辻の電燈看板の下で立留つて、うつかりらしく呟いた、二十四五の人がらのいゝ男である。

絣の上に、行李皺の寄つた、ものは粗末らしいが折目のある縞紹の羽織を着て、麥稈帽子の新しいのを無雜作にかぶつたが、何處かへ心が突當つたやうな樣子で、其の無雜作には行きかねて、殆ど廂のめりに成るまで、まだ灯の入らない電燈の下に立つた處は、帽子の新しいのさへ白けて居る。――

これが鶴樹であつた。

少時熟として、ふいと顏を上げて前後を見廻した。其のまともへ打撞つたのは眞向うの雜貨店の主人の顏で……此がサ

生さない髭の、みだりにべつたりと濃い、鼻の尖つた、目の窪んだ旦那で、紺の前垂をしめた癖に、鐵縁の目金をぎらぎらと光らせて、間狭な帳場から、額越にじろ〳〵と此方を睨む。

鶴樹は、呑まれたやうに其の軒へ入つた。

「煙草を下さいませんか。」

「敷島。」

と、ぶつさき棒である。

「結構です。」

と、あやまるやうに然う言ふと、主人はトンと軒前の臺へ載せて、人指ゆびの丈ばかり、其煙草を突出した。

「寶丹はありますか知ら。」

「お幾干ので？」

「三十錢ぐらゐ……」

「ぐらゐ？　はあ、矢張り、其の、三十錢ので？」

「結構です。」

角帶の着流し、澄して立つと、左側の小抽斗をガタコトと開けて、底を睨んで、包を取つて、フンと嗅いで、掌でポンと敲いて、また件の臺の上へ載せたと思へば、煙草の上へトンと重ねて、

「二點。」

と言つた。

「一圓の紙幣ですが、御面倒でせうか知ら。——何でしたら五錢は別に持つて居ます。」

「いや宜しい。」

「何うも憚りです。」

「はあ。」

鶴樹は、一方ならず怯えた體で、再び向うの電燈下へ——出た時は、入口に引掛つたやうだつたが、今度は呑まれさうに肩をすぼめて、紅い花——それは石榴だつた——が角の船板塀を覗いて電燈の火屋に映るのを、火の如く仰いで、眩しさうに見た。目を煩つた男のやうで、さみしさうなが優しかつた。

案ずるに、こゝで煙草でも一服吸つて、少々落着かうとしたらしかつたのが、例の目金の、きら〳〵と背中を射るために、何處へも身體の持つて行き場所がなさゝうで、渠は其のまゝ細い横町へ密と入る。

二

此の横町は、奥が突當りも同然、一方へ縄に折曲る露地は見えるけれども、通抜けが出來るか何うか、見たところ覺束ない。

だから、そらして行抜けるのも氣がさすので——鶴樹は、中ほどの、(相生)と云ふ軒燈の出た門を、ト行過ぎようとしつゝ立停つた。(御待合)と、れい〳〵とある。

何を隱さう……唯た今、實はこゝまで來て、軒燈を見ると、それ、「想つた通」で、慌てゝ引返して煙草を買つたのである。が、雜貨店の主人の目金に射られて、分別も身繕ひもする餘裕はなかつた。剩へ、待合へ入らうとするのに、寶丹を用意したのであるから、大概爲人に想像が着く。——三々九度の杯に目をまはすやうなもので馬鹿々々しい。が同情して可い。

で、二度めに來て立停ると、更に、ハッとした事は、悪戯だか、洒落だか、それとも氣を利したか、硝子張の千本格子が、裝飾もこぼさず、水を打つて、颯と一枚、階子段を横に見せて、框の障子ぐるみ、あからさまに開けてあつた。

うろついたのを見られたかと、又それ、爪尖で遁構をした。……が、町は狹し、場所柄だし、背からも、横からも、島田、唐人髷、銀杏返が、多勢覗いてゞも居さうなので、思切つて、敷居を越すと、濡れた三和土に辷りさうにしながら、其の格子戸を自分で閉めた。

「入らつしやい。」

もの陰から——これも覗いて知つて居た——色の黑い、年增の女中の、出額で圓髷に結つたのが、輕い揉手で莞爾々々と出迎へる。

透すやうに顏を見ながら、

「何うぞ。貴方。……」

鶴樹は、半面の楯に、帽子を取つて、

「私は、私は初めて伺つたものです。」

「結構でございますよ。」

「いゝえ、」

と丁寧に手をおろしたので、女中も急いで膝をつく。

「失禮ですが、一寸伺ひます。」

口で結んで眞顏で受けて、女中は圓い目で笑つて居る。

「此方に、」

と、何故か言淀んで、

「黑川。……」

「へい。」と、膝頭へチョンと、手を組む。

「黑川……菖蒲さん。」

「菖蒲さん。へい。」

と仰山に、手と胸を一所に開いて、

「あゝ、貴方……鶴樹さま。」

人がらも名も此で分つた——渠は一雛と言ふ、繰返すやうだが上野あたりの、美術學校の彫刻科に、俊才と技倆と風采とによつて、「若先生。」と稱へらるゝ學生である。

思も掛けず、見も知らない待合の女中に、端的に名を呼ばれて、鶴樹は面の緊るまで、一驚を吃したやうだつたが、恁う成ると、却つて胸が据つたらしい。清い瞳で、出額の前髷を熟と視た。

女中は反るやうに、ひよいと立つて、

「さあ、何うぞ。」

「ですが、其の方には、まだ一度も逢つた事はないのです。」

「あんな事を、嘘ばつかり。は、は、は、」

と太い聲だが、人のよさゝうに大きく笑ふ。

「事實、此家においでなんですか。」

「えゝ〳〵おいでなさいますとも、直ぐに貴方、それは貴方。」

と、少くもどかしく成つたか、白足袋を横ちよに刻んで、

「もう〳〵、どんなにかお待兼ねでございませう。」

「しかし……黑川さんから手紙の來ます處は、淺草の方ですがね……遠方ですから、手間が取れるやうですと……。」

「いゝえ。」

と、最う横歩行をしさうにして、
「直ぐ御近所へ見えてゞございます。直ぐでございますよ、さあ、さあ何うぞ。」
其でも鶴樹が逡巡すると、
「何ですよ、貴方、こんな許へ入らしつて。」
「御免蒙つて了へ——失禮します。」
俄然として飛込んだ勢に、女中は、ととと、ト音を高く、廊下を奥へ導きながら、
「其の術で、菖蒲さんを退治ましたね、はゝゝはゝ。」
妙に氣に成る事を言ふ。……鶴樹は思はず汗を流した。
……と言ふのが、それでなくつてさへ、世に憚る、恥かしい處へ來た氣がするのに、まだ逢つた事のない其の婦が、ましたしても、見世物小屋の蛇つかひらしく思はれる。

三

「……それはね、絶對に飲めないと言ふ事はないんです。」
鶴樹は、二三杯の酒が最う色に出て、
「友だちに誘はれゝば、酒場や、おでん屋へ飛込む事もあるんだけれど。」
「よう、よう。」と、ほんと手を拍つて、女中が圓い目できよろりと見る。
鶴樹は吃驚した顔で、
「何が、何故です。」
と、それでも嚊された意が、辛うじて分つたか、ひとりで苦笑した。

「詰らない、馬鹿な、そんな怪しい譯ぢやあないんです。實際私は、こんな處へ來て、お酌をして貰ふッて事は最初なんだから。」
「おつしやいよ、貴方。……ですが、お手際が可うございますね。御修業次第では、立派な御酒家におなりなさいますよ。」
「修業次第ですか。」
と一向に氣のないのを、女中は乗氣で押かぶせて、
「そりやあね、めしあがらないと仰有るのが眞個でございましてもね、呑口が備つておいでゞすから、御修業次第でございますのさ。」
「然うですか。」
「さあ、其のおつもりで……最うお一杯。」
「いや、眞個然うはいけないんですから。」
「お師匠番がこれぢやあね。……では、まあ、いまに菖蒲さんに、澤山仕込んでお貰ひなさいまし。」
「其の人は、——酒を飲みますか。」
「あら、御挨拶ですこと。——すぐにおひけにしませうかと、此方から伺ひたいくらゐなものだわね。」
何の事だか、よくは分らないが、我が言ふ心は通じないで、何處までも、初手から菖蒲と馴染だと思ふらしいのに、忸怩とした趣で、
「何うも、誤解をして居るんだね。」
と差置いた杯を、蓋するやうに指で壓へて、きちんとして、
「實際なんですよ——此の間の招魂祭の晩に逢つたのがはじめてなんです。」

それも、逢つたと思ふばかりで、顔さへ見ない。……見ないのも道理で、其の祭も濟みぎはに、五月闇で灯も疎な時、鶴樹は見せもの小屋の前を通りがゝりに、降つて湧いた喧嘩の傍杖で、貧腹の目の暗んだ男に、握り拳とゝもにぬかるみの泥を横面へみしと喰つて、まるで粘土の面の如く、目鼻も口も、耳も一杯の泥に成つた——途方に暮れて、魂も半三途に迷つた處を手を曳いて、あの境内の石の大手水鉢に導いて、清しく顔を洗つてくれて、漸と犬の子の目の開くトタンに暗がりへッィと遁げて、遠くの樹の中で、ほゝゝと花やかに高笑ひをした婦である。——それから此方、毎日のやうに——住所は牛込赤城下の木蓮館と言ふ下宿へ——毎日のやうに手紙が來て、其の事とは言はずに、唯是非逢ひたい、こゝへ富士見町の相生まで來てほしいと言ふ……段々と、日に增し文句が激しく成つて、退引ならず出て來たが、はじめ喧嘩の傍杖で、顔が粘土に成らないさきに、見世物小屋の出口に立つた。血で描いた天人のやうな姿で、眞白な露呈な膚へ、瓔珞か何ぞのやうに、ずるりと蛇を掛けて居た婦がある。たゞ想像だけだけれど、菖蒲と言ふのは、何だか夫らしい氣がするが、

「何うでせうかね。」

と、見た處年紀は取つて居るし、叔母さんにでも話すやうな口ぶりで、一つは極り惡さのまじくなひに、口も肩もきちやうめんに句切つて言つて、

「——實は、心配なんですがね、女中さん。」

「ほゝゝ、おつしやいよ。」

と、はぐらかしたのに、うつかり乘つて、

「いや、おつしやつた通りです。」

「誰かゝ、あの、泥を掴んだ握り拳で……また彼處は、其の當座、ひどいぬかるみでございましたものね。飛んでもない、まあ、勿體ない。……其のお顔を。」

と續けざまに笑ひながら、覗き込んで、

「おや、薄暗く成りました、鼠が出ると不可ません。」

と電燈を燦と點けた。が立つたなりで、

「誰方ですか、見えたらよくお聞きなさいまし、もうおいでになりますよ。——あなた。」

とひよいと屏風へ半分、臀へ首が生えたやうに捻向いて、

「——大變でございますよ——取殺されない御用心。」

と、けたりと口を開けたのが、怪物じみる。……戸を閉めざまに、出た處で、

「ほゝゝほゝ、鶴樹さん。」

と獨言のやうに言ふのを聞くと、ひやりとして。……

昔話の（呼名の怪）を思ひ出した——

寺院に育つた此の一雛は、老法師の夜話に、眞夜中に、誰とも知らず、戸の外から、鶴樹さん、一雛さん、——名を呼ぶものがあらば心せよ。……呼ばれたものは、恍惚と迷忘して、或は其のまゝに行方を失ひ、甚しきは生命を取られる……と言ふのであつた。

鶴樹は思ひ出して悚然とした。

また、燈がつくと尙ほ陰氣で、八幡の藪に數寄屋が顯れたかと思ふ……出口を知らず、奥深い此の四疊半、近頃たて增したものと見えて、茶色の壁の生乾きなのが、梅雨じとりに芬と匂つて、床の間には、活けて日が經つたのが二度咲をした、小さな輪の燕子花。

（ゆふしは浪の上のおんかへらせおやかのしゆびいかゞ）

と茶掛に、天地紅の擬もの、、仙臺へ、高尾のふみ殼。

鶴樹さま……御存じより。

一樣まゐる　あの字。

などゝ、……日ごろの其の、菖蒲がよこす、猛烈な手紙の狀も、面前、目にちらついて、

誰そや誰そ我が名を夜半に呼ぶ人はいづくの誰ぞ此處は神宿。

若い人は、小兒に返つて、思はず（呼名の怪）を避くると言ふ……まじなひの歌を口ずさんだ。

四

通しものゝ、皿小鉢に、干瓢、白茄子は見えないが、杯洗、銚子、猪口などゝ並んだのが、今更下宿の机の上とは似もつかないで、さながら色餓鬼に手向けた魂棚の飾ものゝやうに視められて、鶴樹は少からず減入つた顏して、人知れず獨りで後退りをしつゝ、遁道を覺えたさうに、入口を視めると、大な楯で、ドカリと額を打つばかり、面を壓した可恐いものがあつた。

二枚折の屏風の繪である。

はじめは、荒削の獅子かと思つた。それは、まだ冠の飾を置かない閻魔大王の偉なる御首である。偉いと言つても、釣合だけれど、烏帽子を被つて、袖を絞つて胡坐かいた工人が一人、傍らに、片手に鑿、片手に鑿槌を取つた、其の烏帽子がしらが、丁度、大王の鼻の下にちよぼりと見える。

此の屏風の半面は、目の覺めるやうな彩色で、十八九の柳の眉の、莟の唇の、萬丈けた、元祿姿の美人が、胸に團扇を兩袖で輕く取つて、半輪の月を抱いて、濃いまつけで差覗くやうな、下ぶせの目許が、大王の鼻の下から振向いた件の工人の目と見合つて、あはやものを言ひさうに打微笑む。

「巧いなあ。――」

引入れられさうに、ずつと寄つて、熟と視ながら、心得があつたか鶴樹は思はず口へ出して讃美した。

「あゝ、よく描いた。」

と片手づきに透したが、無落款である。

「何の繪だらう。」

京人形の其かと思ふと、一方が又平らしくなく、飛驒工匠の趣がある。第一、閻魔大王は、同じ芝居に出顯はしない筈。が、此の工人の作に擬らへた大王の面は、煙を放つて火を噴くばかり凄じい。見事な出來だ。畫工が心憎いばかりである。

「……下に散つた削屑も活きて居る。」

槌の持ちやう、鑿の、其の構へやう。……

「あゝ頰肉の其處を一鑿、一鑿……其處を。」

と、うつかり膝に握つた拳を、じり〳〵と胸前へ取つて、鶴樹は屹と肩を聳かした。が、いつの間にか、畫中の工人の目の行く處へ、心を取られて、畫の顏と二つ並んで、美しい女を視た。

「然うだ、手を休めて見惚れて居るんだ。」

と、がつかり草臥れたやうに、だらりと柔らけた手は、しかし、兩手とも、彗と當て、自から我が胸を壓へた。

――待合だから勘定を氣にしたのではない。――

渠は、こゝに、膚身を離さぬ一挺の鑿を、懷中深く呑んで居た。

「はてな。」

片手を解くと、片手で動悸を壓へつゝ、渠は我が心に瞳を落した。

半ば、さし塞いだ目は暗い。

あたりは相生の四疊半ではない。眼前に金地に刷ける霞に乘つて描かれたのは――遙に、陸奥の溫泉、飯坂の町のほとりに、返り映の紫の花の面影立つ、小沼を控へた、磴を上つた山寺――名も忘れない――仙光院と、其の御廚子なる辨財天と、ならびに、磴下のわびしげなる花屋の店で見た、都にも又あるまじき娘であつた。

今は一昨年に成つた。……

多人數ではなかつたが、一二の教授に率ゐられて、同窓が、學校から、平泉の中尊寺へ見學のために旅行した。

飯坂の湯は、其の歸途であつた。

一泊の翌日は、朝ゆつくり旅館を立つた。が、すぐに停車場へ急ぐのではなくて、思ひ〳〵に近き邊の野山を跋渉した。渠等四五人の一組は、摺上川の上流を視るために、一度十綱橋を渡つて、流に添ひつゝ、山道三里ばかりを溯つた處で、血氣にまかせて、瀧を横ぎる如く、谿河の巖を飛び、流を亂し、崖の蔓かづらに縋つて渡り返して、山形街道を大廻りに、もとの飯坂の千人風呂の處へ出た。――磨砂の眞白な俵を積んだ、歸途の馬の影を、霧を籠めつゝ鳥が塒に歸ると見るまで、日は斜に、且つ遙々と、旅の心を知つたのであつた。

草臥れた足は、思ひ〳〵に前後して、やがて飯坂の町の屋根を、葉越に見る、其の仙光院の磴下に來た時は鶴樹唯一人であつた。

松樹が下の鳥の巣に似た、山寺の小さな屋根を、何心なくふと見ると、上口に札が立つて、月……日……巳の日、開扉、辨財天――と掲示した。――其の巳の日は、既に昨日にすぎて居た。が、天女は今日もお留守ではない。……平泉に旅行して、中尊寺の辨財天に詣でゝ、麗正、端美の彫像に、崇敬と、渴仰と、且つ憧憬をさへ覺えた渠は、同じ天女の分身と言ふよりも、こゝに姉妹の姫に逢ふ可懷さを感じて、松を仰ぎつゝ磴を上つた。和尚が丹誠と見える、花壇の牡丹の根に霜除の藁が掛つて、山寺の風情を添へた。

松の落葉と、紅の木の葉を分けて、秋冷かな水を汲んだ。

額が見える。土間に立つて、帽子を脱いだ。正面の古錦襴の帳の陰に、微妙なる影がさした、が渠は草鞋穿であつた。階に腰を掛けて、熟と扉を視まゐらすうち、――（ありとは見えてあはぬ君かな。）……はゝき木の古歌を目のあたり――仔細あつて、生死のほどさへ分らない――母親の面影さへ、睫毛の露に映りつゝ、渠は思はず涙ぐんだ。

「ようお詣りなされました。」

庫裡から、襷がけで手拭を被つた、柔和な媼が出て茶をくれた。盆に吸子も添へてある。

「お一人旅かの。」

「いゝえ、學校から大勢です。」

「おゝ、それはお賑かで、結構にござります。――今晩はお湯治でござりますかの。」

「松屋へ昨夜泊りました。――此から乘合の自動車で福島へ出るんです。」

「なら、すぐに東京へお歸りぢや。」

「はい。」

「お若いに御奇特なや、ようお參りなさりました。なれど、すぐお歸りではおなごり惜うござりますの。」

鶏樹は聞くうちに胸がせまつた。

「お媼さん、失禮ですが、辨天樣の御開扉は願はれないでせうか。憚りですが、御住職にお聞き下さい。……此は、ほんの志です。」

「何の、そのやうな御心配。……けれど、なう、お賽錢のお辭儀は申されませぬ。方丈樣はお留守ぢやが、おゝ〳〵お開き申しませうとも。」

「ですが、御遠慮申しませうか、昨日、御開帳があつたばかりの處です。お鬱陶しいかも知れません。」
「何の〳〵、お叱言があれば、媼がかはつて受けますに。――貴方樣御免なさりまし。」
爾時をがんだ――
錦の帳の揚つたとは見えぬ、祥雲に蓮座しつゝ、天女は差覗かせたまうたのである。
少時して、渠がきいた。
「お媼さん、――琵琶を持つて在らつしやいます、あの。……」
「はい。〳〵。」
「お傍に、小鼓がありますね。」
「おゝ、あれはの、お住持が餘所から預からつしやつたものでございます。……ほんに貴方樣は、松屋がお宿でございましたなう。矢張りの、こゝの溫泉宿のお娘御ぢやが、それは〳〵美しい、優しいお娘が、大切な〳〵お姉さまの記念の品での。」
御廚子の中の小鼓を、美しい優しい娘の、其の姉の記念と言ふ。唯聞いてさへ、あはれに床しい、其のまゝ鞠歌の聲であつた。
「記念とは――其の姉さんが亡くなつたんですか。」
「いゝえの、今な姉さんはござるがの、それは義理のお姉妹で、其の姉のお娘は、東京で評判の女役者……さればの……女優とやらぢやけにござりますがの。えゝ〳〵亡くならつしやつた實の姉樣のお記念での、仔細があつて、預けさつしやつたでござりますが、ほんに、和尚樣より、辨天樣がお直にお預りなさりますも同樣にござりましての。」
聞くにつけても松の聲、秋の風が身に沁みる。
「では、時々、辨財天は、あの小鼓を、琵琶とお持かへに成るんですね。」

と、うつかり言つた。――
おゝ彩色した彫像は、縱に其の小鼓の丈ぐらゐであつたものを。しかも生身の美女の身丈ほどに拜まれた。
今おもへば、丁度此の待合の屏風の繪の丈ぐらゐ、と思ふと……繪の美女の胸に藏うた團扇の下には、小鼓さへかくれて居さうで、調が胸に通ふやうに、血に響く。
鶴樹は更めて屏風の其の美女に對した。
「いや、もう些とお身長い……遠い奥州の事だから、此處では此のくらゐに思ふのであらう。――が、しかし、丁度、此の繪のお身丈。」
一膝退きつゝ、狹い處に幅をした食卓臺をぐいと押退けると、重い箸の黑檀が、一閑張でぐわさりと摺つた勢で、杯洗がざぶりと溢れて、猪口の、ひよいと躍つたのが、蛙が跳ねたやうである。
吃驚すると、あゝ燕子花も床に咲く。相生の奥の四疊半が、忽ち沼に成つたやうに、若い人は、慌しく立ちながら、效性なく、ぴしよ〳〵と狼狽へて疊を廻つた。
閻魔大王は横口を方に張開いて、赫と流眄に掛け給ひ、苦り切つておいでなさる。

青絹

何しろ……急いで手巾をと、袂へ手を突込むと、ごそ〳〵と音がした。蓋し紙に包んだので。音はごそ〳〵としたが、引出す……其の包紙を溢れたのは、水淺葱の、艶かしい、女持の絹手巾で、するりと滑かに伸びたと思ふと、蛇の鎌首のやうなものがスツと男の手に下つた。
手巾の片端が、巧に、いやな形に結んである。――あの、招魂祭の夜、目口の泥を、御手洗で洗つてくれた繻が「お拭

きなさいな。」とふはりと、佳い薫で顔に掛けてくれると、同時に……實は其の陰で、唇をチュッ、と其のまゝ飛ぶやうに姿をかくした。來歴と且つ極印の据つたもので。……もし、果して其の婦が蛇遣だとすると、（アイ來た小手しらべ。）とか何とか云つて、使ひわけたまゝらしく、片端が、その鎌首なりに成つて居て、伸びても縮んでも青白い蛇の形に成る。移香も今に尙ほ消えないのを、以來革鞄に鍵を掛けて藏つて置いたのを、……今日此處で逢つて——多分違ひはあるまい——菖蒲か、其の婦だつたら返さうと思つて、いや、男手の不細工な紙包みにして袂に入れて居たのであるが。

食卓臺の水を拭には使はれなかつた。

「あ、あ。」

中腰の膝を辷つて、青い絹手巾は、ずるゝ〳〵と食卓臺の陰へ這入つて隱れた。

「あゝ驚いた——これは尋常ごとではない。」

誰そや誰そ我名を知らで呼ぶ人は……

と、まじなひの歌を更に念じた時、奇特に、漸と臺布巾も見着かつて、吻とした。……

鑿

一

……それから、あの時……飯坂の寺を出て、歸途に磴を下りた處だつた。

鶴樹は再び、繪屏風に對して、堅く成つて居直りつゝ……また思ひ續けたのである。——

薄雲が颯と掛つて、少さな沼は暗く成つた。一方の花屋は、花柿に淡く西日が射す、廂に掛けた唐黍の暖かな色を見ながら、だら〳〵と爪尖下りに通らうとすると、こゝは刺叉の辻で。突切ると湯の町だし、横通りの町は古びた屋並が左右に續いて、軒下を走る小川の水の迅いのが、十年も二十年も瞬く間に流れるやうで月日の早いのを思はせる。昔ながらの米澤街道と見る處へ、流のへりをちよろ〳〵と駈けて來た、五歳ばかりの男の兒が、音もせずに、ストンと前のめりに傍向けに轉んだ。

古びた煙草の葉の腰障子を嵌めて、草鞋をぶら下げた小店と、此方に其の磴下の花屋は斜に向合つた窪地の面に、聲も立てず倒れて居る。

秋の暮だし、此の場所とて、奥州の山路へ、鳶が攫つた小猿を落したやうである。

死んだかと思つて、吃驚して、やあ、と掛聲をして革鞄をほんと振つて、兩手で鶴樹が抱起す……起すと、火のつくやうに泣出した。

抱いた胸が、くわッと泣聲で熱いくらゐで、

「泣くな、泣くな、君は强い、坊やは强いぞ。」

と摺りまぶした泥を掌で拂つて居ると、花屋の花にちら〳〵と、たとへば鶴の下りたやうな影がさして、紅い切の島田髷が覗いて、長い項ほどな白い手さきで、おいで〳〵と恁う招いた。

「さあ、おいで……姉さんなの。」

幼兒は頭を、仰山に振つて、矢張り泣く。

其の娘は尙ほ招く。

「行き給へ、行き給へ、さあ呼んでるから。」

と胸を抱いて、背中を押して遣り狀に、娘の容色が眩いやうで、舊街道へ目を外らすと、段々上りの高い處で菜を洗つて居た婦が一人、ついと立つて、夕陽を背に、小手を翳して此方を見たのが、大江山で洗濯する京女郎のやうに見えた。

「孝ちやん、いゝ兒。」

小兒の名も忘れない……爾時娘が、優しい、人がらな聲で言つた。

「泣くんぢやありません――いゝものを上げますからね。」

ぐいと押して出て小兒の肩に手を掛けた時、小菊の色は黄と白と、コスモスの紅か、線香の影が映つたか、下ぶせの濃い睫毛のあたりが、淡く颯と染つたが、娘はすらりと後へ退つて、破疊だが日の當る、菊の葉も南天の實もこぼれたのを、裙模樣のやうに、愼ましく膝をつくと、平櫃の蓋を取つて、柱につるした一束の笹の葉を引いて取る時、のび上るやうにして、腕を伸した。雪の二の腕に色染むばかり、美しい唇で袖つけを一寸銜へたのである。

平櫃の中は飴であつた。

唯、娘は、飴の中に、幽に光るものを手に取つた。簪でない。針でない。それは一挺の鑿であつた。

飴を削つて缺くのである。

力が要りさうに見て居ると、蓋とゝもにころけて居る、小さな鐵槌を取つて、氣が入つたやうに、一つ、二つ……トントンと打つた。

雜樹は、はじめから瞳を撓めて凝視めたが、其時、兒の泣止んだのも忘果てゝ、石の如く立すくんで、鑿の響きを身に占めた。

小兒が飴を引掴むと、やあと歡聲を上げて駈出したのが、餅に響いて、寂然とした時であつた。

「お孃さん――」

此の花屋に似ない、人柄の品に、鶴樹はお孃さんと言つて呼んだ。

「……お願があります、貴女に。――私に其の鑿を讓つて下さい……否、狂人でも、妖怪でもないのです。生命がけでお願ひします。」

「……」

「私は轉んでも、のめつても、手足を折つても、粉に成つても構ひません。――あの小兒に飴をおやんなすつた御厚情で、私に其の鑿を讓つて下さい。――生命をかけてお願ひします。私は其のために活きます、强く成ります、身を立てます、立派に成ります、お孃さん。」

と言ふ「いゝものを上げますわ。」情らしい、いまの一言が、稻妻の如く光つて、鬼神の篆符を刻むが如く、胸に閃くのに、また戰いた。

「はい。」

百萬石でも手にするやうに、鑿をうけて、ハッと腰を拔きさうに會釋をしながら、

「餘り、餘り、失禮ですが。」

額にたら〳〵と汗を流しつゝ、

「如何ほど、如何ほどお代を差上げませう。」

「まあ。」

「しかし、いゝえ、しかし。」

「……いゝえ、構ひませんの、構ひませんけど、私のものではありません。」

「えゝ、此をお肯き下さらなければ、どろばうしても、自殺をしても、此の鑿は欲いと思つたんです――貴女のものでなければ猶更です……如何ほどか、唯おしるしだけでも。」

「やあ、自動車が出らい。」

「早く來ないか。――お新發智。」

三人で友達が辻へ出た。そして呼んだ。――就中、お新發智と喚いた男は、竹の杖で煙草屋の草鞋をステンと敲きつけた。

鶴樹は眞赤に成つた。

が屹とさめて、押頂いた。

「辨天樣に授つたと思ひます。失禮します。」

「あゝ、貴方、飴がついて居ます。拭きませう。」

「いゝえ。」

と逆にとつたまゝ、切尖をズバリと、口に含むと、つま尖下りに俯向けに駈出した。

「あれ、貴方。」

（仙光院へ參詣の途中、心易だてに此の小店に居合せた。これは、東京から歸つた、溫泉の旅館、銀山閣のやしなひ娘三葉子である。雪松謙吉の義理の妹。）

（――あれ。貴方――）

「あ、あ、今呼びましたか、今私を呼びましたか。」

鶴樹は屏風の繪の美女に向つて、聲を出して、言つて、我に返つて、四邊を視た。

二

「……確に此處に、其の鑿を持つて居ます、――しばらくも身を離した事はないのです。」

口にこそ出さないけれども、內懷から守袋のやうに捧げて、頸に掛けたまゝ、屏風の繪の美女に向つて押戴きつゝ、心に念じた。

此を卷込めた合財袋は、年數の立つた古代紫の縮緬で。それはいゝが、裏に鬱金の切についた處は、古里の寺に合

宿の尼樣の手づくりか、檀家の隱居が餞別らしくて、今の若さに悲慘に見える。

「……私はあの時、辨天樣がお授け下すつたのだと言ひました。今も堅く然う信じて居ます。それに就け、貴女に對しても、こんな待合へ出入の出來た義理ではありません。

第一、此處へ誘出しました婦が、招魂祭の晩に顏の泥を洗つてくれた其の人だか何うだか、それさへよくは分らないのです。また、どんなに誘はれましても、よしんば世話に成つたとして、其の恩に對して人情を缺きましても、斷然こんな所へ來て逢はうとは思はなかつたのです。

……ですが、お聞き下さい。――毎日、ひぶみ矢文で、黑川菖蒲と云ふのが寄越します、手紙の中に、近頃では――貴女の……」渠は、慇懃に、微笑める美女に對して、正しく片手をついた。……心の裡で。

「……辨財天のお名が見えて來たのです。菖蒲と言ふ女が（守本尊に辨財天の小さな御本像を持つて居る。）と言ふのです。私に逢ひたいために、茶斷鹽斷をして願掛をする最中、一夜夢に、大川を一つ隔てゝ、私と其の菖蒲とが兩岸に立つて居たと……手紙で言ふんです。水なら溺れる迄も渡るけれども、其の川には火が燃えて居た焰の流だと言ふのです。――守本尊の辨天樣は、菖蒲の身に添つて立つておいでに成つて、袖を飜してその琵琶をお投げに成ると、琵琶は、向岸の私の立つた岸で留つて、四紘の絲がすらゝと解けて、炎の中へ金色の絲の橋がかゝりました。絲の橋は燃えはしないが、炎はひらゝと搦んで居ます――とおなじ手紙で言ふのです。

菖蒲は――裾を絞つて、袖を卷いて、さすがにためらふと、天女のお姿はもう見えないで、絃の橋は、其のまゝ四條の蛇に成つて、四つの口で、渡れ〳〵と言ふのださうです。灯取蟲さへ身を焚くものをと、辨財天の御名を念じて、蛇の、を渡らうとすると、對岸の私の形は、向うむきに背いて、すた〳〵行く處で目が覺めました。口惜い。

――とまた恁う云つた手紙を寄越すんです。――

翌日。

昨夜また夢を視ました。おなじ處に、おなじ流を隔てゝ、又私と菖蒲とが向合つて立つて居た――と手紙で言つて寄越したのです。

辨天樣が、今度は、光輝く瓔珞の珠を、お取りに成つて、炎の河へ衝とお投げに成つたと思ふと、虹のやうな繁吹が立つたが、火はたゞ一時に消えて、眞蒼な深い流れに成りました。溺るゝまでも渡れます。菖蒲が飛込まうと思ふと、私の形が、今度は後むきには成らないが、岸づたひに流源の山の方へ、矢のやうに駈出して見えなく成つた……そして目が覺めたと、矢張り手紙で言ふのです。

しかし、それでも些とは嬉しい。菖蒲は、私に逢へる禁厭に、持つてるだけの球と言ふ球は、指環のも、簪のも、腕環のも、一所に絹絲に通して、ほんの、御手脈のやうですけれど、守本尊の頸へ掛けました、それを持つて、私の下宿の近所、江戸川の大曲の眞中へ投込んで歸りました。

然う又手紙で言ふのですが、――そんな事を、私は眞個にはしませんでした。

ですが、――最近――昨日言つて寄越した言には驚きました。

……まだ逢へないのが口惜いから、御本尊の辨天樣の咽喉に嚙ついて、片袖をくひ切つて、夜中に泳ぎながら隅田川の眞中へ出て、菖蒲が指を切つたのをおもりにして、水の底へ沈めにかける……

嘘だとは思つても、此には默つて居られなく成りました、はじめて返事を出したのです。

こんな處へ參つたのです。

濟みません。……眞に申譯がありません。しかし、唯今でも、私は私の仕事のためには、貴女におねだり申しました。

此の、此の鑿を逆に口に銜へて、坂を飛ぶぐらゐの信念は……覺悟は……少時も忘れずに、確に持つて居るんです。」

と、何時か、袋の結めを漏れた、其の、鑿の切尖が、「鈎鐘草の花に蜜蜂の劍の鋭き如く、電燈に光つた時であつた。

屋鳴震動――こゝに氣の凝つた室の靜寂間に、もの凄い音響がして、戸外に自動車が鳴留ると、ドーンと、扉を開くのさへ手に取るばかり聞取らるゝ。

廊下を、すら〳〵と褄を拂つた、女の氣勢。

鶴樹は何と思つたか、氣勢に壓されて、立つたり、居たり、屏風を閉ぢたり、開いたり、美女の袖に隱れたさうに縮まつたり、閻魔大王の首にすくんだり、工人の顏に目ばたきしたり、一つくるりと廻つたり、片陰へ寄る處を、入り口から衝と來た女の袖が被さりさうに、屏風を裏からトン〳〵と敲いた。其の手を上棧へ掛けて伸上りもしないで、

「ばあ。」と、濃艶な顏が眉を展いて差覗いた。

大輪の花の渦卷くやうに、疊を旋つて、香水の得ならぬ薫が芬と座に。

執着の粧

一

「おや、獅子かと思つたら。」

屏風の裏から、するりと入ると、遠慮のなさは、七年以來の馴染と言ふより、生れながらのきやうだいでもあるやうに、白粉の香を高く、彫工と肩を並べて、繪を覗いた。が、其のまゝ居直つて、食卓臺の下座に着くと、默つておとなしく俯向いた。

此の横町の入口に、二三輪咲いた石榴の花さへ……いまは其が颯と燃えて、目を射るやうな緋縮緬。……紹の藍氣鼠の無地に、銀かと思ふ白と、綠青で鱗形を置いて、紫の撞木をあしらつた江戸褄の上に、ちら〳〵とかゝる櫻の模樣で坐つた處は、撞木を膝に引敷いた執着の粧がある。

浅葱にかぶせた、一面に金砂子の襟を掛けて、更に黒白の艶かな市松の丸帶。黒に朱を通した帶留を結んだが、思ひなしか、襟も、帶留さへ、背負上の粒鹿子も、幾條か取つて扱いて、色あり、光澤あり、斑紋ある蛇を腹を見せ、背を縺つて、八筋七彩に身をしめた風采がある。

青いほど色が白い。

「菖蒲さん……あなたは——黒川さんで在らつしやいますか。」

「は。」

と言ふのも口の裡で、婦は矢張り膝に兩袖を重ねて居る。で、人の氣の着かないやうに、一寸々々と袖口を指尖で引張つて手首へ伸ばす……其の毎に、襦袢の紅の閃くのが、敢て蛇が舌を動かす狀を示すのではない。裄が些と短いらしい。いや白い腕が長いのらしい。背筋も腰も、蕩けて骨のないやうな、滑に軟かな樣子で居ながら、其の裄の短いのが、何故か、しやんとして、鱗の稜のある趣が添つた。

「先達て……先夜は招魂祭で、實に難有う存じます。」

それでも默つて俯向いて居る。

「……唐突です。間違ひましたかも分りませんが、酷い目に逢ひました。實に途方に暮れたんです。あの難儀をお救ひ下すつたのは、確に貴女だと存じます。御禮の申しやうもありません、心から感謝をして居ります。」

と丁寧に食卓臺越に兩手を支くと、疊を砥のやうに、すつと膝で辷つて、領足を深く覗かせて、繪に描いた（今晩は）の藝妓のやうにお辭儀をする。

「實際です——お禮の申しやうもありません。」

と最う一度手を支直すと、

「は、いゝえ。」

と身を起したが、菖蒲——もう間違ひはない——菖蒲は、もとの如く俯向いたまゝで居る。

接穂がないので、彫工は困つて、

「……また毎々お手紙を下さいまして……」

と言ひ掛けて、同じやうな姿を視たが、……默つて差俯向いて居ると言ふうちに、此の婦のは、何となく雙の目で笑つて居るのである。目ばかりではない、口でも笑つて居れば、眉でも笑つて居るやうだし、鼻でもと思へば、あれ〳〵、鬢を透く耳でも笑つて、胸でも乳首でも笑つて居るやうで、底知れず不氣味である。

處が、その不氣味なうちにも、可恐いもので、恁う成ると、つい男の方が魅せられた形に、だらしなく笑を誘はれて、精々引緊た筈の口許が緩んで、つい饒舌る。……

「私は——しかし實際驚きました……あなたのお守本尊だとお言ひなさるんぢやありませんか——其の辨財天の咽喉ぶえを食取つて、兩袖を嚙切つて、あなたの小指を錘につけて。」……

と……手紙でも然う言つた。婦の此の樣子を見よ。半ば聞くうちに、左の小指を、袖口へ密と祕して、ものに怯えたやうに肩をすぼめて……其の癖、目でも口でも鼻でも耳でも、それ、身體中で莞爾々々して居る。

二

「へい、お銚子のいゝ處。」

と女中が其處へ、聲も膝も一度大きく割込んだが、二人の樣子を左右に視て、

「奥樣のお酌でないと、此方は召飲らないお約束でしたわね、ほゝゝ。」

と突拍子もなく高聲で笑ひながら、

「あの、お銚は唯今——」

と風が吹いたやうにふいと出た。

「違ひます、違ひます、違ふよ。私は何もそんな事を。」

「でも、まあ、お一つ。」

と其處で、はじめて銚子を取つた、菖蒲に對して、渠が不器用に拾つたのは、例の蛙に化けかけた猪口で、蛇に見込まれたやうに、すくみながら震へるのであつた。

「あの、私にも。」

しばらくすると、今度は顔を上げて微笑んで言つた。床の間の杜若の紫が、耳に映つたやうに浮いて、目鼻立が判然と、唇が紅く目立つ、

「勿體ない。」

其の癖、目で催促をして、餘儀なく、男に酌をさせたのを、殊更に一寸頂いて、

「罰が當ります……あの、おついでに、もう一つ、罰をお當て下さいまし。」

と重ねると、酒が口紅のやうに、見る〳〵うちにほつと瞼をほかして、耳朶を最う染める——見るもの〻目には、其の色の通りやうが餘りに早い。……人間離れがして、魚か、蟲か、烏賊、海月、蜩なんどの、酒に醉ふやうで、瞬く間に薄桃色が增して行く。

「もう、一盞、お罰を何うぞ。」

「お酌——ですか。何ですか、此の銚子の酒を、あなたの杯に注げと言ふなら注ぎます。……注ぎますけれど然う一度、一度、罰々と言はれては吃驚します。——最う私は何ですか……辨天樣を何うかすると言つて、あの下すつた手紙を見て——見たものに罰が當りさうで兢々したほどですから。」

「まあ、濟みません。でも……」

と、それでも尙ほ愼ましやかに、

「あんなにお願ひ申しても、貴方がお逢ひ下さらないんですもの。……私もう口惜しく成つたぢやありませんか。」

「それだつて、……だつて亂暴です。」

「御免なさい——、またお罰を何うぞ。」

「酒ですか——注げならば、注ぎますが。」

と彫工の若先生は、粘土を捏ちるやうに銚子をば持扱つて、

「まさか、そんな、咽喉笛を嚙切るの、袖を食裂くのッて事は、眞似もなさりはしなかつたでせうね。」

「えゝ。」

と唯簡單に、一向なものである。此には、もつと說があらうと思はれたのに。

「大丈夫でせうね。」

「それは、あなた——眞似でもしたくらゐでしたら、さきへ此の指はなくなつて、此處に着いては居ませんよ。」

と猪口の緣を小指で彈いた。更に唇の色が紅く濡れて、

「身體だつて何うですか。……然うすれば一所に大川ですよ——手紙で然う言つて上げました。私……其の通りなんですもの。……今頃は底の藻くづ。……だと、もう些と髮が房々して居なくつちやあ不可ませんかね。ほゝゝ水の底の陶器の缺片にでも成つて居ますよ。」

と胸を伸上るやうにして、カチリと杯洗へ猪口を當てた。

「あなた。」

「私ですか、私は、酒は……」

「罰ですよ——私にばかり當てるんですもの……情がなさ過ぎるぢやあゝりませんか。」

「然う言はれては、……困ります。……困つたな——何うぞ少々。」
「罰は少々——御酒は澤山。」
と酌のあとを、菖蒲は一寸、斜に片手つきの、反身で居る。

三

「……それで、あなたの御本尊は、お木像ですか、金彫ですか。」
食卓臺には、西洋料理が並んだのに、と思はぬでもなかつたけれど、それを厭ひ憚るほど、渠は、清淨精進なるお新發意ではなかつた。所謂美術家の群の生活に、略年久しいのであつたから、しかし兩手を正して聞いた。
女怪の食ものには相應しからう。菖蒲は、チキンの肉刺を輕く留めて、
「そりや種々ありますよ。白木のも、彩色したのも、金のも。」
と黒目を大きくして言つた。
「そんなに澤山——お持ちですか。」
とつい釣込まれた。が、此は考へても解るであらう。
「いゝえ、其の嘘にも咽喉笛へ食つかうとなすつたと言ふ、膚身をお離しなさらないお守本尊の事ですが。」
「はあ、辨天樣のお守本尊ですけれど、心ぢやあ膚身を離しはしませんけれど、何處にも身につけて持つては居はしないんですわ。」
彫工は我が肋骨を一本、あの小刀で料理でもされたやうに、胸ががつくりと窪む氣がした。——少くとも皓齒で嚙切られようと遊ばしたを、かばひ參らせた天女である。其の守本尊と言ふのを此で拜んだら、どんな親みと可懷さがあるだらう。且つは恁うした待合の門を潛つた我身に、我と申譯の一つであつたし、加ふるに人間の慾と身勝手は……推するに天

下を横行する蛇つかひが、白い膚を離さないと言ふ天女の像である。如何なる神祕が其の製作に添つて居て、職として少き知識に、どんな啓發を得ようも知れない……と思つた。其の利己心の淺ましさに、いま更のやうに羞恥を感じて、額に露呈に、潛に脇の下にも冷汗を流した。吸ひかけたスーブも忽ち薄く、且つ膠臭いばかりである。
時に婦が、急激に身動ぎして、食卓臺の下に潛んだ絹手巾の、あの鎌首のついたのを、ずるりと手許へ拔いて取らうとした。
此の片端には、恰も彫工の手が加はつて居たのである。
渠は思つた。——人のいまだ知らない間に、やがて悟らるべき其の身の上を庇護するために、恁の如き夢ものがたりをしたとすれば、其の手段は實に巧妙である。或は其の蛇つかひたる事を、人は既に知つたとして、戀の思を擬へたとすれば、また其の執念は可恐い……
とに角、夢に、菖蒲が化したと略おなじ形をした手巾の、此の際、何かの拍子で座に顯るゝのは、すべてに紛糾る材だ、と思つて、密と袂へ押隱さうとした處を、逸早く引たくられたものである。
言ふまでもなく、此は彫工が迂遠であつた。かばかりのものを、此の場合、菖蒲が其の目で見免さう道理はない、
「あ、それは。」
と、言つたが、睫の高く見ゆるまで、瞳を深く屹と視て居る女の心を計りかねて、トロをつぐんだ。が、其の光景は、夢に、辨財天の袖に包まれた小蛇のやうではなく、妖婦が眷屬に從へた一頭の青蛇であつた。
「あなたのでせうか……實は。」
と額をかきつゝ、
「招魂祭の夜は、あんな工合だつたものですから。……何うかと思ひましたが、もし、それがあなたのでしたら、今晩お目に掛つてお返し申さうと思つたものですから。」

と淀みながら然う言つた。
判然と、
「私のです。」
と端を下げると、ずるりと蜿るのを、膝に敷く。あゝ、ぶる〳〵と褄が搖れる。撞木も江戸褄の鱗も動く、
「叱！」
「あつ！」
と言つて、鶴樹が怯えた。
「守宮ですよ……床の間の燕子花の陰に入りました。」
「はあ……」
「鶴樹さん。」
「貴方は、卑い、淺ましい、私の身の上を、よく御存じでいらつしやいますね。」
「ですが、しかし……卑しいだの、淺ましいだの、そんな事は。——決して、そんな事は。」
「いゝえ、然うでなくつて、何も、お意地惡く、こんな面當にさ、こんな結球を其のまゝにしてお置きなさるには當らないぢやありませんか。」
「飛んでもない、串戲にも面當だなんのつて、そんな、飛んでもない。——あなたが結んでお置きなすつた手巾ですもの、どんな祕密が、また其の中に……」
「然うですとも、祕密ですとも——貴方にだけはあいそを盡されまいと思つて、堅く封じて置いたんですが。——鶴樹さん。……夢を夢にしようと思つたのに。」
と裳を暗く、食卓臺の陰をするりと居寄つた。

聞くが如くんば、剩へ、燕子花の陰に守宮が居る。

山寺

「矢張り、夢が夢に成らなかつたんですわね。」
と肩に吐息を入れて、菖蒲は葉の戰ぐやうに身をしめた。が、風が荒く誘つたのではなく、たとへば池の水におのづから搖いだ風情で、亂咲いた花には何の觸りもない顏色であつた。
「——眞實の事を言ひますがね、貴方のお察しは的切當りました。……ですけれど、私は今は、淺草で藝妓に成つて居るんですよ。——つい此の頃から。……それもね、貴方に恁うして逢つて頂きたいばかりなんです。淺はかゝも知れませんけれど、丁ど貴方のお年頃ぢやあ、藝妓がお氣に入る盛だと、然う思つたものですから。」
とづか〳〵と言つてのけて、男の顏を窺ひながら、
「もう何うしたつて、貴方とは離れませんよ。」
「……」
「そんな、變な可厭な顏を……」
「そんな……、其は？」
「否、どんな顏をなすつたつて、離れられない事に成つて終つて居るんです。」
と澄して落ついて、
「鶴樹さん……貴方は、貴方が美術學校で敎はつて在らつしやる、……博士……博士ぢやありませんかね、彫刻の先生だから、大先生。其の大先生の毛利織夫さんとおつしやる方に、お顏立から、御容子から、そつくり肖ておいでなさるんですつて、ねえ。」

首を低れて、
「何うして、あれだけの先生に。」
と、男は皆までも言はせないで、
「見たいわ。私。」
と嫣然として、嬉しさうに莞爾して、
「可いぢやあゝりませんか、似て在らつしやるのが眞個だと言ふんですもの。――それだし、第一、他人のそら肖と言ふやうなんぢや、おあんなさらないんださうですつてね。」
「他人でなくつて何でせうか――師匠、先生と言ふのが、淺からぬ恩の緣のあるほかに、どんな引かゝりもありませんの。」
と判然と言ひながら、何に驚いたか、聊か聲に震をさへ帶びて居る。
「でも、毛利先生は、貴方の母樣に、大層御恩をお受けなすつたと言ひますがね。」
「まるで……私には分りません。」
「……まあ、貴方――毛利先生が、今のやうに立派な方にお成りなすつたのには、半分は、貴方の母樣のお力だと言ふんですよ。……先生がまだ、お少くつて、丁度貴方ぐらゐなお年ごろ、修業のために、國々をおめぐりなすつた時、貴方の故郷で、大川の長い橋際の、柳の下の大道に、緋毛氈を敷いて、雛市のやうな店があるのを御覽なさると、其の中に、一品、斷つて欲いと、お思ひなすつたものがあつたんださうですね。しかし、價値にしては、とても懷中の旅銀ぐらゐぢや追着きさうもなし……それでも一生懸命だし、「あゝ、欲いな。」とお言ひなさると、其處が立派な、お城のやうな、貴方のお生れなすつたお邸の裏木戸で、銅の扉の半分開いた處から、眞盛りの春の景色、浮世を覗いておいでなすつたのが、其のお邸の若奥樣。――海道一で知らないものは一人もなし、東京まで名に響いた、貴方のお美しい母樣で、お持ちなさいな。と天人がお授けなさるやうにおつしやつた……其の、何か知ら、其の一品が、毛利先生のお手に入つてから、つゝと旭の昇るやうに、お名が世間に顯れたッて言ふんですもの。――私なんかには、深い理由は分りませんが、一寸、神女、姫神樣の術讓と言ふ場面ですわね。
爾時、いゝえ、其の後前に。……母樣のおなかには、貴方がおいでなすつたでせう。」
彫工は衣の上ながら、確と懷中の鑿を握つた。――此の上にも、飯坂の仙光院の門前の花屋で、世にも妙なる娘の手から、此の鑿を強請した祕密を人に發かれたら、毛利先生と技を較べて、其の拙さに、恥ぢて自殺もしたであらう。要するに、此の事たる、先生の逸事の模倣であつた。然も神聖なる藝術の渠の前途の希望であつた。
汗は血の如く胸を透したのである。
「年の若い、寂しい、貧しい一人旅の毛利先生は、京へも長崎へも行かないで、すぐ其の場から、あとへ峠をお引返しなすつたさうですね。――不思議な事は、貴方のお母樣は、柳の樹の雛市の主――に、料金をと、一寸取りに、背戸へお入んなすつた少時の隙に、もう其の店がたゝまれて、人も影も、柳のほかには何にもない。……
お弱い、優しい母樣のお心が、そのために激しく疼んで、氣もお狂ひなすつたほど。……まあ、ね、私がこんな事を端なく饒舌るのもお胸に響いて、どんなにお疼みに成るか知れないけれど、御免なさいよ、貴方も……」
鶴樹は、いきを詰めて、無言のまゝ、何の意か、頭を振つた。
が、菖蒲は些とも猶豫はないで、
「やみの夜には人目を忍んで、塀越に、きら〳〵と金貨銀貨「お代を上げます。」とおつしやつて珊瑚も、眞珠も柳の下へお投げなすつたさうですね。……私のやうな下つたものゝ料簡では、其の中へ、一筆しめし、も、り〳〵も、歌も、花も、貴方。……端ない口で言へば、心意氣のどゞ一も交つて居たらうと思ふんですわ。」
鶴樹は杯を口に含んだ。のぼせて、唇が破れるばかりである。

「お産の紐は、霞のやうに解けました。……雪の消えるやうなお身うちから、よく赤坊が生れましたわね。一輪莟んだ梅か知ら――それが――此の坊ちやんだよ。――まあ……お産婆さんの掌の中で、こと〳〵蟲のやうな形で、おぎい〳〵……考へると、可笑いわね、私はをかしい。」

と、はち切れるやうな笑を漏した。

魔が笑つたやうに吃驚した。鶴樹は、我身にさへ夢に視ても、枕を搖つて振消すほどで、世に誰一人知るまじと思つた祕密を、恁う明らさまに話されたので、蛇と守宮が疊の上に湧いたよりも、騒立つ胸の動悸が通越して氷に鎖された蟲の如く、我が影をみつゝ、肝を冷して、靜まり返つて居たのであるから。

「……其の貴方が、三歳の時、乳母日傘で、裏門の春の柳へ出なすつた。――橋詰の小店の團子屋の媼さんが、玉のやうだと眩しく見て居て「おゝ、よく誰かに似て居なさる。ほんに、三年さきの、あの時の旅の若い人に肖如だ。」と言ひましたさうですね。それが、貴方のお父樣に聞えてから、重立つた御親類方も、成程、些とも父親には似て居ないと、それから、内々の御相談で、貴方をおくにの山寺へ――音信不通の約束でお遣んなすつたと言ふぢやありませんか。……」

「嘘です！。」

「でもさ。」

「斷じて事實はありません。――たとへ、何處かにそんな風說がありましても、……其は佛敎で說く前世の事と同然です。敎は尊いのです。確に前世はあるかも知れません。たゞ私のやうな凡人の暗い目では、見ても分りません、聞いても信じられません。」

「え、それは、嘘でも構ひませんとも。――たゞ私は、貴方とは御緣が深い、貴方さへ前世の事だと、夢よりも儚くしておいでなさいますほどの事を、御緣がなくては、知るわけには行きますまいと、たゞ是だけの事が申上げたかつたばかりなんです。――でも、月と星とに包まれたやうなお身體ですわね。」

と熟と視た。

「とに角私もあなたのお言から伺ふと、善いにつけ、惡いにつけ、いつか、招魂祭の晩に、泥の面をかぶつたのを、淨い水でお洗ひ下すつた時のやうな心持のするお話です――しかし、實に驚きました。祕密と言ふものは、自分が祕すより、早く世間に知れて居る場合がよくあります。一人で目を塞いで、夜だと言つて居るやうな場合がないとは限りません。何しろ、驚きました。餘り不思議です……何處で、何うして、貴方は、誰から今のやうな、そんな事を？」

「えゝ些とも隱す事はありません――貴方よく、御存じでせう。」

繪畫と彫刻と、麒麟と白象と、それはよし、且つ北海熊と名を取つた、美術界の大家三人の名を、葛蒲が、すら〳〵と此處で揚げた。

刺青

「向島の或お茶屋へ、私が行つて居ますとね――鄰座敷で其の三人の先生方が、お名は後で知つたんです――はじめは誰方だか、そんな事は一向私には分らなかつたんですけれど、毛利先生のお名が出て、端から鶴樹さん、一雛さん。――お新發智だの……何のッて……貴方、怒つては可厭ですよ。そのかはり、若先生とも言ひました。貴方の風說が頻に交つて、其の貴方の母樣が、暗夜の柳へ珊瑚をお投げなすつた事だの、其のために、其の兒が諸侯のやうな邸から山寺へ棄てられた事だのを、私が聽いて居ますとね――聞くものゝ身體が細布になつて、砧に打たれるやうでもあるし、巖へ籠つて斷食して、辨天樣を念ずるやうな氣もしますし、捨小舟に成つて荒浪に揉れるやうでもありました。然うかと思ふと、千鳥になつて飛ぶやうにも思はれます。それに醉つて居たでせう。

襖の繪は忘れましたけれども、田舍源氏の、あの踊の古寺へ、鬼の出たやうな勢で、鄰座敷へ飛込んで――先生さん。

私は足もふら〳〵して居ました。が、丁寧に「先生さん方……お願があつて出ました。貴方がたは、繪の先生彫刻の先生でいらつしやいませう。賤いものですが、豫て御高名は雷の如く」……何か聞覺えの口上で手をついて、「お願と言つてほかではありません。……私のいろ男の名を、繪に描いて、腕へ彫りつけて下さいまし。後生です。」と言つたんです。

鶴樹はXの如く眉を顰めた。

「誰だ、（どんな男だ）ッて、それは貴方、串戯にも聞きますわね。——其處で、貴方の名を言つたの。……どんな風に饒舌つたか、それは今、貴方の前では、如何に何だつて、些とばかり……ほゝゝ申惡い。」

と、菖蒲は手酌で、

「二人の方は苦笑をなすつたけ。色の黑い鐵拐だちの親仁さん。北海熊が其人である。

「其の方が——「面白い。入ぶくろか、刺青か、どつちが望みだ。——入ぶくろだと、齒をくひしばつて、行燈の蔭へ二の腕をまくるのだが、刺青だと乳の下を捲いて膚を脱ぐんだ、どつちだ。」つて言ふんです。「刺青です。二の腕へ」と言ひますとね、「や卑怯だ。膚を脱ぐのが恥しいんだらう、」とお笑ひなさるから、「何の、そんな事ぐらゐ、背中ぢやあ、いろの名が見えないから詰りません。だから腕へほつて頂きたいの。」「氣に入つた。次手に素裸に成らないか。むかし……幕府の末に、旗本の惡が此の向島へ遊んで、枕を賭にして拳をうつて、藝者を裸にした事がある。眞白な奴が緋縮緬たつた一つで、近所の百姓家へ遁けたと言ふのを——今夜遁がさずと此處で見よう。——そのかはり、本所の近間に、本職の刺青師に知合があるから呼びに遣る。」……あとのお二人も、恁う成らと大贊成さ。

傳を遣ると、やがて刺青師が出向いて來たのだわ。

約束通り、ついでに裸身で、酌をして、それでも蒲團を下すつた。其の上へ、かしこまると「姿が惡い立膝々々。」——で以て、腕を伸ばすと、親方が、何を彫るんだと聞くんです——鶴と思ひましたがね。いや〳〵、其の鳥は私が身を添へても高く廣く飛びさうだ。——雛がいゝ、抱くのには。「雛子をほつて下さい」と言ひますとね「すぐに仕上げるんぢやあ繪は間に合はない、字にしよう、雛と言ふ字」——

藝者衆も七八人、輪になつて見て居るなかで、靜として、……それでも貴方、髓に響く疼痛を、梯でおくれ毛を搔さながら、堪切つて刻んだんです。」

見る目を張つて、

「濟みません、が、刺りました。——もう貴方の一字は、私の肉へ食入つて居るんです。見て下さい。……いえ、お可厭でも見て下さい。——閻魔樣、御免なさい。」

と斜背向に、衝と差伸した二の腕は、緋の袖口の、飜つて燃ゆる中に、青で劃つて、凌霄の花の極印に打つたる如く、雛と言ふ字が、鮮明である。

「もうね、ですから離れられませんよ。」

と卓子臺の上へ、白く滑らかに、くたりと這はすと、ちら〳〵と動く五ッの指は、手首に飲んだ、蛇の口なる雛の羽のふるふに似て居た。

「堪忍して下さいますわね、御承知ですわね。この刺青を、貴方が御承知に成らなければ、私には何にも成らない。……堪忍して下さるわね。」

「……」

鶴樹は何にも答へなかつた。

「私は氣になる……御承知がなかつたら何うしよう。……さあ、丁と聞かして下さい。堪忍して下さるわね……よ。丁と聞かして下さいっ。——あ、然う。堪忍して下さるんでしたら、あらためて、此の上を貴方の手でなどつて下さい。——

それともお氣に召さなかつたら、此の字を貴方の手で消して下さい。——鶴樹さん。」
「考へさして下さい。」
と、男は顏の色を變へて言つた。
「今日、お目にかゝつたばかりです。」
「いゝえ、私は、鶴と言ふ字をよけましたくらゐです。一度離すと、貴方は空へ飛んでしまひます——さあ、などつて下さい、いゝえ消して下さい。」
「消すと言つて？」
と、安からず目も心も迷つて居る。
「あゝ、仕方がない。——おなじ事でも、などるには、とおつしやらないで、消す方ですか。……仕方がない。どつちにしろ、貴方、其の鑿をお出しなさいまし。」
「えゝ。」
友一人にも知らさぬものを、何時見て、何うして知つたらう。
「お大事な貴方のお道具——生命ともお思ひなさいます。それで消されゝば本望です。」
我が魂を抜くやうだが、此を否むに、此の場合、鶴樹は言がなかつたのである。
「刃をのせて……あれさ、丁とのせて、萬々一、などつて下さるんでしたら、此の上へ雛と言ふ字を書く眞似をして下さい。お消に成るなら、構はず棒を引いて、二條搔切つておくんなさいまし。こんな字ですから、然うすりや、直に分らなく成りますから。」
「……」
「消すの。貴方。」

「……」
「消すんですか。」
「私は……」
「消すんですね。えゝ。」
と手首を取つて持添へると見るまに、菖蒲は我が手で、ギリゝと引いた。
「あゝ。」
「……」
純新にして、白潔、第一の處女たる鑿は、血に響いて、女の肉の第一音を聞いたのである。
鶴樹は眞蒼に成つた。
「入つても可ござんすか。」
「何うぞ。」
と手巾で、おさへつゝ、澄して、菖蒲は手を引いた。
「大層、お話が持てますこと。——はい、お銚子。」
「女中さん、はゞかりは？」
「何うぞ此方へ。」
鶴樹はよろめいて立つて出た。
菖蒲が鋭く、
「女中さん。」
「は。」

「若先生をお通しだと、此のうちへ火を放けるよ。」

鶴樹が立すくんで見返ると、袖口を溢るゝ、青絹の手巾に、いま切つた二の腕の血の透いて染むのが、紫陽花の花のうらに、怪しき燈籠の灯の漏るゝに似て、市松の帶を、白く、黑く、鱗の屏風に、蟠まらせて、陰々として輝いたのである。

「まあ！　口惜い。」

南無三寶、世馴れない彫工の、此の若先生は、斯る時、女があとに引添つて居るものとは知らなかつた。——既に、先刻座敷に來る前に、迅く我が胸を漏れた鑿を見て取つた、其の鋭い目を知りながら、懲りずして。——こゝに、廊下の片蔭に、腰を拔いたやうに坐つて、この家の構にはそぐはないまで、錆びた鐵燈籠の灯にすかして且つ青苔を被た鐵盤の大なるに、池の如く湛へた水に、傍目も觸らず、鑿の刃を洗つて居た、雛が名なればとて蛇身の鱗に觸れたあとを。と、さらく〳〵と灌いで居た。

不意に、頭上から聲を掛けて、市松の帶、撞木の裾。——すつくと立つて、鐵燈籠の灯に、半面を、青く、菖蒲は照したのである。

「汚れたものか、何ぞのやうに、——餘りです。口惜い。」

と絹を裂く聲ともに、絲切齒がキリゝと鳴ると、其の齒の鋭さ。引くはへた手巾のあの結球が、さくりと切れて、飜つて水に落ちると、ほつれながら、鐵盤にほろく〳〵と莟んで、颯と菖蒲の花のやうに咲いた。

酒場

一

神樂坂の町は、全く開けた、いまあの棟を高く揃へた表通りの家並を見ては、薄暗い軒に、蛤の形を、江戸絵のはじめ頃のやうな三色に彩つて、（なべ）と下にかいた小料理があつたものだとは誰も思ふまい。またあつても人の目には着かなからう。尤も横町裏道の事を言ふのではない。現今カフエーにかはつたが以前は毘沙門天のならびの處に一軒あつた。其の時分は、土間はもとよりだが、二階へも客を通した。入込の表二階と、別に一間、妙に一段トンと低くなつて、敷居を跨いで六疊へ下りる。坐ると、上の室の疊よりは身體の低くなる部屋があつた。島田に結つた、あかぬけのした姉さんが唐棧柄の着ものに黑繻子の襟、晝夜帶、前垂がけで、きちんとして、酒は安くても、上手に酌をした。

通りすがりに、此の光景を思ふと、何だか、幻の雲の屋造に、絵そら事を映したものゝやうな氣がする。……唯七八年の間隔に過ぎないが、忽ちアスパラガスの緣の陰に、長方形の白い石の卓を順々に、霞に水打つたやうに並べた趣にかはつたのである。

就中、著しいのは、……うしろが岩組の崖づくりに成つて、一面の硝子戸で劃つた、奥の處の、天井が一段高い——（卽ち以前一段低かつた裏二階の小部屋の下に其が當る）——其頃だと、椀、茶碗を板頭に、お手輕料理の値段つけを張出した壁わきの床柱に、葱鮪の葱を失禮したかと思ふ水仙が竹筒に活かつたのを……茲では、硝子の中に西洋豌豆花が、給仕女の、種々なキスしたあとの唇のやうな色に挿されて、さて、その給仕は、白のエプロンで明滅し且往來する。

こゝに於て、蛤鍋の陽炎を眞中に、島田で唐棧柄の婦を思ふと、恰もそれが安價なる反魂香裡の現象に似て、一種の錯覺を感ぜざるを得ない。……それはまだ可い。もつと近代な人たちは、其の蛤鍋の風情を、鼠の嫁入の畫の吸ものを見るやうに、明い天井を仰ぐであらう。

正に其らしいのが四人。初夏の夜の十時頃の、恰も、奥の其處の卓を領して、壯に女優を論じて居る。

聞け——それは籬染子の事である。

二

麥酒の硝子杯の間には――中で周旋をするのが居るらしい――總見の切符もあれば、某劇場に目下開演中の番組もある。人物は、紺絣の羽織に、縞の袷羽織を着たのが一人と、皺だらけのインバネスを被つたのが一人、麥藁帽を仰向けに反らしたのは、美技學校の仕事着のまゝで、肩へ掛けた髪が長い。もう一人は、手織らしい單衣に古袴を穿いた脊のひよろりとした、顏の青い、目の釣上つた男で、河本と云ふ。……一見すると病身らしいが、飲む事も一番飲めば平らげる事も一番早い。校内第一の元氣で、學校の教室で教授が授業中と言ふのに、二階の窓からバシリと大屋根から渡した鐵の縱樋を抱いて下りて、燒芋を買ひに行く。然うかと思ふと、かぜ藥だと稱へて、袂に二合壜を忍ばせて居たりする。放逸、粗落とか思へば、また、可恐く神經質で、算數の術に精しい。嘗て何珊かの砲丸一彈の實價を、此の男が肉饅頭と號して貪り喫んだ一個二錢の大道燒の今川燒。幾千萬の値に比較計上して、――筆者は聞いたが忘れたけれど――延長して何千哩とかで、藏に積んで何百坪とか、精確に然も諳算して、あゝ、のべたら食ひたいな、と云つて、空腹を搖るのだが、痩せて居るから肋骨をカチ〳〵と鳴したものであつた。

しやべり始めに、急込んで吶る癖がある。

「そ、そ、そ、然うですとも、然りですとも。」

早口に尖るのと同時に、眦をピリ〳〵と動かして、卓子の緣を痩せた指で彈いた。

「拙者がだね、僕が、今川燒を食つて腹へもたれたのとは違ふよ。……假にだね……、えゝと、背後に別嬪が居るから蛇とは言はんよ、遠慮をするが、假にだね、……むかでが一疋腹の中へ入つて居ると思ひたまへ。――われ〳〵貴重なる製作が出來ますか。――むかでが一匹腹の中に居る時にだよ。……尤も、むかし、蜥蜴も、蜘蛛も屁ぴり蟲も、平氣でむしや〳〵と食つた豪傑はあつたさうだ、それにしてもです、芋蟲のぶく〳〵と肥つた奴は、何うしても食へなかつたと言ふね。然らばだ、其の豪傑の場合とすれば、かの可恐るべき芋蟲が腹の中に一疋居るとしてだ。……」

「可恐るべき芋蟲は可笑しいぢやあないか。」

と一人が言ふと、傍から、

「何しろ汚ねえや、こゝに食ものや飲ものがあるぢやあないか。」

ケケケと、河本は冴えた笑を響かして、

「そ、そ、然うだ、然りながら、そこが譬喩適切、議論的確な處だよ。豪傑ですら然りだ、況や女優に於てをや――染ちやんのお腹に。……」

「あゝ、染ちやんだと、腹が、お腹と成るんだな。」

「ほてつ腹では色氣がないよ。……お腹に……可いかい……芋蟲が一疋蠢いて居るとして見給へ。至大なる同情を以て言へば、女優が舞臺に立つ場合に、一場一齣ごとに、恰も僕たちが製作とおなじ苦心と努力とをしつゝあると言つても可い。其の場合に、今川燒と酒のかはりに、腹に芋蟲が居るとしたら何うだい、女優が舞臺に立つた時、黃色いやうな、青臭いやうな、變なおくびが、けつ〳〵と込上げて來たと成つた日には。……」

「染子が惡阻を遣つてるやうだぜ。」

と又一人が言つた。

「そ、そ、さうです、然りですとも。……惡阻の如くのべつ吐上げる次第では、臺辭も、表情も、肉體美も何もあつたものぢやあない。――染子がもしも、あの場合に强盜のために脅迫されて、汚辱を蒙つたとして見たまへ。芋蟲・蝎を腹へ捻込まれたと同じだらう。可厭なものは消化をしないよ。嫌な筍をうつかり一口食つたゝめに、一月床について、惱み苦しんだ奥さんが居る。最後に胃を洗滌すると嚙んでこなしたのが附着いて、立派な一片の筍に成つて、咽喉から出た――おまけに、犹々までであります。」

「馬鹿を言ひ給へ。」

「ま、ま、ま、そ、然う言つたわけのものだ。三年經たうが、五年經たうが、右の芋蟲は停滯して決して消化をしないからね。恐らく處女の身に取つては終生消化をしないからね。けつぷ、けつぷと、おくびの出つゞけでは舞臺に立てまい。卽ち其の妹を犧牲にして、自から潔うしたのは、大見識だ。藝術のために、一女子何かあらんやだからね。染子は偉いよ、其處が偉かつたよ。」

「眞個だ。」

「無論だとも。」

と、三人が揃つて硝子杯を擧げた。——實は玉菜苑の事あつてから、早や四年あまりに成つて居る。前にも一寸言つたやうに、其の當時は、何の風說も立たなかつたのが、女優の名の高く成るに從つて、觸るると箔を散らす胡蝶のやうに、接近する最眞等は、少しづゝ、這粉を吸つて、染子が處女たる證券の金箔の裏打にもすれば、藝術に對する自覺の權威を歎稱する。……最う此頃では、染子は劇壇の明星……は聊か光り過ぎるにしろ、出入りの紗の羅のかゝつた定紋つきの自動車があるやうに成つたから、あの（心の車）と言ふ——（大熊星）ぐらゐには、……星さへ慣らなければたとへても可い。

一人、一切のトースした麵麭を皿に控へた、——其の紺絣に縞を着た、色の白い、痩せぎすなのは、妙に、一切の麵麭あるがために、淸敎徒のやうに見える。從つてビールは水のやうである。また渠自身も、おとなしく默つて居たが、ふと片手を胸に置いて、淸しい目で三人を見た。

「——その時ですね、髮を身體より大切がつたと言ふ、若い娘さんは何うしたでせう。」

「そ、そ、然うです。其の娘は、煩らつたさうですよ。それに身體も弱し、かたぐ學校も留めて鄕里へ歸つたと言ふ事です。」

「故鄕は……何處なんですか。」

「あれは……そ、そ、然うです……飯坂だ。」

「溫泉のある……信夫郡の。」

「そ、そ、然うです。然りです。」

「あの、飯坂。」

と言つて、白い卓に、瞳が映るやうに熟と俯向いた。

此の汐に、

「何うだい、此處を引上げて、飯坂へ行かうか。」と一人が言つた。

「うむ、飯坂だ、飯坂だ。」

「おい、勘定。」

氣早に、どか〳〵と立つと、椅子が動く、靴が響く、下駄が鳴る。

「さあ、來給へ——一緒に……」

と一切の麵麭を誘ふと、

「失禮ですが——今日は母の命日ですから。」

とさみしさうに言つた。此こそ鶴樹一雛である。こゝでも、毛利先生に「容貌がそつくり肖て居る。」と評判されて、學友等は、また小毛利、小毛利と呼ぶのであるが、もりつ子に聞えて、響が惡い。處で、寺に育つた男だから、鶴樹寺と寺の字を一つ添へても呼ぶし、

「おい、新發智。」などゝも、言はれて居る。

不斷から、一寸變物扱ひにされてる處へ、今夜もはじめからの同伴ではなかつた。三人づれが威勢よく此のカフエーの

前へ顯れた時、赤城の方から何やら悄然として鶴樹寺が來かゝつたのを、どッと囃して連込んだものであつた。

「そ、そ、然うですか、御尤もです。」

日頃が日頃ゆゑ、强ひては誰も誘はない。で三人が影も形も九個ぐらゐの勢で、どん〳〵出て行く。あとへついて出た鶴樹が、つれの扉を開けた處を、

「では、――御機嫌よう。」

と、會釋をした。少し妙である。引上げて飯坂と言つたのは、何處だか知らないけれど、其處へ同行は斷つたにしても勘定は濟んで居る。……一所に戸外へは出さうな筈を――「何うかして居るぜ、お新發智――」「通夜か棚經でも頼まれらう。」「そ、そ、然うだ。」と閉めて出た扉を見返つて、三人が囁いたのは尤もである。

もとの卓へ悄乎と戻ると、食ひ荒し、飲散したあとを片づけて居た給仕が、ついでに攫はうとした手のつかない正に一切の麵麭を、ひよいと殘して、變な顏をして鶴樹を見た。

然うだらう、打水のしたゝり留まない裏の崖の岩組を背にした、渠の形が、山から谿河へ落ちたやうで、自分の前にこぼれて居る麵麭の粉を、指で搔合せて、きれいに摘んで、丁寧に火入にくべた狀が、太く沈んで燒香でもするやうに見えた。

まつたく此の若ものは、生死の境にさまよひつゝ、危く自殺をしようとする……其の日、其の夜だつたのであつた。

研屋

一

「旦那――」

「……」

薄暗い露店の前に、ぼんやりと踞んだ、旦那――と言はれたのは彫工、鶴樹である。――が、何故かうつかりして居て直ぐに返事もしないのを、薄ぼけた、爺の辯に聲は威勢よく呼掛ける。

「旦那……旦那」

……しばらくすると、此の旦那が、書生さんに變じたり、お前に化けたりするのであつた。しかし此の時はまだ故とか知らず慇懃で。

おなじ牛込神樂坂。彼處の道に、著しい濕地か、凸凹があれば、どつち側でも其の場所と思へば可い。筵をちよんぼりと構へた大道に、店には鏢、鋏、庖丁、小刀、剃刀など、鋸、鉋の類も交ぜて、いづれも赤錆びに錆び朽ちた、活計でも、戰でも、いづれ無慙や古戰場の掘出しもの。別に、目に著く古砥石を十四五枚。さて眞正面に、黑のなめし鞘の掛つた、金の定紋の兀けた、十文字の槍の、身ばかりを蛙が藺心草を振る體に、すくりと立てゝ、此の下ばかりは小櫻を黃にかへした鐔の緘毛に較へつべき、赤の破毛氈を敷いて、周圍には刀の缺鐔、拔けた小柄、栃の實、榧の實、胡桃の實の干乾びた、根づけ、緒じめを並べて居る。研屋にして而して骨董を兼ねたりと言へば、本阿彌だけれども、肝心な點がない、大道たたきの此の體ゆゑ、元の杢阿彌とでも言ひさうな。色も黑いほどには徹底せず、黃色くあきらめもしなければ、翳果てゝ青くもならない、茶がゝつた皺爺で。

右同斷な茶色で、頂邊に、拳固ほどの穴のあいた羅紗の古帽子を、ぐつたりと猪首に着て居る。露店夥間が兩側に、棧敷めかして、ずらりと夏帽子が並んで、近頃は當座卽席の洗濯さへ其の邊に出て居るのに、――尤も夜露を凌ぐにも、日射を防ぐにも、實は此の方が重寶ださうである。しかし廂のぐたぐたと垂る工合は、若い人のやつした額に似て、時々ぶら〳〵と振上げては見るなれど、矢張り太い眉を掛けて、たれ下る。

李阿彌爺は、で、「旦那、旦那。」と呼んで、肩の下から鶴樹の顔を覗いたのであつたが。

皺手の大いので、ごし〳〵と鑿を一挺、いま礪石にかけて居るのは、鶴樹が此を誂へたものであつた。

「あゝ、何」

と鶴樹は、麥稈帽を目深にして、通道を背に、踞んだまゝ、少し間を置いて、砥の上を覗くかと、顔を店へ突込むやうにして答へた。此だと何方からもよく顔が分らない。兩鄰の、一方は古雜誌の安賣屋で、口上なしの定價づけだから、いいほどに人が集つては出て行く。一方は一寸間を置いた些と陰氣な今川燒で。此の兩方の灯と背後が瀬戸物屋の明い電燈とを、件の十文字の槍の穂尖三方に受けとめる。古色蒼然として、第一此の筵に灯はないから、鶴樹が恁うすれば李阿彌にさへ面は分らない筈である。そのかはり、普通、極の惡い時や、悄氣た場合の如く、顔を横に背けると成ると、あからさまに面をさらす事に成る。ために、六韜三略にも、今の兵法にもこんな事はあるか何うか分らないが、「突喊にあり。」で目も鼻も筵の上に突込むのである。

もとより、何等か、悄氣る事、弱る事、極の惡い事があるらしい。

「いゝ刃當りだ。豪儀な鍛だ。旦那、こりや堪らねえ味の道具だね——うむ。」

と齒の拔けた口をむぐ〳〵と、うまさうに嘗める眞似して、

「此の通り、こゝで中礪を濟ませる、と一つ丁とあはせて、それから嵯峨の本山に掛けますだ。が、何しろ大したもんだ。一寸はねえな。」

と鑿の尖の砥の粉を、指さきで、ひた〳〵と一つ扱く。……節くれだつた指だけれど、仕事に撓つて柔軟である。

二

李阿彌爺は、其は可いが、すぐ其の指を拭ひもせず、其處等に轉がつた切出し小刀を取るとゝもに……膝の陰に引着けた古新聞の破包を、ごそりと開けると、異體な頭がぬつと出る。餘り唐突だから、猫の骸骨かと思ふと……然うでない干乾びた鹽鮭の頭である。其奴の鰓の方を一へぎ、ぎし〳〵と小刀でこそげて取つて、ちよぼりと口へ頬張つて、

「チヨ、チヨ。」

と舌鼓をしながら、又研ぎだす。

「うめえ味だね、何うも堪らねえ刃觸りだて。」

「御馳走ですね。」

と若先生は苦笑を禁じ得なかつた。鑿の味だか、乾鮭の味だか、恁う成ると解らない。

「いや、此は根氣精力第一の藥でね。むかし、南都東大寺を御建立遊ばされた、尊い御方が、蓑を着て、小百姓に姿を窶して、夜分に其の學寮だね。——坊さんの學問所。修行部屋を、密と御覗きに相成るとだ。——わかいが殊勝げな坊さんが一人、佛像を刻みながら、削りくづの中で「あゝ、翌日よりは何としようぞ。」と大歎息を吐いて居たと。これを御覗き遊ばされて、「上人、何を御歎きある。」とお問ひに成ると、「此の日比、鮭の頭を舐り〳〵仕事をば勵みました。鮭は目が冴え、眠氣さゝず、寒さを覺えぬ根の藥にて侍るものを。早や舐り盡しまして、あとを何としようぞ、たゞ其がために。」と言ふのを聞しめされ、越前國に鮭庄とて、それ、鮭をとる處、一ケの庄を、此の法師に御寄進遊ばされたと言ふほどの。……いや、其ほどのものだてね。」

鶴樹は何となく首を垂れた。思ひがけず、涙ぐましい事を聞く。

「從つて、……補精、益血、避邪、闢濕——とあつて、此方人等大道に夜露に打たれる身體には、此に越した藥はねえてね。炙つてじわ〳〵と沸出る油を、金瘡、火傷にも亦其の效神の如し、とある。はゝゝ、此奴は何うも向う横町の藥屋さんの口上のやうに成つたがね、眞個だて。おまけに後生のいゝ魚屋だと、たゞでくれる代ものだから、他力本願お有難だよ。——いや、しかし酒場かね、カフエーかね、……景氣よく出て來なすつた、旦那、お前さんの前で、鮭の頭

をしやぶるやうぢやあ、賣卜者、身上知らずで、餘り補精、益血でもなさゝうだてね、はゝゝ。」

と笑のなかへ、舌を調じて、むしやりと舐る。

「羨しいくらゐですよ。お爺さんの其の元氣が……此方は些とも景氣のいゝ事なんかないんですから。」

とつい悄氣て歎息して……景氣のいゝ惡いなぞは、流星の如く、飛んで消えて、渠は、實は、すぐにも死なう自殺をしようとまで思ひ迫つた仔細がある。……自殺をするのに、此の鑿を以てしようと思ふにつけ、嘗てはおなじ鑿を以て、一世の技藝を試みよう、希望があつたのに對しても、何となく、我が手で磨ぐのに忍びないで行きずりに露店の李阿彌に賴んだのであつたから。……

爺は靜に砥の面に、鑿の刃を辷らしながら、

「何てえ、……旦那、元氣のねえ。……然う言へば、お友達と其處等で一人別に成んなすつたやうだつけ。いや、又御連中は威勢が可いね。わい〳〵てつて四五人で、騷いで、伸したね……髮の毛の長いのだの、上被の濶いのだの。あの勢と言ふものは、大地震の前兆に顯れる怪しい現象か、夕立雲のむら〳〵湧上つた樣子だてよ、……若い美術家の御連中だね。」

と言つて獨で李阿彌は頷いた。爺は古いが、意味は新しい。卽ち舊習を破壞しつゝ新しい建設をするのと、沈滯せる霧を拂つて、清新の氣を漲らさんとする渠等の意氣を象徵したものと思つて可からう、割引なしに、若い人たちの光榮でなければ成らない。

言葉につけて、鶴樹は思ひ入つたやうに、とみ、かう覗たが、何處かで確に知つたやうに思はれた。此はこゝに說明するよりは、讀者にお認めを願ひたい。額の皺、目の鋭いのに、房り柔和な肩など、富士見町の待合の屛風の繪の翁に似て居るのである。

「あゝ、お爺さんは、矢張り斯道の人ですが、彫刻なぞを遣るんですか。」と沈んで言つた。

「藝もねえ。……大學校の門の前で古本を賣つた處で、學者とは言はれねえ。旦那の前で鑿を研ぐのが、決して彫刻に心得のある次第ではねえだよ、……何にしろ、人間も恁う耄けちやあ不可え。」

と言ふ口へ、がぶりと喇叭のみに遣つたのは、裾に蔭した四合罎の酒である。

夜氣を打つて、芬と香つて、

「はゝゝはゝ、何事も少えうちだ。カフエーの前で、お前さんと分れた、あの四五人の御連中は、……（飯坂だ。それ、飯坂々々）つて囃して行きなすつたが、何かね、……此から直ぐに、奥州の飯坂溫泉へでも行くと言つた突喊かね。」

「何、其の……カフエーで、皆が最眞の女優の風說が頻に出てね……」

「はあ、女役者だね。私どもが悴の時分には、お狂言師から鍛上げた、西川粂八てつた紫帽子の面長な姿のいゝ別嬪の、藝の素ばらしいのが居て騷いだつけが。……いづれ女優と言へば、藝も容色も、嘸ぞ、まぶしい女だらうね。」

「何うだか私は知らないんです。其の女優の故鄕が飯坂の溫泉だつて、話の發奮に、さあ、出ようと言つて立つたもんだから飯坂へ行く……と、成つたんです。……まさか、飯坂へ。……何處か、此の邊へ飲直しに行つたんでせうね。」

「道理こそ、さきの毘沙門樣（善國寺、神樂坂上）のあたりで忽然と消えた奴だ。はゝゝは。」

で、又鮭の頭を一削り頬張つた。今度は、指をぐいと拭いて、鹽の水を橫掬ひに颯と掬ふと、手の雫の水加減を、鞘ながら槍に透して視た、黑なめしを其のまゝに、餘所の店の燈が、不思議にこゝへ焦點と成つて映るのである。

氣を更めて衝と合せた。

三

「お爺さん、そんなに丁寧には及ばないんだよ。雜とで構ひません。」

「まあ、お前さん、默つて任しておきなせえ。決して錢金づくではねえんだからね。あの人たちと別れたんならそんな

にお急ぎなさるのではあるまいがね、……尤も一所なら、こんな處で鑿を研がしもなさるめえ、てつた、まあ、勘定だ。」

「そりや、恁うやつて生きてるうちは……」

とうつかり言ふ。

「あ。」

「何、どうせ私なんか、一晩恁うして居た處で、別に用のない身體だから……」

「補精、益血、避邪、闢濕。……第一が氣根だね。まあ、其の氣でゆつくりしなせえ。……蓑を召した尊い御方がお覗き遊ばされる事もないかはりには、鮭の頭は、まだ恁うやつて舐ぶり盡さねえ。見事に研上げて進ぜるだ。」

可し、見事に研げたら、立派に死ねよう。……飯坂なる仙光院の門前の花屋の小店で、島田髷の、美しい娘の手から奪ふやうにして授かつた時、飴のまゝ口に銜んで駈出したとおなじ覺悟を、逆に、此の神樂坂を飛下りても事は了らう。

と矢張り言ふ事は、取つてつけたやうであつた。

「書生さん。」

爺は爾時、喇叭のみに又一口、

「いや、旦那……私等は、これ、野に伏せば野伏、山に臥せば山臥、大道に伏せば大道ぶし、と言ふと又鮭の頭に成るがね、はゝゝ、補精、益血。……六部、巡禮何でもだが、お前さんたちも修業かたゝ、隨分旅をなさるだらうて。」

「あゝ、飯坂へ行つたのは、……以前だけれど、それから、去年から、隨分歩行いたんです。」

と何うも取留めがなさゝうな口振で、

「箱根へ行つたし、逗子へ行つたし、それから……福原、あの神戸の傍の……」

「平家だね……福原の都移……續いて南都東大寺……」

「……奈良へは行かないんですよ。去年は——それから、長崎だの、信州飯田。」

「飛んだなあ。」

ひよいと顔を見た目を、また砥の上へ靜に落した。

「肥前長崎から、信州飯田と……」

「それから千葉へ行つて、大宮へも行つたし、——それから赤坂から富士見町……」

「赤坂から富士見町」

「あ。」

と、鶴樹は、自分の聲に怯えたやうに、

「……富士ですよ、富士山へも上つたし……」

と言ひながら、腋の下の冷汗を、拭ふぐらゐか、拳で握つた。……思ひ餘つて、うつかり饒舌つた、その歌枕の處々には、杜若に似た怪しい花が咲いたのである。また（仔細）あつて、菖蒲ばかりが遍歷した場所もある、蓋し盡く鶴樹が恁うした穴に陷る道中の宿々であつた。

「旦那々々、」

と、李阿彌爺さんは聲で緊めて、

「それだと去年から、まるつきり旅で暮したやうなものかね。」

「別に然うでもないんですが。」

と、きよろりとして居る。

「確りなせえ。旦那。——補血、闢濕と……（舌のさきでぴたゝ）鮭の頭ぢやあねえけれど、お前さんは、お武士だと、正宗の名刀を持つてる人だ。確りなせえ。それとも、鄕義廣の寶劍かい。しかし、何とかと義廣は見た事がねえ

と昔から言ふほどのものだから、正宗として置くだ。……此方は村正、むら雨だ。」
と同じく、ぐい飲に又一口、して遣りながら、更に砥と拳を一所に睨んで、
「うむ、確に此は稀ものだよ、串戯はよして、いまに其の證據をお目に懸けようが、こんな、くしゃ〳〵とした目だけれど、研ものに掛けちやあ節穴ぢやあねえつもりだ。お前さん、大したものを持つて居なさる。」
と眞顏は洒落ではなさゝうで、
「お前さん、何うして此の鑿だ、お手に入つた、――右の名刀だと、お家に傳來と言ふ筋もあるんだが、……それともお師匠さん……旦那方には先生だ。……然う言つた方からでも讓られて御祕藏か。……それにしちやあ御自分で、此の鑿の價値を御存じのねえのがをかしいて。」
「お爺さん、眞個ですか。」
「眞個にも……まだ、私等の目は黑いつもりだ。とに角、今時のものぢやあねえ。……したゝか年數の經つた道具だつて事は、こりや言はねえでも、お分りだ。此はね、……旦那、私どもは口について言ひいゝから、弘法鑿と言ひますよ。」
「弘法鑿。」
「然れば……だが弘法大師とは限らねえ、定朝でも、定覺でも、乃至は運慶、湛慶でも、……早い處が、それ南都東大寺に夜もすがら佛さまを刻んで居た、其の坊さんでも構はねえ。私どもにや碌に名だつて分らねえが、お前さん御存じなら、何でも御自分が、此は斯道の大名人だ、神だ、鬼神だと思ふ人の名をつけて大事になさるべき寶の鑿だよ、定朝鑿、運慶鑿、何でも構はねえ……繪解を言ふと、釋迦に說法かも知れねえが……心持は、むかし其の名人たちの使つた鑿が、此の天地の間に散らばりながら殘つて居て、後代の人の手に傳はるつて事なんだ。……山奧、谷底、深い森、めつたに人跡の到らねえ處に落ちてるのを、不思議に拾ふ事が稀にある。
尤も、拾つてからは、何處を何うして、どんな人間から人間の手に渡らねえとは限らねえ理合だし、……柄も何もあるめえけれど、小刀の落ちてる事もあると言ふだよ。處を人が誰か拾はうとすると、此の鑿、其の小刀のある處には、屹と傍に附いた可恐いものが居る。……虎や獅子は日本には居ねえ……大概は美しい蛇だ、毒蛇だと言ふね、處が大蛇のぬしが、棲む池沼へは、釘の折一つ投込んでも、大暴風雨が起ると言ふほど蛇體は鐵氣を嫌ふものを、此の鑿、其の小刀に限つては、膚で引添つて守つてござる。釣鐘に龍のついた形だと言ふんだがね……いや、話は話。……こりや、旦那、何うしてお手に入りましたかね。」
時に幕の落ちた舞臺の如く、渠の瞳に映るのは、柱の山笹、飴の桶、白い手、緋の手絡、紫の帶であつた。
……蛇が守護する……
其の手から受取る時、辨財天に授けらるゝと思ふと言つて、選ぶに遑のない感謝の言葉を捧げたが、飯坂の、あの娘は、まつたく、世に言ふ、天女のおつかひ姫であらうも知れない。
鶴樹は茫然として……恁く思つた。

四

うつかりして、また返事をしない顏を、ニコリと、爺は撓めながら、例の呼吸で、砥に一滴の水を灑ぐ。
「旦那。」
「……。」
「補血、闘濕、……お前さんは、此の方は（と今度は飲む眞似）大分いけますかね。」
「いや、別に……。」
「何も御遠慮には及びませんや、おでん屋の暖簾を潛つて、ツイと出なさる處などゝ言ふものは。」
「めつたに入りやしないんだが。」

と言譯らしい口ぶりである。

「然うかね。……尤も、それは去年の事だて。……秋のはじめか、夏の取着か、其の邊は忘れたが、雨氣で蒸暑い夜だつたよ――十二時過の事だつたて。」

と疎に成つたが、まだ盛場の人通り。間遠な紺の屋根喧籠、行燈の色も形も、小さく蒟蒻に灯したやうな、おでん屋の屋臺を透して、

「あの、それ――毘沙門前の、あの店だてね。」

「あゝ、去年、あの時。……何うしてそんな事を知つてるんですか。」

「知つてるとも。――旦那、隅にや置けねえ、……お樂しみだ。」

「何……惡いと思つたから、一口飲んだけれど、私は腹が空いて居たんだ。」

「はてね。」

「蒟蒻が好きだものだから。」

とお里も知れる……眞個の事を言ひながら、矢張り茫として取留はないのであつた。

「蒟蒻。」

と又其の蒟蒻でぷちのめすやうな聲を掛ける。

吃驚したが、苦笑して、

「何だか叱られでもするやうだね。あんな事は偶です。めつたにはありません。」

「眞個だ、お前さん、めつたに、あられちやあ他のものが堪らねえ。」

「何故です？　蒟蒻を食べるのが。」

「蒟蒻。」

と又大え聲して、

「鼠が食ふと忽ち倒れる、大毒だと言ふんだが、ね。藥に成るかね、蒟蒻は。……いや、しかし人間にも何うだかね。紅い中から白い奴がちら〳〵とするんぢやあ。……旦那、――湯皮には島田と言ふのがあるが、あの時の蒟蒻は、大な圓髷に結つて居たね。」

「お爺さん、そんな事……」

「いや、私はこれ、大道の古金賞に形を窶した探索方でも何でもねえ。が、妙にお前さんの出入りへ打撞るのでね。――尤も露店も毎晩此の土地へ出すと言ふんでもねえから、然うたび〳〵な次第もねえが……其のおでん屋の時と、今夜とそれから昨夜だ。――昨夜はお前さんが、此のならびの、それ。」

前のおでん屋の時は、肩も腰も低く縮めて、人通りの下を透したつけが、今度は反對の方を、反對に、眉も鼻の下も伸びるだけ伸ばして差覗いて、

「最う歸つたな、孝行娘は。――彼これ十時か。楊枝屋の娘子の仕舞ふ時分だ――お前さん、昨夜、宵の口に、――あの娘子に、金を遣つて遁出したね。」

鶴樹は此の中でも赤く成つた。

「娘子に追掛けられて、袂をつかまへられて、其の金を返されて、人混雜の中で弱つて居なすつたつけ。御厚情は私どもが受けました。十二か三、そこいらの娘子が、たつた一人で夜店で楊枝を削つて居る。……補精。盆皿。鮭は何うだ、舐るものは。……食ふものはあるかと聞きたいてね。――處が可恐く堅いんだから、値段だけ楊枝は賣つても、施行と言ふか、慈善なんぞは些とも受けねえ。躾が可いかね、見上げたもんだ。つい、うつかり金を投げて、あとで困りなさるのは旦那ばかりではねえのだがね。」

鶴樹は昨夜――爾時、「こんなお金子はいりません」十二三の、桃割の、衣も帶もやつ〳〵しいが、目の清しい少女に、袂

を壓へられて、火の出るやうに面を恥ぢた。――鑿を與へられた飯坂の娘に、何の酬ゆる事もなし得ぬ前に、死なうとする昨日今日僅に心ゆかしに少額ながら惠んだ銀貨を、きつぱりと斷られたのであつた。あゝ、血を吸ふ蟲さへ、死ぬものの肉は嘴を倒にして避けると言ふ。自殺をしようとおもふものゝ施行を、孝子の少女のうけないのは天理である。「色魔ぢやねえか。」――ぞろ〳〵と集つた往來の中に、恁う呟いたものさへある。人はたゞ此だけでも或場合には死にかねまい。

鶴樹は顏も上げ得ない。

「さて、本山だ。」

と、爺は砥を替へつゝ、氣もあらたまつたやうに言つた。

「本名倉もあるが、山は此の嵯峨だよ。いよ〳〵これで研上げて、此の鑿の骨髓と言ふ處を見せますがね――まつたく不思議にお手に入つた。――然うだ、其處で、おでん屋の時の圓髻だが、旦那、いきなり横手から、肩を抱いて、お前さんの頸玉へ絡みついた處は、凄くて別嬪だけ蛇髓だつたね。……蛇體も其が、毘沙門樣の前だから可恐い。魔性を備へて居ましたね。おまけに……恁う言つた。……お前さんにからみついた處で私は商賣用だから耳について覺えて居るが「また鑿を洗つてるんですか。」

たしか、「又鑿を洗つてるんですか。」と恁う言つたがね。蛇體で魔性の、あの別嬪から、何うかしてお手に入つたとでも言ふんぢやねえかね。それが惡いとは、決して言はねえが、不思議だてね。第一、手でも絡めば胴でも卷いて、眞紅な裾で飛着いて煽つた工合と言ふものは、空は暗いし、色は白いし、ありや、さながらの飛天夜叉だ、蛇でも草を這ふ奴ぢやあねえ、雲を飛ぶ奴だ。飛天夜叉だ。」

何と、飛天夜叉と言ふか、飛天夜叉？

客僧

思出す事がある――

鶴樹が年紀九つぐらゐの頃、故郷の――寺格があつて可なり大い――寺に、半年ばかり寄宿した旅僧があつた。小兒心ちは、（につたうさん――につたうさん。と呼んで居た。）普通、日の字のつくのは日蓮宗の出家に多い。其處で何の氣もなしに、法華の坊さんだと思つて居た。鶴樹の寺は天台である――が、あとで分つた。此は多年支那から印度の方へ渡つて居たのを、僧たちは昔のまゝに言習つて（入唐）と呼んだのであつた。もう一つ陰の渾名を三目入道と呼んだ。一議もなく、化ものに聞えるけれども、然うした意味ではない。右の腕に疵だか、刺青だか、朱をさしたやうな滲んだ斑點が、ほた〳〵と三點あつたからである。

何だか怪しい坊さんであつた。

この坊さんが、或日町へ出て、夜に入つて晩く歸つて來たが、まだ寢なかつた鶴樹の寢床へ飄然――寺は廣いから廊下を渡るのを飄然と言つても可い――と來て土產を遣らうと言つて、後で考へれば珊瑚珠らしい、小指の尖より圓くて、大い、棗形の珠を出して、これは町はづれの、大川にかゝつた、長い橋の袂の巨柳の下を暗がりに通ると、空から星のやうに落ちて來たのが、法衣の袖に留つたのだと言つた。

――（いま思ふと、血が凍つて碧い氣がする）――

新發智の一雜が、稚く、「お珠數にするのか」と聞くと、坊さんは、「いや、簪の珠だ。」と言つた。女の、「可厭だそんなものは要らない。」と手にも取らなかつたのは――かつは、其を摘んで出した痩腕に、例の三ッ目の朱の點のある蛇が化けた笛のやうで、一方ならず不氣味だつたからである。

然も頭を振つて「嘘だ、嘘だ。――こんな桃色の珠が天から降るつて事があるものか、(――生意氣に)――そんな不思議は屹とない……學校の先生に聞いて見るが可い、」と鶴樹が云つた。坊さんは眉を顰めて苦笑をしたが、言つて聞かさう。新發智聞け。と言つて、――それから話した。

支那から印度へ、日をかさね、月を重ねて、徒歩して行く途中であつた。一日、爽に晴れた朝である。海岸を離れた人なき處を八九里行くと打展いた野の眞中に、何の樹とも知れない、天を摩する枯樹が一株、いかなる大船の帆柱にも、世界の煙突にも、それだけの高い樹は嘗て見た事がない。丈は凡そ三百丈、周圍は大人が兩手を開いて二十人ぐらゐで圍むだけある、梢は晴れた空を貫いて、幹には雲が掛つて居た。

處が、此の樹は、中が空洞であつた。然うでないと、天から地へ釘を刺して鎖ぢたやうに、息が詰つて、もう前へは進めなかつたであらうと思ふ。攀ぢるやうに根を踏んで、下から其の空洞を覗くと、廣い穴藏へ入つたやうで、中は眞暗だが、穴は眞直に梢まで通つて、星のやうな青い空が覗かれた。

振返り〳〵、此の樹が、やがて其の丈の半分に、野中へ沈むぐらゐな處まで前へ進むと、遙に野の末と青空の連る處へ衝と點じて、紅く湧いたものがある。

坊さんは、眞白な馬が、血を浴びながら足を擧げて狂ふのだと思つた。風よりも疾く目前へ斷けて近づいたのは、袖も襟も裂けて飛んだ、膚の滑な、白い婦で、緋の裳ばかり、火の散るやう蹴開いた。すはだしで、長なす髪が、颯と颱のやう捌けで、靡く。――坊さんを視ると「生命を助けて助けて。」と、うら悲しい聲を上げた――「やゝ、何としてお助け申す」と言ふと「後から追つて來ます。私のかくれた處を……默つて。」と叫んだ姿は、またゝく間に、其の枯樹のうつろへ隱れたのである。

口に經文を誦しながら、すた〳〵と、坊さんがさきへ二里ばかりを進むと、漸と野は盡きたけれど路は一筋、渺々として果がない。

前途へひらりと顯れた騎馬の將軍がある。逞しい驟騏に乘つた、白銀の玉でつらねた甲冑を、胴細く犇と鎧ひ、白羽の矢に漆の弓を持添へた毘沙門天のやうな神將。手づなも捌かず、駒を飛ばして、一脚に、半里、また五十町、颯と十丈ばかり雲に昇り、衝と低く又地を踏みつゝ、大地を波がしらの寄するが如く打つて來る。

「客僧、ものを聞く、姿を亂した、緋の蹴出しの女を見ませぬか」「はゝッ一向にあひ見受けませぬ」「いや、隱さるゝな情は仇です。彼は人を傷け損ふこと既に九千萬に及んだ飛天夜叉です。彼等の徒輩八千餘。其處へ遁げたは巨魁です。天の命を蒙つて、彼を追ふ、追かけ騙立て、沙佗天よりこゝに八萬四千里、此の七日ばかり一睡もしないのです。――かくしては不可ません。」と言つて、矢を、弓手に取添へると、氷のやうな玉の兜の目廂に輕く片手を翳したは、其にさへ汗ばむ汗を、爽かな風に拂つたのである。

坊さんは、此を視ると、默つて、下に居て、枯樹を指した。「あなた方人間と心が合はぬと、夜叉のかくれ場所は、われ等にも見えぬのです――珍重。」と言つて、一煽り、駒はふいと空を乘つて、忽ち降つたのは遙に其の樹の根であつた。將軍は、ッと馬をのり放して、雪の輝く如く、鎧の袖ぐるみ半身を其の空洞に入れて、高く窺ふ體に見えたが其のまゝ、甲を搖直すと、再び馬に跨つて、外圍をする〳〵とめぐりながら、幹をぐる〳〵と、樹について、次第に高く、樹の半ばなる薄雲を、驟騏のひづめが抽いたと見ると、一點の緋色が空へ遁げて梢を離れた。

離れて飛ぶのを、追つ狀に衝と昇ると、ぼつゝり唯紅いものゝ蜿るのに、ちらりと一片の雪がかゝつた。其は、矢羽がせめた影らしい。……其れなり少しづゝ雲漢を尙ほ上つて、やがて碧空に消えたのである。

少時すると、風もないのに、坊さんの立つた空中からたら〳〵と、三四點、眞紅な大粒な露が落ちた。

――話すとゝもに、坊さんは腕の三の朱點は、赤い目を一度に三つ睜いた。

鶴樹は、きくうちに凄く成つて、ぶる〳〵と震へて突臥した。其の肩を抱いて、異しき僧は「此の宇宙は廣大ぢや、此から見れば柳の下へ珊瑚の降るなぞは何でもない。よい兒ぢや、よい兒ぢや、世の中に不思議はないなどゝ思ふまい。」――

海道裏

一

「――飛天夜叉、そんなものがありますか。」

幼時の記憶が暗中に稲妻の如く閃くのと、此の問の口を衝いて出たのと殆ど同時であつた。

爺の手は研ぎ進んで、光を放つやうに見える。

「言語が變なら、通魔と言つても可いてね、別はねえ。――お前さんを、あの時、おでん屋で引抱へた、緋の蹴出しが的切それだよ。私は見て居たが、それから直ぐに、そら其處の。」

と顎を上げると、鶴樹は思はず背後を視た。

――水菓子屋に鄰つた、自動車屋の廣土間に、乘らうとする若い會社員の醉つたのが二人、舞踏の眞似をして居た。

「あの、自動車へ、お前さんを引釣るやうにして、別嬪がボンと乘つた。黑雲には馴れてゐね。すぐに耳朶へ頬邊を押つけたつけ、忽ち大風を起して、ぴゆう〳〵と飛んだてね。旦那の情婦でも、御新造でも、飛天夜叉でなくつて。……お前さん――其の煽風で、皺びた爺が、ストンと腰を拔いた圖に成る處を、沼津の平作、やつとこなと踏堪へたのは、鮭の頭の效能だてな――へ、あれから、孰方へ……。」

と、きよろんと聞かれて、うつかりして、

「大宮。」

と言ふ。

「仲仙道――板橋、蕨、浦和のさきだ、ほう。」

鶴樹は歎息を新にして、

「考へると……箱根で、大涌谷の、硫黄の立つ上を、巖角を一所に傳つた事なんか、眞個、空へ攫はれたも同じです。しかしそれは假令です。……眞個に、飛天夜叉とか言つてあるんですか。」

「現に見たよ。」

「お爺さんが。」

「聞きなせえ。そんなに古い事ではねえ。長門壇の浦づたひの山奥へ狩に分入つた人がある。藩の弓術の先生だね。家來を一人連れて居たが、所々を狩廻つて當日一向に獲ものがねえて、――日は斜に成る。……秋風は冷く吹く。もう歸らうと言ふ時、切立の崖へ出た。此の、お前さん、覗くと身に震への出るやうな絶壁を、中に隔てゝ向うにもまた崖がある。霧が薄くかゝつて居るんだ。――其の向うの崖へ一雪頽の巖山の根に大な洞穴が一つある。堪らねえ、いゝ薫が、其處から吹いて來るやうに思つて、立つて居ると、なよ〳〵とした、それは〳〵艶麗な婦が一人、こもの體の男に手を引かれて、暗い中から外へ出て來た。やゝ、希有だ、が、幽靈でも、變化でもあゝ華奢では、手だすけがなくつては歩行けまいと思つた。

が、大違ひ。――引立てられたは、罪人か、人身御供か、囚らしい。……引出すと、帶を解いて、眞俯向けにした。其の時も、これは平家の落人が、いまに浮ばれず迷ふのを、鬼が苛むかと思つたさうで、然うぢやねえ。白い膚を紅い切だけに引むくと――可いかね。

崖ふちの大木の蔭に、巖に腰を掛けた野袴の人體で、別に一人小侍を從へたのがあつて、鞭を渡すと、小侍がさあ……引伏せた婦を、ぴしり、鞭だ。お前さん。肉の裂ける音だ。昔話に聞く、慘たらしい女郎屋が、世間體を忍んで、こんな山奥へ引立てゝ賣女を折檻するかと思ふが、巖に掛けた野袴の人品が妙に氣高い。姿は見えるが、谷向ひだから、此方は息を凝すばかりだね。ヒイ、と言ふ泣聲が谺に響く。やがて血だらけな女を押轉がすと、小ものがづいと又洞穴へ入

つて、一人おなじやうで、些と若い女を引立つて出た。帶を解く、衣を褫ぐ、ぶちのめすのだ。三人四人、五人目の悲鳴が身ぐるみ、血ぐるみ、深い霧に包まれると、忽ち寂として何も見えぬ。

家來に鐵砲は持たせた。が、師範役のお侍は、弓を取つた。目印にしようと思ふ、枝だと葉の中へ紛れるので幹を下の方へ狙ふために、膝をついて、射て、矢を三筋まで、射込んで歸つた。

翌日、朝から人數を催して、谷一つだが、七里も八里も廻り道をして、向う崖へ、漸と日暮方に廻つて出た。矢は三筋とも、大木の幹に其のまゝで、風に鷹の羽がキリ〳〵と鳴るのに、地獄の狀は針ほども何にもねえ。洞穴もある。が、落葉朽葉はいつ散つたのか、積つたか、色葉には早し、血の溢れたあともねえ。雲ばかり、高い峰に白かつた。」

二

「飛天夜叉だ、――白い女の通魔を、神がお懲しなすつたんだらうと言ひます。――

私は其奴を知つて居たんだ、知つては居たんだがね……其の場に臨むと。」

と息繼の喇叭を極めて、

「東海道を横へ切れた、裾野づたひでね、お前さん、甲府へ拔けようとする、精進湖あての、あの大並樹を、片側雪どけの谿河について――邊鄙な舊道だ。半日歩行いたと思ひなせえ。大雨のあとだつた所爲だらうて……崖くづれがあつて道が可恐い激しい谿河で打切れてゝね。隧道を開けねえでは行くさきへ拔けられねえて。尤も危險さへ覺悟なら、崖がなかれ込んだ突端を、谿河を渡つて一廻りすりや、また前へ草鞋が細く續くんだつけが、その片側が、大木のすく〳〵ある が大きな森だ。どうやら其の中が潛れさうだから――道は行詰る、錢はなし、腹は空く、暮れかゝる。こんな時だて、樹の枝に荷物の結玉を引掛けて、それなり窮鬼に取憑かれちやあならねえと、肩へだらけた奴を、胸へ緊乎しめ直して、のそ〳〵と其の森林を、お前さん、八重くゞりに潛りはじめた。いや暗いわ〳〵。――漸と遠くへ……薄あかりが朧朧と映したと思ふと、大な水さね。……其の明でふいと見ると、女郎蜘蛛の精が化けたのかと思ふ、綺麗な女が、半分眞紅で石の白いやうに、お前さん、朽木の横倒れの上へ仰向けに成つて居る……が然うぢやあねえ、帶も肩も取亂した、いぢらしい姿態を、無慙に壓へつけた男があつてね、ぎら〳〵とする刀を、胸へ突つけて居る處だ。

場所がらだ。博徒か、土方か、酌婦に刃傷すると思つたので、やあ、これは……」

と發奮にかゝつて、皺びた脛を踏張つて、

「聲を掛ける隙はねえ。いきなり飛込むのは恐怖ねえ。手馴れた荷物の結玉を解くと、大事な砥石だけ懷中へ辷らかしたわ。さあ、出刃庖丁、鋏、小刀、三錢づゝだが切れものは選取だ。風呂敷に引包んだまんま、パッと其双に投着けた。」

と勢で、店を横に打拂くと、如法の刃ものゝがらくたが、カリ〳〵と鳴つて、さつと亂るゝ。ともろともに、看板に押立てた十文字の槍がストンと倒れる。

變な顏して、横目でじろり。

「と云つたわけだ……お前さん。」

と這身に伸懸つて、揉くちやの毛氈の皺を伸し〳〵、槍を眞中へ立直して、密と叩いて、鞘態を直して、撓めて視て、

「考へると早まつた、慌てたね。」

と凹んだ顏。やがて砥に、膝を正しうした。

「何しろ……だがね、森の中へ、千の矢さきと、降りかゝるんだ。刃ものゝ驟雨、お前さん――切れようが切れまいが刺さらうが刺さるまいが、頭からばら〳〵だらうぢやありませんかい。

乳の下あたりを刺さうとして居たのが、此の不意討に氣を取られて、刀も引けば手も離した。一呼吸の隙に、押ぶせられた女は、つゝと立つと飛上つて、炎が枝へ絡まるやうに、裾を宙へ躍つて遁げて了つた、と思ひなせえ。

「慌てもの。」と言つて、刀を搾へて、其の時に、屹と私を見なすつた、矢大臣のやうな面を、と見ると、烏帽子、裝

束、神主樣だて。はてな、成程、慌てものかな、ほい此は――「慌てもの、人間ではない、彼は鬼だ。飛天夜叉だ。あの魔のために、何千の人が損はれたと思ふ……時來つて身が取つて滅す處を、汝の粗忽から、わづかの隙で遁したぞ。」可恐い顏もせず苦笑して「殘念。」と太刀を納めて、悠然と森を出らるゝと、渚に寄せた船にめした。漕手は見えず、大雨のあとの、さゝ濁つて、波のだぶ〳〵と蜿る水を、蘆陰へ、次第に見えなくお成んなすつた。

仰の如く、神樣がござると成ると、人間は圖々しいてね。そんな不思議を視ながら、それ、夕立の雨を一枚、一挺、一粒づゝ、のめ〳〵と又拾つて、それから拜んだがね。女夜叉を見たさに、空腹さを忘れて野宿だ。

まつたくの神ぬしが、何處かの娘か、女房か、おどかして居た處だと言へばそれまでだ。が、話は聞いて居たしまざまざと見たし、聞いたし……此奴が、それ飛天夜叉だ。」

鶴樹は幾度も頷いた。

「――旦那、感心をして聞いちやあ不可え。爾時、私は決して後悔をしないんだ。人だすけの功德をしたとも思ひはしねえが、人間のために、夜叉を退治て下されまします、神主樣より、何だか、夜叉の遁げた方が嬉しい氣がした。――其の料簡方だから、いや、夜露に恁うして人間の茸を生す――名づけて、爺茸と云ふさうだてね――

茸と言へば、お前さん、森の中へばら撒いたと言つて。私が拾殘しの刃ものゝ中なんぞにあるやうな――此の鑿を、お前さん、そんな鑿だと思つちやあ不可えてね。――空かける、地を飛ぶ夜叉の、袂からは落せばとても……」と言ひやめて、少時して、鑿にきり〳〵と拭を掛けた。指を清めて、ふッと塵を吹くと、刃尖を掌にひたりと當て、燈に照す瞳が光つた。

默然たるまゝ、鼻の前なほ遠い處から呼ぶやうに、恁う鶴樹を手招きする。

引きつけらるゝやうに、招かれたまゝ、ぐるりと廻つて、爺さんの肩に並ぶと、

「御覽なせえ――研澄した刃の冴に、にほひに、龍膽の花びらが見える。おゝ……」

と言つて、帽子を拂つた。

短い白髮が、此の氣の蒸す灰色の夜を、颯と冷く凍らして、霜を結んだ感がして、頰を並べて居た少き彫匠は悚然とした。

やゝ更けて行く露肆の灯は、暗き谷間の星に似て、往交ふ人通りは、黑き水の低きに流るゝ氣勢があつた。

「旦那――此の體の、鑿また小刀に限つて、鋼の光に、……一輪、一輪、一輪づゝ、人跡のまれな、高山の、天女の小樓、山神施獲子、玉桔梗、銀の梅鉢草なんど、碧空の雪に咲く、お花畑のお歷々の花の影が映つて、おのづから刃に露れると言ひます。」……と且つ撓めつゝ、

「此は霜に咲いた龍膽だ。――分るかね、分りますか。」

「……」

「ずつと寄つて。」

と言つて、李阿彌爺さんは、彫工の瞳を明かならしむべく、店の十文字槍の鞘を、パッと拂ふと、――見事に晃々と研いであつて――四邊の電燈の光を召んだ。

月の鋭く流るゝが如き影に、鑿の刃尖に、龍膽の花一輪、霜を浴びたやうに紫を凝して咲いた。

「お爺さん、――其の鮭の頭を私に下さい。」

彫工は屹と言つた。

行燈部屋

一

「お爺さん――其の鮭の頭を私に下さい。」

「――（また貴方鑿を洗つてるんですか）……お爺さん……私は、蛇つかひの、その婦に其を一言いはれると、最う何うする事も出來なく成るんですよ。何うしても、この婦の言ふ通りに成らなくては、濟まないやうな羽目に成つて居ますんでしてね――お爺さんが、先刻言つた――此地のおでん屋の時が、矢張り然うなんです。また冷かすかも知れないけれど、此方は蒟蒻を一串食べようか何うしようかと、暖簾の前で考へて居た處を、いきなり此の横町から飛出して……」

こゝに鶴樹が、露店の李阿彌と膝を組んで……かく話して居るのは、毘沙門天の横町の、蕎麥屋なる二階なのである。

「のつけに其をです――（鑿を洗つてるんですか。）を食はせるんですからね。自動車に乘せられたつて、……大宮まで連出されたつて、何うする事も出來なかつたんです。……醜態でしたね。」

「いや、見事であつた……がね。」

と――不思議はなけれど、妙な好みで、爺さんが自分で頤を出して誂へた、あたり芋をつるりと遣つて、

「はてね……（また鑿を洗つたんですか、あびらうんけんそわか）と……まるで呪詛を掛けるやうなもので、忽ちお前さんの五體が痺れる。不動の金縛り……は勿體ねえ。雜と妖術にかゝつたと云つた形だね。」

（あびらうんけんそわか）と附ける……

「まあ、然うです。」

と、ぞくりとしたやうに、若い彫工は身震ひしつゝ、

「言譯をするのではないんですが、先刻も此處へ來てから、一寸話をしたやうに、はじめて富士見町の待合で、其の婦に逢つた晩です。――何しろ恩を受けた、とまあ言つた人の腕へ、觸つたゝめに、鑿を手水鉢で密と洗つてる處を、當人に見着かつたんですからね……水盤の水は湯に成りました。顔から火が出たやうで赫として、私は極が悪かつたんです。

――婦は「まあ、口惜い、餘りだ。」と言ふ。實に無理はありません。――誰にした處で、自分の身へ觸つたものを、右から左、他が蹂で洗つたり、淨めたり、何か、不淨なものにでも接したやうな、扱をされりや癪やみだつて怒ります、怒ればまだ可い。口惜がられて怨まれては、何とも計らひやうがなかつたのです。

爾時、口惜しさうに熟と視た婦の目は、漆をさしたやうでしたがね、何だか、ピカ〳〵と光る網にでも射すくめられるやうな氣がして。

「はあ、佛樣だと白毫だ、飛天夜叉は尻尾の働き、狐火などゝ言ふ類だ、凄いてね。」

「私はのめ〳〵と、もとの小座敷へ入つて、默つてツンとして居る婦に詫言をしたんです。が、とつちて居るから屏風の繪の美人に鼻が打附かる、慌てゝ向直れば閻魔樣と鉢合せをするし、身體一つ狹い處に持扱つて、二つばかり廻りながら、御挨拶をして（身にかへてもと思ひます、此の鑿に、よく〳〵事情もありますが、口へ出しては何とも言ひやうがありません。何うしたら可いでせう。）と投掛けて言つて見ました……婦が横を向いたまゝ、じろりと視て、小さな聲して。」

「ほう。」

「莞爾して、（今夜、お泊りなさい。）と然う言ふんです。然うすれば許して上げると言ふ意味です。」

「道理だ――さて……穩でねえ。」

と、杉箸を横に閂に持つて、目前に垣を造りながら、爺は唇を曲めて笑つた。

「私は吃驚して、何にも言へない。其邊を睨して居ますとですね、（此處がお氣に入らなければ何處へでも、貴方のお宿へでも。）と澄して言ふ工合が、赤城下の私の下宿へ一所に押して來かねない樣子ですから、（逗子から電報が來て居ます。）――拙さも此上はなからうと思ふ事を饒古つたんです。卽座に他に何とも言ひやうがなかつたもんですから――豫て病氣保養に行つて居る伯父が容體が悪いので、直ぐに來いと言ふのを、お約束をしましたから無理に待合へ參つたわけです。時間も經ちました。（いづれ生れかはつて、……お禮もお詫も申します、御免下さい。）と又お挨拶をすると、……默つて居

さうもない婦が、何にも言はないで、それでは直ぐにお俥を、と言つて女中を呼んで言ひつけました。辭退をしようにも丁ど雨が降つて來て、私は雨具を持たなかつたんでせう。

髮を洗つた事から、妙に座が白けて、さあ、其の俥を待つうちの對向の間の悪さ。しばらくの間ではありましたけれど。——雨が、ざつ……と半分明く、半分暗いやうに戸外で降つて、繪の美人の顏は可懷いやうに明く、閻魔樣の方は暗く蔭つて目ばかり光る。小座敷が其の暗い方へ引傾ぐやうに見えて、私は頭がふら〳〵しました。

「屋臺は脆弱だが、此處は先づ平だ。」

と三つ重ねた蒸籠と一所に、兀けた廣蓋の端を壓へて、爺さんは欄干越に、十二時過の表の町に深く成る靄を覗きながら、合點々々をして聞いた。

「婦はと言ふと、手も足も兩方の乳さへ一つづゝ、(笑つた)のと(怒つた)のと、柔い白い膚を、餅か團子にして積重ねた、……それが派手な裾模樣を着て、眞紅な八口だの振だので坐つて居るやうで、少し強い雨の響きにも、すぐに其の(笑つた)と(怒つた)とで積んだ身體が、一齊に屏風と一所に私の胸へ崩れて來さうで、怯乎々々しました。

俥が來たので、見得も外聞もありません。待合の廊下を駈出して、急いで乘つたんですが、おなじやうに幌の掛つた俥が格子戸の前に、並んで一臺ありました。送出した女中と、別に、待合の女房らしいのと一所に、其の婦が框へ膝を支いて、(お靜に。)などゝ言つて居ましたから、俥は揃つて居ても、……まあ難有い。確に婦は別に歸るんだと思つたんですが、それにしても、車夫は、何にも言はないのに、九段坂を下りますから、こゝで赤城下へ向けようか、いや、どんな又廻しものであらうも知れない、とすると心持が悪い。とに角逗子へ行く分にして、中央停車場までと思つて、默つて居ると、俥は何がなしに牛ヶ淵へ掛つたんです。幌は掛つて居るし、雨は激しく成るし、何も見えないけれども、ひた〳〵ひたひた、と直ぐ背後へ足袋の跫音がして、もう一臺、俥が附着いて來るやうで、暗さは暗し、牛ヶ淵と云ふのが此の時ばかりは凄かつたんです。

常磐橋で、燦と明く成ると、あらヨと、俥夫同士が聲を掛ける、きら〳〵と幌が光つて、蝦蟆が電に虛空を飛ぶやうに、轅棒が二つ並んで、——並んだと思ふと、又あとへ退つたんですが、確に一臺ついて來て居るんです。まさか、それでもと思つたんですが、」

「息繼に一杯……さあ、呼吸が發奮む、いや大丈夫、鮭の頭がついて居る。補精、益血だ。旦那、然うは言ひなさるが、先刻から見て居ると、大分飲酒る、手際がいゝよ。」

と左の指の股を、頤から鼻へ充分に擦けて言つた。

「飲めるには、いつの間にか飲めるんです。」

と、しかし、まだ寂しさうに兩手を膝について居た。

「何しろ對手が、然う言つた、對手だからね。」

と助太刀せぬのを遺憾らしい顏色で、今度は呷と一つ呷つて、

「處でと、場所も出來てる。……其處が雙六の振出しだ。賽の目は、ゲと出たかね。」

と蒸籠の陰で、疊に變な手つきをする。

「まさかと思つて俥から出ると、影の添つた形で——本體の私の方が薄ぼやけて、影の方が打覆けた色繪具のやうで、黑い前髪と、飛模樣の胸と、市松の帶で、ひつたりと、私の背中へ附着いたやうに、其の蛇つかひの姉さんが。」

「成程……」

「澄した顏をして、(切符を買ひますから、一寸此を持つて居て。)ッて、ハイカラな涼傘を渡すぢやありませんか。(いや私が買ひます。)と言ふと、(二枚ですよ、間違へないやうに。)……私は帽子を脫いだんです。」

「唯……遣つた處だ。」とて、李阿彌は白髮の禿の頂邊をすぺりと撫でる。

「だらしもなく落した洋杖を、えゝ危えと、人が突掛けて、一つ撥ねて跨いで通る、あの混雜の停車場です。慌てゝ拾

つて。」

「ほう、ふう。」と、含むが如く、甘さうに飲んで居る。

「無暗とあやまつ了ひました。――（御免下さい。伯父が居る處へ、どんな事をしたつて一所に行かれますか。）と言ふと、

「旅籠屋は一室ばかりではありますまい。伯父さんの御保養さきは旅館だつて言つたぢやあゝりませんか。十萬里走る颱風だつて山へ打撞れば二つに分れると言ふんですもの。旅館の玄關で別々に成りませう。」……其處までは離れない、一所に黒雲に乘つて行く。……私が逡巡して居ると……「また鑿を洗ふんですね、それなら、私が辨天樣の咽喉笛へ食ついて一所に沈まうと思ふ、せめて隅田川にして下さい、相模の海には及ばないでせう。……さあ、切符を。」と背中へ附着いて、肩を敲いて、兩手で腰をおして、ぱつ〳〵と緋の裳を左右に捌く形が、何うしても、人形淨瑠璃の女太夫に、のろまが扱はれて居るやうです……あの人群集で、皆目を着けます。遣切れなく成つて、――一所に逗子へ乘りました。最う其の時から婦のいゝやうにされたんです。」

「成程、（また鑿を洗ふんですか、そわか。）の件だ。いや、しかし些と耳が疼い。――此の爺に（鮭の頭を下さい。あびらうんけん、そわか）で、蕎麥屋へ連込んだ術が、矢張あびらうんけんだ。そわかゞ蕎麥かに似て居るので、少々此は工合が悪い。尤も……先生に散財はかけねえが。」

と、一寸眞顏に成つて言つた。

瑠璃が紫の霜に凝つた幻の花一輪、龍膽の影が鑿の刃に映つた時、此の彫工が屹と成つて、「お爺さん、其の鮭の頭を下さい。」と言つた。――眞夜中に佛を刻んだ堆き木屑の中の南都の法師にあやかるつもりか。夜店の爺の爲す處に倣はんとするか、干ものと成つて、大道に刻まれようとする覺悟か。それはやがて稟の爲すまゝに從つて觀ようと思ふ。たゞし、其一言を聞くと齊しく、「此は、ゆつくり蕎麥屋で飲みながら話がしてえ。旦那に御迷惑は掛けねえ。何、其のくらゐは御馳走をしようとおつしやる？……心得た、すつぱりと頭割だ。」と爺さんが算木の如く、ざく〳〵と鐵つくりのがらくたを捌いて、一風呂敷。露店の筵をめくるのは、風が落葉を誘ふやうで、地も怪しく、うら寂しい。まだ木の葉の方は、ぱら〳〵と、立ちつ舞ひつ、其の一枚も目に殘る……露店のあとは搔消すやうに消えるもの。むかし下谷の三枚橋際で藥を賣つた、髯の眞白な翁が、たそがれに、藥を納めた其の瓢箪の中へ、身體を入れると、瓢箪ぐるみ、颯と、上野の森の上へ飛んで消えたと言ふ趣も、實にこそと偲ばれる。

見つゝ、默つても居られないから、鶴樹は、破毛氈を疊み、ござを捲いて手傳つた。が、若いから、居合拔の奴のやうである。此の筵を手拭で中結へしたのと、「風呂敷包を片手に提げて、あの十文字槍は何故か別に持つて鞘のまゝ、丁と片手に据ゑたので、（何か持ちますよ。）と、彫工が頻に言ふと、親しげに顏を見て、槍を渡した。此が燈のかはりをしたので、鶴樹は何となく、胸の光るやうな氣がした。鑿は懷中にある。

爺さんが先に立つて行くと、すぐ鄰の古雜誌屋は、別に聲も掛けなかつたが、先鄰の今川燒が、甘いもの屋に似合はない髯面でヌイと覗いて、「鴨かね、爺さん」と言ふと、「違えねえ、だが葱を背負つてるのは俺だ。」と言つて、猪首の風呂敷包を一搖ゆつた。

蕎麥屋へ入ると、「入らつしやい。」と言つたが、ばた〳〵と、足も蒲團も框へ來て、小女が立はだかつた。「二階は。」と爺さんが、此の時しやんとして、人見入道、赤坂の城へ一騎がけに、東雲のまだ明けやらぬ霧の高櫓を仰ぐが如く、宮傍の階子壇を窺ひながら「明いてるか。」と仰兜で頤を出したが、小女は怪訝らしく默つて居た。ひよいと入交つて、十文字槍を持つて、しかもぼんやりした彫工の背後から、ぐいと兩手で其の腰を壓し出して、「さ、さ、若旦那。……お上んなさい、お二階へ。」――

これを、中央停車場の時の、菖蒲が鶴樹の肩腰を押したと言ふ、振舞に似て、忸怩たりと、李阿彌爺さんが擽つたがつたものであつた。

二

「七日間――私たちは逗子に居ました。伯父も叔母も居ないかはりに、一晩でも濟みさうな處を、其の居ないのが何の彼のと、婦の拗ねたり搦んだりの材料に成つて、私は自分ながら、ぐうたらな意氣地のないのに呆れるんですけれど――中途ぢや婦が病氣に成つたり、故とでせうが癪を起したり。介抱をさせられたり――其の間には、海岸を散歩したり、小坪の崖の不動樣へ參つたり、葉山の鎧摺へ上つたり、森戸へ行つたり。婦が手巾を長くぶら下げたり、此が何うかすると、蜿々と繩蜿りをして鎌首を立てさうなんです。私は極が惡いから、用もないのに海水帽を被つたり、いや最う散々です。」

「且つ以て忙しい。……盆と正月が一所だに。御祝儀を申して可いか、おくやみを陳べて可いか、こんがらかつて分らねえ。此方は何でも先づ飲めと……其處で詰りは……」

「勘定と成つたんです。」

爺がニヤリ〳〵、

「此奴は、先生――お前さんにしては大分理解が早いや。尤も然う來る處だよ。」

「處が私は形なしなんです。無論端つから、そんな事は些とも心配をしないやうにと女が言ふのを、心には濟まないけれども、然うかつて、何うにも仕樣がなくつて、愚圖々々に成つて居たんですが、いざ勘定の段と成ると、女の方も持つて居ません。おなじくらゐに形なしなんです。其の癖平氣で、東京へ歸ると直ぐ送るか、自分で持つて又出直すから、私にあとへ殘れと言ひます。體のいゝ人質ですが、しかし誰か居殘らないぢやあ旅館でも默つて返さう譯はありません、女は歸つた。――さあ、私一人と成ると、女の力で乘つて居た足場のやうな黑雲から眞逆樣に落こちて、慘憺たる事と云ふものは、旅館の扱ひ方の違つて來た樣子などは問題でないのです。何だか、自分だけは、歩行いてゝも足浪がないやうにうすら寂しく、一人で浪打際だの、石垣の上だのうろついて居ると、屹と旅館の印半纏を着た男が、砂山に立つたり、松原に居たりして、遠目にぎろ〳〵と見て居ます。足が停車場の方へでも向ふものなら、もう一人、鳥打をかぶつて、色の黑い背の低いのが殖えて、二人で前後を引挾んで居ようと言ふんです。――晩方、停車場の柵に凭れて、東京へ上りの汽笛が山の腹に浸渡るやうに響くのを聞いた心持つたらありません。秋の暮ではないんですが、熱い涙がほろ〳〵と溢れたんですよ。」

「あ、あ、痛はしい。」

と、それでも爺は半分笑つて、

「落人の身の上、薄尾花に氣を置く處だ。まだ居た處が旅館で僥倖、寺でゞもあつて御覽じろ。お前さんのやうな氣ぢやあ、月夜に芋を掘る形で、ひとりで墓穴を穿つて、頭へ其の芋苗の葉を被りながらづぶ〳〵と入定をしさうな處だ。――遣つゝけなせえ。」

と蒸籠の角を皺手で、敲いて、

「然う言ふ時は草鞋を穿くんだ。草鞋をよ。草鞋だよ。」

「草鞋とは？」

「づらかる事さね、遁ける事さね、身體を消すのさ。」

「身體は……それは、海へでも、潮がさした時なら、田越川でゞも消せたんでせうけれど、遁けるなんて事は思ひも寄らない。――唯時間を見に停車場へ入つてさへ、印半纏が、（旦那、切符をお買ひ申しませう、御散歩なら精々が横須賀だね、東京ぢやあ遠過ぎますぜ、えへゝ。）と變に笑ふ始末ですからね。」

「其處をづらかるのが、――えゝ、やあ可いてね。……おつと、其處を片附けてる姐や。……お銚子のおかはりだ――まだ〳〵蕎麥屋はゆつくりだよ。それ、とん〳〵と、御新客がお二人樣――あゝ、箒立の陰へお成り。」

と額越に下目で睨んで、
「まだ、大丈夫。……姐や――熱くしてくんねえよ。序にお代が、てんのぬきだ。種込と遣つてくんねえ。可いかの。」
と十文字の槍を二つばかり振つて言つた。
「羽團扇を以つて指揮する如し、たゞ人でねえ。」
背後に立掛けた大道敷の莫蓙を、じろりと視て、
「大じん――落着いたものだてね、はッはッはッはッ。」

三

「女が歸つてから、尙ほあとを四日、十一日めの日が暮れて、十時に成つても書留が屆きません。未練ではありましたけれど、例によつて印半纏にあとを跟けられながら、町の郵便局へ出掛けて、もしか、東京からしかゞ名前の郵便が來て居はしませんかと訊くと、まことに氣の優しい局員でしてね、麻袋の紐を解いて檢べてくれて、ありますと、言はれた時の嬉しさと言つてはなかつたのです。が、しめ切後で、整朝でなくては配達しないと言ふのを、もう恁う成ると一分間も疾く歸りたい。――其處は、わざはひが幸で、印半纏が保證に立つてくれましたので、時間外だけれど書留を局で渡してくれたんです。五百圓の切手が入つて居ました。――お爺さん。」
と云つて溜息する。
李阿彌爺さんも、猪口を控へて吻と息した。
「此の金子からはじめて、鉋でゞも削るやうに、私は身を削らるゝのだとは氣が着きません。添へ書に――（鑿が洗へたらお歸りなさい）――串戲を言つてる女が、濟まないけれども、たのもしいほどでした。私は冷飯だ――しかし女が、逗子中で一番人い甘鯛を二尾揃への、薩摩芋を丸嚙りにするほどの鰕の金藝羅を拵へろの、賴母公の頭ほどの生貝が欲いのと、勝手なあばれ食をしたんですから、心着けて額を言つて寄越した祝儀ぐるみあとは何程も殘りません。」
「此奴は豪い。些と此の蒸籠の殼などは隅の方へ片づけませう。……はて、其處で……」
「當方の金子を、貸してゞも貰ふやうに、爲替と引替へに、帳場から剩錢を取つて、……はす〳〵の時間を伸で停車場へ駈着けて間に合つたんです――其は可いんですが、さあ、東京へ歸ると、其のまんま下宿へ歸つては極りが附かない。何うしても雨の降る晩に幌を揃へて、十日前に九段を下りた其の富士見町の待合へ。……」
と鶴樹は憚つて座を見たが、いま衝立の陰に成つた、女づれの女の縞の紬が見えるばかり。此の二階はがらんとして居る。入らつしやい、入らつしやい。續け狀に威勢のいゝ聲は階子壇の裏へ響いて聞えたが、誰も上つては來なかつた。
「其の待合へ歸らないと、辻褄が合はないやうな氣がしましたけれど、何うせ狐が馬に乘つた次手だから、押切つて下宿へ歸つたんです。が、此の長い間明けた下宿の樣子を考へて下さい。難破船が外國の知らない島へ着いたやうです。危險がりもすれば、いたはりもすれば、不思議がりもするし、氣味も惡がる。汚がりもすると言つた形です。私は狐が落ちたやうに――いや狐が憑いたやうに――二三日茫乎と寢て居ました。
漸と學校へ通出した。……其の二日めかに、女から手紙が來ました。――例の富士見町へと言ふのです。今度は處がきの淺草が、芳町に變つて居ます。
端折つて話しますかね、――お爺さん――逗子の爲替の、少額だけれど、殘餘はあるし。……さあ、逢つて聞くと、淺草の主人が金子を貸さない、第一抱への身で、內を明けたんだから、遠出とやらの玉祝儀の始末を着けろと言ふから、其の形をつけるのと、爲替を送る金子のために、すぐに芳町へ住替へをしたと言ふのです。」
「此は理合だ、はて其處で。」
「私は挨拶にも、身の置場所にも困りました。女の言ふには、瓜茄子が生えたり、樹の實が成る、地面に向つて、氣の毒がつたり、禮を言つたりする人がありますか。貴方は金子の湧く、紅の花、白粉の畑が一ヶ所手に入つたと思つてれば

可い。雨露を凌がせて貰ふと言つて、我が借家の屋根の下でお叩頭をするやうな變な眞似はおよしなさい。しかし其には家賃が出る。……男として女に金子を拵へさせて、一分が立たないとでも言ふ事だつたら、（借りた）とお書きなさい、串戲こに、……故と、證一つ金一千圓也でも、五百圓也でも何でも……

私は自分の氣の休まるやうに、其の場で證書を入れたんです。」

爺は默つて頷いたのである。

青い眉

「多日して、其のあとが箱根行です。――實際、大湧谷の硫黄の煙を足許に視た岩の上なんぞは、後で思ふと、襦袢が火のやうに燃えて居ました。草でも、蟲でも、友染の模樣は、皆炎の中に白く焚け爛れて居たんですね。

私は、あの山の上の景色を思ふと、よく蛾のやうに、焦げて落ちなかつたと思ふんです。それを考へると、此の二階からでも轉げ落ちさうな氣がします。」

「おつと、障子を閉めて……霧が深い。いや、黑雲の中に火を吹いて、飛天夜叉、目に見えるやうだてね。――先生、何も修行だよ。箱根の硫黄を、雪にして御覽なせえ――お釋迦樣が悉達太子の時、大雪山の毘羅梵志を師となされて、三業九品の修行のために、北眞禪定臺の雪室に五定心を練りたまふ處だ。」

爺さんは胡坐の膝を畏まつた。

「其の時。……大千世界の雪を集めて積んだ雪山の、しかも吹雪の中に、天女をあざむく三人の麗人が顯れて、室の雪に氷柱を束ねて、指も爪も凍らせらるゝ釋尊の御前に、美女の一人が松明の焚火をして、あとの二人が左右から、もつたりと引添うて、おあたゝまんなさいましな。と玉の、うんや、玉ぢやあ冷え。眞綿のやうな膚を見せて言ふんだて。此か魔だね。魔だがさて恁う成れば、こゝで凡夫は得脫だ。いや凡夫ほどにもない此の爺などは、聞いたばかりで立處に成

佛するてね。」

と、すとんと腰を落すかと思ふと、吃驚した顏をして、

「悉達太子は此處が偉い、見返りも遊ばさぬ。尤も偉いと讃めた處で張合のないお釋迦樣だ、御修行七日に滿じた時、一人の美女が、ほつと焚火で暖つた橘の實を捧げて、めしましと申したッさ。誰ぢや、とはじめてお聲が掛ると、三人ひとしく雪の中で、松明の火に嬉しさうに莞爾した。色といひ、嬌態といひ、わんぐりと旨さうだ。が、お釋迦樣は、うかつには召さないてね。……摩訶如意を以て、可うがすかい。木の實をハタと打たせ給ふと、すばつと破れて、中からむらむらと湧出したは異類異形の毒蟲だ。三人の美女は立處に、惡魔外道の形と成つた――お前さんの蛇つかひが同じく此だよ。お釋迦樣だから三人だ。お前さんだから唯た一人、一人で澤山だ。はゝゝ、それさへ持餘して居なさるんだ。」

「飛んでもない。」

彫工は、思はず、膝を打つて遮つた。

「一人にも半分にも、粉にも、そんな處へお釋迦樣を言つてくれては勿體ないぢやあないか、お爺さん。」

「いや、眞實のお釋迦樣だと、勿體至極もないのだが、私どもの口で言ふ講釋仕込のお釋迦樣や、下手が描いたんだの、役者が白粉をつけたお釋迦樣なら、それが大聖世尊釋迦牟尼佛であらうと、ぐつと世を下つて、肉食妻帶親鸞だらうと、お前さんの話に較べて持出した處で仔細はねえよ。」

聲を密めて、

「處で、先生。」

「えゝ。」

「つかん事だが、いや肝心な事かも知れねえ。が、お前さんは其の何だ。橘の實を食つたかね――食はねえかね。年をとると、ものがくどいて。天ぬきの先に其を聞きてえ。」

「……」

「食つたのかね、食はねえのかね。」

「たべません。」

「はあ。」

「お爺さん、私はそれだけに、まだ、せめて鮭の頭が味へるかとも思ふんです。幸に、此の鑿も持つて居られたと思ひます。」

「ふむ。」

「まつたく、其の女とは、そんな樣子で居たんですが、私は何うも、其の中でも、毒蟲の毒が身體をくさらすとは思はないで、其の女と然うやつて、しかも汚さぬ身體で居る事が、不思議に、氣なり、魂なりを……あの、招魂祭の夜、顏に塗られて目も口も塞がつた泥を洗つて貰つてるやうで、鍛へもされゝば、研かれもするやうな氣で居ました。」

「同一湯へ入つた時など。……」

「承はるよ！〳〵。恁う成りや遁げも隱れもしねえ。はてね。」

「女の身體が、胸も、肩も、雪膏のやうに溶ける時でも、——質の細緻い、滑かな、薫の高い、高價な石鹼で垢を洗つて居るやうな氣がしました。」

「此は手酷い、摩訶如意の不意討を食つたな。」

「しかし、私も然うするには、然う思はうとして堅忍するには、非常な苦痛を押切つたんです。」

「察するて……偉い。と先づして置くか。私だと其の石鹼の時に、泡に成つて消えるがね。お前さんは難行苦行だ。よく勤めたね。卽ち麗人の捧げた木の實を、如意でハタと打つた處だ——打つた……處で、其のさま〴〵の毒蟲がむら〳〵と湧いて出た——とまあ言ふ次第だ。どんなものが出たね。」

とけろりとして聞く。

「毒蟲ですか、何ですか、皆證書に成つて出たんです。」

「逗子の時の、……つまり其奴だ。」

「其ばかりぢやあないのですよ。今、お話しゝた其の箱根の時も、女が遠方へ行かねば成らない、しばらく逢へないからと云ふので無理やりに誘はれたんです。——其の時は別に人質のやうな事はありません。……宮の下の新屋の勘定を女が耳を揃へて器用に濟したんですが、——前の逗子の時とおなじ言種で、矢張私が證書を一枚入れました。……ほんの徒がき同然の——（餘計な事だけれど、恁うすりや貴方の氣の濟むんでせう、何のこんなもの水臭い。）と言つて、扱いたり、洗つた髮を結んだりしたものなんです。

箱根で分れると、半月ばかり經つて、神戸の福原——遊廓ださうですね。そこから手紙が來ましたつけ。私は初めて吻としました。

處が、二月にも足りないで、今度は何うでせう、長崎の新地へ住替へた報知があつて、いろんな事を言つて來ました。私は返事も出しません。——と突然に、……（何處も借金で遣切れなく成つたから、遁げて歸つて、世間を忍んで居る。）と言つて思ひも寄らない、神田の何右衞門町とか、柳原の裏邊だッて、私なぞ田舍ものは、次手がなくつて歩行いて見た事もない處から手紙を寄越して（綿屋の二階の綿屑の中に潛つて居る。たゞし龍の鑿する時は、雨落の石へも潛めば、人間の鼻の穴へも隱れる……颶風を捲いて天上をしないうちに逢ひに來て下さい。）と、いづれ、木戸番の口上か何かで覺えた言種でせうが、身震ひの出るほど言句が凄いのです。

眞個です。私は釣鐘の裡へでも潛つたやうな、重い暗い、可恐い、そして蒸暑い、呼吸苦しい思ひで、衣具を頭から被つて下宿の二階に小さく成つて寢て居たんですが、夜遲く煙草の切れた事があります。——煙草ですが。」

彫工は蠟燭を凝視める如く、卷莨の火を撓めつゝ言つた。

「はじめは些少の串戯のやうでしたのに、その女と話をするやうに成つてから、手持不沙汰の紛らかしが眞個にすきに成つて今も恁うして激しく喫みます。――もう遲いし、下宿の女中を買ひに遣るのも氣の毒ですから、外へ出て、つい近所で……買馴染の荒物屋兼帶の煙草屋へ行きますとね。けら〳〵けら、けけけッと、素頓興な煙草屋の婆さんがいきなり高笑ひを浴びせかけて、「今お歸りになりましたよ、鶴樹さん、もう一足で。」……「誰がです。」「あなたの此が。」と小指を出す處を、發奮切つたものだから、慌てゝ親指を揃へて二本突出した。で、私の樣子を聞きながら、煙草を買つて喫んで、今まで腰を掛けて居たと言ふんですがね。……剃たての眉毛のあとが蒼青で、櫛卷に結つた、色の白い、中肉ぢやあるが、目鼻がぱらりとして大柄に見えたと言ふんです。

餘り違つてるだけに、却つて全く其の女だつて事が分りました。木蓮の花の咲いた頃でした。つい近所の人のやうで、湯歸りでゞもありさうな、蛇形の浴衣に、黑繻子の襟のかゝつたおさすりの縞縮緬を着て、緋の蹴出しで素足だつた。あの木蓮の花のある硝子窓が部屋だと言つて聞かしたら、「木登りをして、顏を出して、パアと覗いて遣らうか知ら。目をまはすと氣の毒だ。小母さん又來ます。」と歸つたが、何だか半町ばかり先には、其の癖俥が待たしてあつたやうで、提灯が見えて赤城の坂下でスッと消えた。「生命取だね、けけけッ、けら〳〵けら。」と、小指を今度はまともに突出されて、私はぎよつとして遁げたんです。

が、其の樣子で、古綿屋の二階で、綿屑の中に、はらんばひに成つて、竹の皮づゝみの鮪の足か何かで、舌なめずりをして居ると思ふと。……

「お爺さん――もう一枚障子を閉めます。」

鶴樹は肩を細くした。

「毒蛇が籠つて居るやうで――圖體はこんなですが、雛と言ふのが名ですから、狙はれます……窓の木蓮が、皆蛇の顏に見えました。」

板橋より

「其の後に、はじめて又逢つた時が、お爺さん。――あの時ですよ。此町の毘沙門のわきの、おでん屋の。……」

「あゝ、いきなり飛天が紅い蹴出で首ッ玉の一件だね。お前さんを載せたあの黑雲はまつたく眞直ぐに大宮まで飛んだかね。」

「富坂から白山を上つて、スー〳〵板橋へ駈るんです。」

「木曾街道の振出しだ。……あれから一里塚、平尾へ掛る。……川があるね、王子へ流れる。……蓮沼村、清水村と大根の種が名物だつたて。……あの晩は暗夜だつたね。」

「えゝ、夜は更けてるし、然うでなくても眞暗です。自動車の燈ばかりで、右も左も何が何だか私にはまるで分りません。女はよく知つて居るんです。戸田川の、もとの渡の處だの、もうぢきに蕨だの、浦和へ一里八町だのッて。其の浦和へ、やがて近づいて、水田のずつと向うに見える、圓い森が、「二十三夜祠」ッて女が敎へました時、先刻から、ひどく、ぐら〳〵搖れて居た自動車が、がつくり傾いだと思ふと、泥へ附着いたやうに成つて了ひました。バンクしたのならまだ可いんですが、梅雨時の泥濘へめり込んだ、勢で、片輪を、水田へ突込んだものなんです。運轉手と附添とで、必死と悶いたんですがね、何うしたつて一寸も動きません。」

「此奴ばかりは朝比奈でも難かしいね、雛船だ。」

「雛船です。眞の暗夜です。そして最う午前二時なんでせう。運轉手たちは、二人とも帽子を脫いで叩頭をしました。お歩行きなさいますか、車內で夜をおあかしに成りますか。何しろ申譯がありません、と言ふのです。最う一つ他の手段と言つては、此の先の村を軒別に敲き起して、金子に飽かして人夫を集めるのだ、と然う言ふんですが、此は手段より自棄なんですよ。私は勿論、其のまゝ夜を明かさうと言ひもしたし、また確に然う思つたんです。女は、焦つたい〳〵と言

ふ……焦つたいたつて仕様がないのに――「焦つたい、燈をお消し。」其處で、響の應するやうに、フッと運轉手が燈を消したんですが、此の消際に、ちらりと白く痩せたやうに見えました、女の顔の凄さと美しさつたらなかつたのです。しかし、其心細さと言つたら、武藏野の暗夜は、まるで茫々と海のやうです。運轉手たちは、消すと同時に、何を遠慮したのか、田の畦へ踞込んで、一人は外套を引被るし、一人は組んだ膝へ鳥打帽を押つけて圓く成つて了つたんです。

「其時に――不思議な事がありました。」

「聞き處だ。」

「いゝえ、其が何うしたんだか、今でも私には分らないんですが、燐寸をね――お爺さん。……女が點けちやあ投げ、點けちやあ投げ、點けちやあ投げ……で次第に激しく手早くなつて――尤も手品も遣ふんでせうから、何をするか分りません。――火がパッ〳〵と細く飛んで、こんがらかつて、硝子戸へ一齊に曼珠沙華が咲いたやうに見えますと、あの左の空に遠い、二十三夜祠の森で――夜烏かと思ひました、……然うではありません、變な、口笛を吹くやうな、怪鳥の叫ぶやうな聲が聞えたんですがね。――人數は七八人でしたけれど、まるで黑潮の湧くやうな影が、田の畦をどつと流れるやうに寄せて來て、牛蒡、八頭が化けたやうに、土の香が芬として、自動車の引傾むいた輪のまはりへ、むら〳〵と集つたと思ふと、誰も一言も、ものを言はないうちに、づゝんと搖れて、眞直に成りました。運轉手たちは、不意に驚いて、呆れて默つて居たのでせう。いま頻に禮をいふうちに、（構はずお出し、燈を點けないで。……點けていゝよ――此處が浦和だわ。）と女が私に言つたんです。」

爺は頻に小首も傾ければ、猪口を捻つて聞いたのである。

水引雛

「翌日、朝食を緩り濟してからの事でした。大宮公園の旅館を出て、――見沼川、あの螢の名所と言ふのを、晝間見て

歩行くのも異つて居ますね。蘆が一面に生えて、行々子も鳴かないで、水は一杯に伸縮みなしに梅雨晴の薄日に、ちぎれ雲を映してのんびりと流れて居ます。當もなしに、川緣を、と言ふのが搔分ける蘆原の中なんですが、やがて胸が沈んで、肩がかくれるくらゐ茂つて居たので、ふと私は心細く成りました。

昨夜の自動車の賃錢が、既に帳場の立替へと言ふのですから、「勘定は何うだらう。」と尋ねると、「まあ、足りますまいよ。」私は膽を冷したんです。

女は澄して、「お待ちなさい、今日は日曜だし、公園の池のまはりには、もう盛に人が出て居た。一藝取立てゝ稼ぎませうかね。」と言つて、前髪で蘆の中を搜すから、鬢も大分ほつれて居る……櫛か簪でも落したのかと思ふと、然うでないのです。

素性のいゝ蛇を一尾と、聞いて、私は思はず聲を揚げて、浪を泳ぐやうに蘆を薙いで、水の香に咽せながら遁げ出しました。旅館の門まで引返すと、植込の萩の新芽に、銀のやうに日が當つて、彼是午は過ぎました。が、歸るにしても、まだ晝飯には早かつたんですから、前の大池へ出ると、汀にはら〳〵と菖蒲が咲いて、大分人が出て居ます。

簀子で圍つて、茅を葺いた小さな番小屋が二ケ處もあるくらゐで、あの大池には澤山鯉が飼つてあります。

藤棚のある茶店の、床几を離れて、手桶を二つ出して、藝妓が三人で釣つて居ました。中でも少い綺麗なのが一人、きやツと云つて尻餅をつくから、どか〳〵と人が寄ると、二尺ばかりの見事な鯉がぴち〳〵と汀に跳ねて居る。あとの二人も寄着きません。茶店の亭主が出て、鉤をはづして其の桶へ入れますとね。兄さんとかに見せるんだから、旅館へ持つて來て屆けて下さい。臺所へ然う言つて、殺しちやあ厭よ――お午に鯉汁とあらひが誂へてあるんだから。……此を殺さないやうに、屹とですよ。一層のこと川まで持たせて遣つて放しませう。最う些と釣つて、あら、跳ねる、可恐いわ、と然う言合つて、又三人揃つて竿を持つたんです。が、いまの人騷ぎで、蒔餌に寄つた鯉が散つたとかで、亭主が、あらため て燒麩をほん〳〵と水に投げると、ばしや〳〵、ぢやぶりと云ふ勢で、十四五疋も重なり合つて、藍、薄紺色、紫の鰭を

光らせるんです。

女が、私の傍に居て、熟と此を視て居ましたつけ。「チョッ釣なんて面倒臭いぢやないか、引捉へて來よう。」と言ふと、ずるぐると帶を解いて、するりと長襦袢ぐるみ衣服を脱ぎました。早い事、何の隙もありません。白い菖蒲の花が二輪浮いたやうに、肩を見せて、青い水を泳いで出ました。

鯉の群を、拔手で打つたか、水玉がパッと散りますと、大きな鯉が乳の下で跳ねて、尾が飜つて、頰邊を敲いたと思ふと、魚のやうに背筋をうねらせて、一度沈んで、今度、女の浮いた時は、黑い髪が眞直に、躍を卷くまで流れたんです。見物は、嘲るのと、呆れたのと、嬉しがるのと、馬鹿にしたのとで、無暗に聲を上げたんです。女は池の眞中をすらすらと渦にまはつて、少時して、半圓を描いた向うの汀へ、それでも一度、澪標に手を縋つて一息ついて濡々として上りました。が、まうつむけに髪を投げて雫を切ると、乳へ日を浴びて、白く輝くやうに、背中へ其の雫する漆の髪を捌いて立ちました。紅を溶いて流すやうです、膝の上まで眞赤な切を、兩手でぐいぐいと絞るんですから。

いそめを捕るうしろについた小兒が、鮑貝でも預かつたやうに、頸窪から、爪尖まで馬鹿な顏をして、此方の岸に、私は何うでせう。地へ帶ぐるみ脱いだ着ものゝ前に立つて居たんですが、變にぼんやりした目に、女が遠くに、紅白の水引で拵へた鑁のやうに見えたんです。彼處からずつと、此處へ、人立の中を通つて歩行いて來るのだ——と思つたばかりで恥も外聞もなく成りました。手品の種蓮びに雇はれた丁稚のやうに、其の衣類を引まるけて、脇に抱いて……」

「しばらく。……先生、此奴は些と耳が痛い。」

「……」

「先刻は大道の莫蓙だつけ。」

顏を見合せ、雙方が苦笑した。

「韓信だね、——何處とかの市に股を潛る處だ。何も修行だて。」

「お恥かしいんです。」

「いや、懺悔の最中——腰を折らずに、はて其處で。」

「女は衣ものを引掛けると、何うでせう。紐で卷いたゞけで、ぞろりと褄を取りながら、立派な軍人が三人居て、一人は矢鱈に髭を捻り、一人は葉卷を吹かして、一人は兩腕を組んで鼻を顰めて居た。みな佐官以上らしいのが喊き合つて居た前へ出て丁寧に一つおじぎをして、「ほんの前藝——思召頂戴します。」しばらくすると、軍人たちは揃つて衣兜へ手を入れたんです。

目ぼしい處は皆廻つた。あの藝妓にも出させて居ました。

もう一度、池へ兩足を突込んで、褄を高々。ひたぴたと地を歩行き〳〵、「さ、血のあとをつけて退治に行らつしやい、——然やうなら。」で、萩の植込をすぐに松林を拔けて、「苦勞をするわね。」と莞爾して、はじめて帶をうけとつて、づんづん湯殿口へ廻つたんです。」

「遣るもんだね。はあ、其處で。」

「驚いた事は、それで勘定はたりました。しかし、今までのが押せ〳〵に殘つて居ます。——何でも當時は、……お爺さん、私の口からも話しにくいほどですが、娼妓……女郎ですね、同然の勤をするからと言つて、その牛込の或藝妓家に目見得中だと言ふのです。逗子以來の借金が、雪まろげのやうに大きく成る。と言ふことです。福原から長崎まで轉げたんですから——」

紅のついた證書

「心ゆかしに——女に擔ふ處を、殘らず借用の分にして、例の證書を書いたんですが、大宮の旅館の机に備つけの卷紙を使ひかけますと、(何ですね、そんなに更まつて。) それさへ引手繰つて、女は丁度鏡臺に向つて、浴衣の片膝立で、髪

を梳して居ましたつけ、櫛を拭いて一扱き扱いた紙を伸して、「更まらないで、故と此にお書きなさい。」と言つた調子ですから、借金の上に、借金を重ねた分を、歴々と認めて渡しますと、(いやに他人行儀ね、堅くるしい。」と唇を濡して、スーと銜へて引く。口紅が證書の端へついたんでせう。「これなら可いわね。お志は頂戴します。」だから、私は一向そんなものは念頭に置いて居なかつたんです。

お爺さん――其の、反故のつもりの、その證書に、爪が生え、牙が生え、鱗が生じて、可恐い毒蟲に成つて、肉も血も吸ふやうに、一度に群がつて、唸つて、降つて來たんです。」

「天人のやうな惡魔の捧げた、ふかしたての木の實から湧いたんだ。――お釋迦樣だと、摩訶如意の功德によつて忽ち其の蟲は消えるんだが、若い先生ぢやあ然うは行くめえ――道理だよ。」

「それがために、私は最う、世の中へ顔も出されなければ、生きて居られないやうに成つたんです。降つて湧いたのは、――つい此の頃です。

一寸……その以前、大宮から歸つたあとで、女が此の土地(神樂坂)から出ると成ると、私は赤城の下宿を何處かへ引越さう……其の覺悟で居たんです。――處が意外とも案外とも、多日經つて、淺草の消印で、吉原から音信が來ました。とう〳〵女郎に成つたと言ふのです。――(藝妓ぢやあとても纏まつた金子が出來ないから泥水も浮世の淵も、どん底へ沈みました……身を賣つて、事が極ると、一晩の猶豫もない。すぐに初見世と云ふ貼紙を下げて女の身體の切賣です。赤い身だと、鮪の土手だが、私は口惜いから、大宮の池の時を思つて、名だけは(鯉)とつけました。白い身を輪切にされて、三日と言ふのに、もう三十五切刻まれました、生づくりです。……此の活きながら身をば裂かるゝ(鯉)が、寢衣に扱帶で、蒼い顔して、裏階子の欄干から、二十日頃のあけ方の月を見て泣いて居ます。是非來て、せめては疵を撫でゝ下さいまし)――實際、私は、お爺さん……斷然逢はない決心をしながら、餘りの事に、內證で、そつと、はじめて吉原の門を潛りました。雨の降る晩、傘で顔をかくして、とぼ〳〵と其の女郎屋を探して、よそながらと思つて、襖の前を幾度もう

ろ〳〵して、鹽花を撒かれて、泥濘に轉んで逃げた事さへあります。しかし、幾度何といつて來ても、決して逢ひには行かなかつたのです。

突然、信州飯田から、其の女の手紙が來ました。」

「したゝかものだ。」

と舌を卷いて、

「あの術だね、借金を捲いちやあ素飛ぶ奴だ。おまけに蛇小屋の出だから凄いよ。うゝ、肥前長崎から信州飯田、荒したなあ。――雪まろけ處か、それぢやまるで、大雪崩だ。」

「何にも書かずに――(首は山にくひついて此處に居ます。尾はまだ貴方を卷込むほどに伸びません、然やうなら)――と言ふのです。」

「些と震へてるね、ふう、はてね。」

「私は大息を吐きました。――取殺されるまでも、當分何のかゝはりもなく成つたと、漸と少し落着いたと思つて居ると……

一昨日の晩です。――先刻も話しましたね、馴染ではありますが、下宿へなんぞ、勿論來た事もない、煙草屋の婆さんが、階下まで來て、私を呼んで、一寸お目にかゝりたいと言ふ人があつて店前に待つて居る。……お顔をと言ひます。帳場には下宿の女房が居ますし、目に聞くと「いゝえ、決して……決して然うではありません。」いつかの眉毛のあとの靑い櫛卷の、縞お召で、紅い裾と言ふのではない事を請合つて、「私が請合ひます、却つてお生憎樣。けら〳〵けら、けけけけッ。おかみさん、お大事な若旦那を拜借、きやッ〳〵きやッ」と餘計な事を言つて、煙草屋の店へ私を連れ出しました。私も、誰か知らないが、別に他に逢つて惡いものはないし、うつかりついて行きますとね。茶の間を一つ隔いて奥へ通しました。

其處に、一目見ると、ハッと思ふやうな大の男が、人を煮る鼎に坐つて、三人居ました。大坊主で、半纏の袖から腕の刺青を見せたのが一人、洋服のちよんびり髯で、額の暗い、三百代言らしいのが一人。もう一人、――鼻筋の通つた、少しむくれたやうな、其の癖手足は痩せこけて、青白い、目のぎよろりと大きく光る、頤髯のあとの眞蒼なのが、細な大島を上下、せるの袴を緩くはいたのが居て、端から胡坐をかいて居ます。

私が棒立にすくんで立つと、「坐んねえ。」と大坊主が拳固で鼻を横撫でする。「人違ひでせう。」と吃つて言ふと「鶴樹一雛は君ですな。」と三百が言ふのです。大島の蒼白いのが「足が悪い、失禮します。」と、頭を輕く下げたは下げたが、兩方懐手で居りました。すぐに頤で指揮すると。

「あゝ、毒蟲か。」

と爺さんは、ぱくりと齒の抜けた口を開けた。

「三百の衣兜から、十六七枚、ずる〳〵と證書が出ました。――私は自分の手足の指を、一本づゝ放したのを見せられたつて、こんなに悚としようとは思はなかつた。女が髪を結んだのも、櫛を拭いて口紅で嘗めたのも、皆皺を伸してびたりとあるんです。(自分で計算して、一纏めに正式に書きなさい。――證券印紙は此の店で賣つて居る。實印をお持ちでなければ捺印でよろしい。」と三百が用紙を出してつきつけました。(こ、此は。)と言はうとすると、(兄さん、柔順にした方が身のためだぜ。」と坊主が、俵張の銀煙管を拂くんです。卑怯に成ります。(確に借りました。)尤も私を殺したつて、金子の出ようはあるまいと思つて、總しめ高を認めたんですよ。」

「幾らばかり。」

「串戯のつもりでせう、かさなり〳〵したのが、一萬圓を少し出ました。」

「……」

「店へ證券紙を買に出ると、居眠をして居やがる。「お婆さん。」あッと目を開けて、けけけけッ、きやッきやッ〳〵、立續けて笑つて、指を嘗めて、證券紙を切つてくれた。――私は證書を認めました。――三人でじろりと視ました。大島の青白いのが、「書直しを願はうか。もう一枚……整然とした證書に、此の一雛では通らない。――戸籍面の通り本名を。」戸籍まで知つて居る。

鶴樹は、默つて、しばらく爺さんを見て、考へたが、

「一雛――それは寺でつけたので、――お爺さん、眞個は雛吉と言ふんですよ、生れた時は。」

「覺えた〳〵、雛吉さん――成程、お寺にや向かねえ名だて。」

「狀袋を出して、三百が、證書を納めると、あらためて、私につきつけて、「これへ、たゞ――毛利織夫――先生とでも、殿とでも、樣とでもいゝやうに書きなさい。」――「松村英三郎でも」――と大島が押かぶせると、「どつちか一つで可いんだ。」と坊主まで、聲を渡して言はれた時には、私は、膏も血も汗も、氷のやうに全身に流れたんです。

――松村英三郎と言ふのは私の實父――私は自分でも、忘れた夢にして居ますが――實父です。――お爺さん……龍膽を研いで下すつたお爺さんに言ひます。母もまだ生きて居ます――それから毛利織夫先生。」

「大先生。」

「先生の方は、私の口からは言へませんが――然うまで企んだ其奴等には、できる考へがあるのでせう、どちらか一方に向ひさへすれば、證書面の金額は、屹と手に入るんだらうぢやあゝりませんか。」……

大桑八兵衛

一

「自分の事に就きましてゞすね、何か祕密がありますッて事は、然までもないのに、身の上に價値でも着けますやうで

厚かましいんですけれど――お爺さん――此は自分でさへ信じないで、前世の夢だぐらゐに思つては居るんですが。……其の松村と言ふ、或地方の財産家が、私の實父である事は事實ださうです。

誰にも言ひません。私はお爺さんにだつて、打明けては成らないと思ふんです。唯、此の場合、此の鑿に向つてばかり言ふのです。」

彫工は絣の單衣の、薄い胸に手を置いて、

「あゝ、恁うして寢ると魘されると言ひます……可恐い夢を視て、譫言を云ふんだと思つて聞いて下さい。

――世間では、彫刻界の第一人、毛利織夫先生に對して、私の母を「淺からぬ恩人だ。」と言ひます。それが一寸口では言ひ表せないやうな不思議な經緯で、唯一度顏を合せたぐらゐで、母が、毛利先生に、或貴重な贈りものをしたと言ふのです。尤も、形のあるものですか、無いものですか、それすら誰も知りますまい。――私にだつて何にも分りはしないのですけれども……」

爺さんは遮るやうに頷いて、

「分つて居るよ――あの織夫先生が、若い頃、寂しい貧しい旅行をして、東海道すぢの道中、大川の岸の邸の裏門の處で、桃の盛の眞晝間。……たとへるものはねえが、私が大道に擴げたやうな、がらくた道具店の中から、何か貴いものを見つけ出して、(あゝ欲い。)と言ひなすつた。……其處には店ばかりあつて賣人が居ねえ。――處を、裏門から景色を覗いて居なすつた其の邸の、世にも高尚な、優しい、美しい奥樣が、(お持ちなさいまし。)と引受けておくんなすつた。何か、其の時から毛利大先生、技に於ても、名に於ても、龍の昇るが如き勢だと言ふ其の事だ。……お前さん。」

「や、お爺さんは知つて居ますか。」

「尤も、場所も邸も、それは祕密ださうだがね。大先生の名を聞いて、其の一件を知らねえものは澤山はあるめえ。は て、お前さんは、大道の研屋の、そいつを知つてるのを吃驚した樣子だが、松村と言ひますかね、名代の御財産家だ。お前さんが其家の若旦那だと言ふには、私の方が驚いたて。すると、其の時の奥樣はお前さんのお母さん、――おゝ、……若旦那のお母さんかい。」

「言ひにくいんですが……まあ、然うです。然うすると、同時にですね。煙草屋の婆の奥の、今の三人が、其の事を言ひ立てたとすると、毛利先生が證書面の金子を、私の母に對して、萬々一、お立替へに成らないとは限らない――と其の時私は思つたんです。

いえ、萬一ぐらゐならまだしもですが、私の戸籍まできれいに洗上げて居る、根深く企んだ奴等の見込みは外れません。(毛利先生)と私が一筆書いたゞけで、奴等が事情の口添をすると、必ず金子をお出し下さるに相違ない。學校では親く教をうけましても、近づけば洩れ安い、義理がましい、恩がましさに憚つて、友だちに誘はれても、自分で故と遠慮をして、御門へは向はないで居ます、其の先生に、嘘にも、そんな心配をお掛け申して、私は何う成るんだと思ひます。勿論、斷然斷りました。

もう一つの、(松村英三郎)父の名の方ですが――私は思ひ切つて話をします。……世間では私の事を顏も身體つきも、(毛利先生によく肖て居る、そつくりだ。)と然う言ひます。實に先生には申譯のない事ですが、或は然うかも知れません。

私は、母の子で居て、父に少しも似ないで、旅の若い人。……それは母が、何ものかを與へました若い旅人の顏に似て居ると言ふために、まだもの心のつかない以前に、土に葬るかはりに山寺へ遣つ了はれた身の上です――此の父に向つて、そんな事を賴まれますか。させられるものですか。――即座に、身體は震へながら、立派に謝絶をしますとね、三百代言が訴へると言ふんです。借りた分の金子に就いて、訴へられるのは仕方がない。「御隨意に願ひます。」と私も判然さう言ひました。顏の蒼白い、其のセルの袴が、(兄さん、勝手な口を聞いちやあ爲に成るめえよ。俺蛇づかひの主人だぜ。あやめの亭主だよ。)と、じろりと見ました。」

「ほい、ほゝう。」

と梟のやうな聲を出して、爺さんも目を瞪つたのである。

「其の目の險しい、鋭い、凄い事と言つたら。今思つても悚然とします。」「さ、さ、一筆……然うすりや、火事も起きねえし、血は流れねえ。町内は安全だ。」――とニヤリと笑ふんです。私は骨も血も肉も、ほッと煙のやうに成つて、一萬圓餘の證書を入れた狀袋の表へ、――松村英三郎樣、したへ、鶴樹雛吉と認めたんです。

其の父には、口惜い事も、怨めしい事も、私自分で、尙ほ忍べます、我慢も出來ます。母はそれ以來氣が狂つて居るんです。しかし、世の中の人の目にばかり氣が狂つたと見えるので、私には、私をうんだばかりの、十九二十ぐらゐの美しい姿で、毎夜の夢に、天人のやうに、龍女のやうに、雲の上からも、水の底からも、濡れて、曇つて、私に見えるんです。其の母の此の子どもが、……色も戀も、蛇つかひの姉さんと、とち狂つて、其の亭主から大金をゆすられるのを知つた時の、心の中を……お爺さんも察して下さい。……私は活きては居られません。――何にもないのです。――唯、恥しさに死なうと思ひ、思ふんです。」

と、ぢつと成つて、俯向くと、つき合に兩手に取つた天麩羅の丼に、箸を持添へたまゝ、はら〳〵と涙を落した。

「偉い！」

と咽喉に支へた處を、ぽんと胸を敲きながら、

「身の恥を知るは、天の星の名を知るよりも賢いんだ。偉い。」

と言つて、ハタと丼の蓋をした。

二

「おゝ、危え。」

神樂坂を下りようとする處で……

「グサリと自殺たかと思つたよ、若え先生。――いやさて相談合で、一先づ死神は離れた筈だが、お前さん、一所に歩行いてる老寄に義理立てをして、持たう持たうと言ひなさるもんだから、預けたのが其の槍だ。……此方へ寄越したり、危えから。」

と爺さんは、ずつと寄つて、

「あゝ、お前さん鼻緒を切つたな。」

「お爺なん、矢張り、死ねと言ふしらせでせう。」

鶴樹は、引手繰るやうに取られた槍も忘れるまで、茫乎として立つて居る。――後にも話が續いたが――毘沙門横の其の蕎麥屋を出て、今は既に眞夜中の二時である。

「反對な奴だ。はゝゝはゝ。」

と荷を背負つた肩を搖つた、小作りな爺さんが、大きな聲で、

「自分で死なうと思ふものが、鼻緒を切つたつて絲瓜の皮かい――干瓢の伸びたやうに浮世に執着のある奴が得てそんな事に御幣を擔ぐよ。……尤も今では、お前さん、未練の出た時分かも知れねえが。」

と尙ほ笑を續けて言ふ。

……鶴樹が前段の身の上に次いで、鑿の來歷を物語つたことは略讀者方にも想像されよう。爺さんは丁と手を打つて――「恥を知つた、お前さんの行く道は、活きるにも、死ぬるにも、唯一條、飯坂へ行く奥州街道……速に行つて早く其の鑿をくれた別嬪の娘御の顏を見るばかりだ。直ぐに草鞋を穿きなせえ、人間萬事、恁うした時は草鞋をはいてずらかるに限るんだ。」と言つて、そんな事には無頓着らしい爺さんが、宵の口、鶴樹の友だち、學校なかまが、何處か此のあたりへしけ込むのを、――飯坂へ行く、飯坂へ行く――と他の聞くまで呼ばゝつたのも、自然の占であらうも知れない。「草鞋をはきなせえ。」學校で眞面目に學問をして居る若いものに、溫泉へ駈落ちしろも、算盤のけたは外れて居ようが、何それとても藝術とか何とか言つて、町内の若旦那に素人演劇を煽りつける學者に較べれば、秤の目は空へ向

く。天に對して俺は恥ぢない、と、しかしながら幾分かは嗾かした。尤も鑿に龍膽の花の奇蹟を視て、やゝ心機一轉しつつ、爺に鮭の頭を求めた時に、既に、鶴樹には、飯坂を思ふ心が第一にあつたのである。

が、少々行違つた事に、鶴樹の氣では、とにかく勘定を濟して、一旦赤城下の下宿へ歸つて、——歸りがけに煙草屋の店を睨むもよし——冷い衾へ潜つて、さて、朝飯でも濟してから、汽車の時間表も見て、と思ふ、なまぬるい、うどんの思慮で居た處、以てのほかで、爺さんは、夜が夜中、身一つ其のまゝにして、立處に、此處から草鞋をはけと言ふ。

「草鞋、草鞋、草鞋だよ。——草鞋とはこんな時に言ふ事だ。」と蕎麥屋の出口で、えいとこさ、と歸りがけの醉つぱらつた腰を掛けて、板のやうな古靴をはきながら、

「翌朝と言ふやうな考へは、駒下駄のうらに護謨をつける料簡だ。草鞋、草鞋。」と足たゝらを踏んで立つ時、ぐたりとへし曲げたやうに成つて小女が一人柱に凭り掛つて坐睡つた背後から、蟷螂の這上るやうな影で、亭主だか、板前だか、神棚の燈明を消さうとするのを、捻向いて爺が視ると、「少時、赫燿と頼んます。——こゝに奥州の土を踏む首途が一人ある。送別會を仕つた。消さずに、赫燿と頼みます。」で、此の勢につれられて、否とも諾ともなく、ふら〳〵と彫工は坂を下りかゝつて、芥子ほどもない石に躓躓いた處であつた。——

「何しろ怪我はねえかね。怪我は、どれ〳〵。」

と覗き込む。

「私がたてますから、お爺さん。」

「何、お前さんがたてた處で、から觀世捩で、意氣地のねえのか、手巾を裂いたぐうたらだ。」

「でも、寺の小僧の時、知つて居ます。」

「いや、立てるなら分つてゐる。それは私の方に算段があるんだが、——こゝだ、先生、草鞋をはくのは。——すつぱりと跣足に成つて——緒のくされた薩摩下駄なぞ打棄つて了へ——一番、威勢よく遣つてくれ。あゝ不可え。脱いだは可いが、其の下駄をぶら下げてのつそり突立つちやあ、川を渡る座頭のやうだせ。投げだしたり！ボーン。」

と爺の口とゝもに、眞暗な軒下に、下駄の音がボーンと鳴つた。

「偉い！」

と一つ、槍で煽いで、ひよろりと蹌踉けて、

「毘沙門天の坂下で、ト遣つた處は鞍馬のやうだ。僧正坊だと、先生をこゝで貧つて、日光山、黑髪山から、吾妻嶽を一跳ねに飯坂へ飛ぶんだが、生憎申譯と、翼とが兩方とも無え。ウィヽー（せめて鳶の片羽あらば）と此處を言ふのだ。跣足では行かれねえね。……（のんのこ、さい〳〵）とおいでなせえ。草鞋の算段をして進ぜる。」

「構ひません。——跣足で行きます……どんな店だつて、最う何家も夜中ですから。」

「いや、おなじ駈落、夜遁でも、跣足と草鞋では心持が餘程違ふ。まあ〳〵默つて來さつせえ。」

と手を取るばかりに肩を並べた。うつかりついて行くと、坂下を揚場へ曲つた。こゝは人も知つて居る、眞向うが九段の方へ見附である。右が市ケ谷、左がどん〳〵橋、砲兵工廠の方である。

左の大溝について、橋板を一跨ぎに、づか〳〵と渡ると、ありあけらしい電燈が白つ茶けて、垣に卯の花の咲いたやうに、此の初夏の夜を雪の積つたほど寂寞した軒ならびの、一軒の店の戸を、爺はどか〳〵と不遠慮に敲いて、

「御免よ、今晩は……」

二聲とも呼ばせないで、

「誰方ですか。」

と、切口上ながら、不思議に、響の應ずるが如くに答へた。

「亡者でございい。」

「……」

鶴樹は呆氣に取られたのである。軒を見れば大看板に朦朧として葬儀店。

「亡者でござい。亡者だよ。」

「入らつしやい。」

主人でなければ、親類の其の甥だらう。いかに葬具屋とは言ひながら、奉公人にしては今時睡た氣のなさ過ぎる元氣のいゝ挨拶で、がらりと潛戸を開けて顏を出した。頭を支へるやうに、戸外を覗いて、

「御用向は？」

「草鞋を一足……」

「はあ、お草鞋……はあ、で、お棺なぞは。」

「何にも入らねえ、草鞋ばかり。」

「草鞋ばかり。」

「夜更で外に買ふ處がねえんだ。足のある亡者が來たんだ。此奴を賣らねえと、お前さん商賣の裾が消える。何も冥利だ、賣んなせえ。——代は置いたよ。あとの戸をおしめなせえ。次手にしめて置け、しやん〳〵と……はゝゝはゝ、祝儀は濟んだぜ。先生。」

と、ぶら下げた草鞋の緒を、すぐに通して、きり〳〵と縺りながら、

「さあ、穿いたり——穿かせて進じよう。」

「えゝ、飛んでもない。」

「何、其の手つきぢやあ埒があかねえ。遠慮なく、そら、あんよだ。はゝゝゝ、此の葬具屋ばッかりは、恁う言ふ客にも鹽花を蒔かねえ處が有難え。何うだね、先生。吉原の格子前で、雨の降る晩に、ぱら〳〵とやられた時と心持はどんなでがアすえ。あゝ、すくんぢや不可えよ。——私はお前さんに土下座をして居るんぢやねえ、懷中のその鑿は、萬石以上

の折紙だ。若殿樣に召させ申す。」

と、ぬけ湯も疾に過ぎたらうに、横に靡いて這ふばかり、大溝にむら〳〵と立つ靄の中に、ほの白い鶴樹の足を嘗めるばかりに熟と視た。

「まだ躍も踏出さねえな。柔いきれいな足だ。あゝ、一萬石の若殿の落人か。——露にも霜にも、嘸これから苦勞だらう。己が身につけても思はれる。」

と聲が掠れて、ほろりと泣いた。

「可し、氣をつけて行きなせえ。一息にのして、白山から眞直に、蕨でも、浦和でも、夜があけた處に汽車がある。……何にもねえ、先刻そのつもりで蕎麥屋で分けて置いた風呂敷包だ。——此奴も振分けだと威勢がいゝが、それ〳〵肩へ掛けて結んだり。——心ばかりの餞別だよ。」

「父のない私が、祖父さんと思ひます、名を聞かして下さいまし。」

「おまはりじみた事を言ひなさんな——眞向うが警察署だ。」

と猪首をすくめて、ニヤリとして、

「水の流れと、雲の行方だ。又逢ひます——五助、七藏、八兵衛でも、勝手に覺えておいでなせえ。それ、五位鷺だか、時鳥だか、暗の空を啼いて行く——夜更けだなあ。」

と、くるりと向いて、天を仰いだ足の輕さ、別れて市ケ谷の方へ漂々と靄を行く。

彫工一雛の雛吉は、稻妻を浴びたる如く、猛然として思ひ起した。——五助、七藏のあるがために、心の紛れた八兵衛。其の姓にして、大桑ならんか——大桑八兵衛、——いでそれは、わが生たちし山寺の僧の茶話にも、現在、毛利織夫先生の敎にも聞く、世にかくれたる巨匠の彫工。

「あ。」

小半町歩行いたあとへ、草鞋が辷つて、すた〳〵と引返した。

「あゝ。」

深夜の大聲は四邊を憚る。濠の片側に形は見えつゝ、歩も留らず、見返りもせぬのを、息を切つてやがて近づいたと思つた時、皮肉な事には、並んで逢坂と言ふがあるものを、俗に呼ぶ幽靈坂へ、衝と曲つて、爺さんの影は、雲を裂くが如く、下闇を高く梢に消えた。

梟の聲がした。

濠の向うに、忽ち貨物列車のけたゝましい響に、水鳥の如く驚いて起つて、鶴樹はすぐに陸奥の旅に、唯一人首途をしたのである。

錦木

一

ふりさけて若月見れば一目見し
人の眉びき思ほゆるかも

萬葉集

深山は霜が早いのであらう。雲近き板屋峠、栗子山は、まだ色を染めないが、巌ひだの木の葉は、薄くもみぢをしたらしい。……こゝに谷を繞り、峡を出て、山岨の石の徑を遠く來る。……小さな馬の鞍に、染木、錦木の葉と色を取添へて束ねた狀は、宛如鳥が紅の翼を擴げて、影を、山また山に映しながら、水なき谿河の底を傳つて來るやうであつた。

秋日和の、雲高く、しかしながら、谷深く、道の細い。舊の米澤街道を、次第に、其の馬が近づくとゝもに、福島の町と兩方に別れて、やがて一條に飯坂の溫泉へ入る、兩岐の角にあたる、堰場とか言ふ村の村人が、戸に出て、もう遙に手

を翳して立つて視たのである。

さて視れば、其の紅の翼を張つた赤馬は、矢張り馬子が曳いて居た。

案山子のやうな馬士は、頰被りした頭を、居睡りをしつゝ曳くか、こつくり〳〵として、長綱を中だるみに尻手に弛く取つて來る。

乘つてるものを御覽あれ。ほか〳〵と陽の沁み込む、茶の中山高帽を仰狀に被つて、何のつもりか、首に縹青色の手巾を廣く卷いた、紬のむつくりした大きな五紋の黑の紋着羽織を着て、絲織らしい、ぴか〳〵と光澤のある大名縞の厚小袖。角帶を結んだ上へ、もう一つ白縮緬の幅廣なのを上占のやうにしめて居る。胸を突出し、仰向けに反つた面は、眞眉間の日南に赫とほてつて、はみ出した額髪に汗が浸む。低くない鼻も、此の樣子では胡坐を搔かう。頰が四角で、でつぷり肥つた、眉毛が太く目が細い。年紀は三十を三つ四つの處らしいが、淺葱縮緬の襦袢の袖口を舌のやうにだらりと出して、馬には馴れて得意と見え、兩方とも遣りぱなしに、懷手をして居るのである。ために硬ばつた身體もぐんなりして見えるのに、いや其の足ばかり、踏はだかるとは此の事で。股一杯に左右の鐙へ突張つた、と同時に、撥ねたのは鼻の下の髯である。べつたりと濃く、尖が耳の下へ、足と同じやうに突張つて、ピンと反つた、頤はすつぺりと剃つて靑い。そして長靴を穿いて居る。

錦木染葉を、薪の如く、大束に振分けて着けた上に、鞍の兩方、腰へ掛けて、一方に、厚さ尺にも餘りさうな大福帳を一册、一方に、緋羅紗をはいだ大袋に、みしと、ものを詰めて、はち切れさうなのを附けた、其の眞中に、埋つた形で反つて居る。

處で、馬の胴中から、背筋へ釣を取つて、眞直に竿を翳した、大旗が一旗、白地に赤のかゞりを取つて、眞中へ、墨を黑々と、……

謹求婚

その下へ二行に並べて、

奥州第一之美人。
雪松三葉子殿。

……と認めた。

飯坂の旅館、銀山閣、雪松のやしなひ娘……此の三葉子は、辨財天の祠の下なる花屋の店で、鶴樹に鑿を與へた其の娘である事を、更めて讀者に御記憶が願ひたい。

三葉子孃とも、また樣とも、まさか、姫ともかゝない處に、雲も霧も一所に來た、奥山から出た男の風采が思はれる。

澄して、懷手で、反つて居る。

馬の尾に成り、腹に成り、年倍なる克明さうな老手代がひよこ〳〵と一人、茶の中折のくたびれた帽子を目深に、顏の長い頤のこけたのが、まだ此の陽氣なのに、厚い外套を着た處、些と暑いから裾をたくし上げて、帶の處で手拭で結へて、鼠色のめりんすの股引を顯し、素足に草鞋、紺の前垂を其の外套の下から膝へ下げて、菅の道中笠を、二枚背中へ背負つたのが、すわりが惡くて、歩行くたびに、上下、ぱく〳〵と口を開く。重荷に小附の洋傘を、さゝずに杖について居る。

何と、道端の桑の樹も伸び上れば、粟が囁き、芋苗が笑ふ。——此の一行が、馬士は默り、旦那は反り、手代はひよこつき、笠は撥ねて、然もいづれも納まつた顏色で、其の堰場を過ぎ、高田、高取を通つて、中野村をはづれに、やがて飯坂の町端へ掛つたのは、時刻もちやうど、二時頃であつた。

二

十綱橋を右に、三階四階、五階など、摺上川の崖に臨んだ湯原溫泉の軒を重ねた、裏座敷の影々を、さながらの觀棚にして、見物を滿したやうに、人も馬も飯坂に向つて、廊外の爪尖上りに來た頃は、秋の白さを藍に流す、摺上川の溪流に、

おのづから颯と風が添つて、旗が字を飜し、ひら〳〵と揉まれたので、戸に彳み、店に並んだ、軒並びの土地子たちに、其の三葉子の名は讀めなかつた。

但し此の一行の扮裝を見て、

謹求婚。
奥州第一之美人。

とある……此の意義は、遠くに旗を見たばかりで、それ、來たと、皆目ひき袖ひき頷いたものである。——實は此の馬、此の客は、おなじ方角の山の中から、今年六月の初旬、一度此處を通つて、蕨屋と言ふ旅館で逗留をしたものであつた。——尤も青葉の頃である。今度ほど、馬の鞍は紅に染めなかつた。が、灰木、筥柳、いづれも、やがて色の染むべき枝と、葉と、手づくりの錦木を、狸が花火を背負つたやうに飾りつけて、卽ち件の大旗を翳して居た。

「やあ、これ、番頭、其の旗さ、玄關さ突立てゝ置いてくれめさい……座敷へ持つて上るでねえべ。」

洋杖か何ぞのつもりで、呆氣に取られながら蕨屋の男が持込まうとするのを、夏の其の時、此客が野良聲で押留めた。と言ふ……

——處で今度である。——

やがて蕨屋へ、此の客が乘込むと、例に因つて、心得て、番頭が錦木とゝもに玄關に立てようとしてゐる時、はじめて、雪松三葉子殿と、一行を書添へたのに氣が着いて、一寸一問答する事に成るのである。——言ふまでもない此の意味だと、三葉子に結婚を求むる事に成る。六月來た時は、繰返して言ふが、唯、「謹求婚。奥州第一之美人。」とばかりであつた。

次手に言はう——夏に乘込んだ折も、風つきは式の通りの山家ものであつた。しかし、鞍上に腰を埋むばかりに、大福帳の分厚なのと、大きな金袋を積んで居たので、緣起商賣には福の神が船を漕いで來たほどに喜んで、恭しく上段の間に通した。追つて宿帳の段に成つて知れたのであつた。が、これは大笹生から茂庭を掛けた、そちこちに餘程の地所持で、

勢、地所は米澤街道に名代の嶮山、栗子山を越えて萬世村に及んで居る。處で茂庭の茂十郎と言ふのである。が、大笹生のお旦那でも通れば、萬世大路の御前でも分ると言ふ。……あとのは何となく華族にでもありさうな稱に就いて、大なる山持、地所持の茂十郎を爾か呼習はすものであらう。萬世大路は、米澤に通ずる栗子越の大トンネルで、四百八十二間、八町ばかりの長さがある。こゝを抜けるには、白晝と雖も一人で二本づゝの松明を點すと傳へる。栗子山は、むかし此の峠を越えた旅人が、山路に栗を拾ふ婦を視て、巉巖かくの如き嶮峻に木の實を求むる苦勞に比すれば、海へ沈む蜃の樂なものだと歎息をしたさうである。萬世村、大笹生、皆深山の僻地、幽谷の別境と稱へて可い。狼も出れば、熊も棲み、蟒蛇も蟠まる。……就中鬼が棲む茂庭は、別に鬼場とも字を充てゝ、爺媼がもの語る土蜘蛛のやうな可恐い話の巣で、且つ仙人にも、天女にも、美しい、神々しい、お伽話の源は、恁くて摺上川の水上なる、仙翁ヶ嶽まで奥深く續いて居る。桃太郎か、爲朝の御曹子、朝比奈三郎でない限りは、うかつに分け入る事の出來ないかはりには、妖魔、惡獸、毒蛇の類のおびたゞしさと同時に、砂金もあれば、玉も出る。

世を離れて人に知られぬ、あのあたりの舊家には、今も、小判小粒の黄金は、其のまゝ數々の瓶に貯へて居ると、沙汰するのである。

さては其の地所持、豪族の一人か。

「……御道中、ようこそは御無事で。」

と、さきが間道絶所越の五ツ紋ゆゑ、蕨屋の亭主吉藏、せるの袴で取持つて、其の茂十郎の顔をしみ〴〵と見て眞顔で言つて、オホン、ホン、と出た咳を、謹んで口に手を當てたから可笑しい。

三

尚ほ、其の六月の時の續きだが——萬世大路の御前——茂十郎は、右の老年代を下座に、脇息馴れた床の間の身構へで、

「何ちうだい、やあ今時の旅になし、熊や狼が出べいものか。——其代には、猪や狢さ篠弓で毎晩のやうに打倒すだい。——御亭主、道は十里とねえもんだで、一度山ン中へ來て見なさろ。猿の子の蒸燒と、狸汁をして、うつ振舞ふべい。」

「な、のし、猿などは手どらまへでのし。」

と俯向勝の老手代が、滅入つた聲で、

「粟稗さ穂のふとらつこう成つた時節に、頰被りした若衆が野面へ出て、のし、藤蔓さ、三重にも四重にも腰のまはり眼さ、きよろり〳〵と見はなかすと、そんなま近所の、岩の突端や、高え枝に山猿が、のし、ちよこなんと坐つて、まじり〳〵と此の樣子さ視めて居るのが目に着くだ。可うござろと。其處でのし、藤蔓を解いて粟畑へ打棄つて、すたッこすたッこと、土藏腰、つき臼の陰さへ隱れるので……のし、やんがて、山猿どの、がさり〳〵と枝を傳うて背戸へ下りて、や、それのし、猿の人眞似ちうで、のし、右の藤蔓を、おのれの腰のまはりさ、なへ、ぐろり〳〵と引卷いて、粟の穂を摑んではさし、摑んではさし爲ますだろが、のし、それ大猿でも、こけ猿でも、人間から見ると、背つたけが小こいで、苞へ包んだべし、異な形に成る處を、わッと若衆が飛び出來て、ふッ捕へるだが、何とでござるよ。……眞似はしても、程らいを知らぬは、のし、畜生の悲しさちうべいも。穂を抜く事さ知んねえで、粟きびの根ごと腰へさいたでねえか、のし、手も足も動かばこそゝ。」

と痩せた頰を、いとゝ凹まして、息を内へ引くやうな調子で、陰氣に滅入つて話したが、よく聞くものゝ耳へ入つた。

亭主は思はず、膝を打つて、

「しめた——なァる程な。」

もの陰から竊聽をした女中たちも、我折つて、感心をしたのである。此の妙な客が、大笹生、茂庭からだと聞くと、狢が化けて出たやうに立騷いで、はじめ裏納屋へ曳込ん馬に當つて見たが、馬はものを言はぬ。すぐに、馴れ易い馬士に口

うちを引かうとすると、「あゝ、あゝ、あゝ。」と眞赤にいきつて、指で虛空を引搔廻した。啞である。――其處で、ひそひそと囁き合つては、ぬすみ見、立ぎゝなどしたもので。

「五里と、七里は離れたとは申しながら、御同縣に住居をいたして居りまして、恁やう申しては惡く都會がりますやうで、如何ではございますが。――旦那、此のな、川緣の廣場に花畑を拵へて――何か、農學士とかゞ病氣保養に、世間から隱退して遣つて居なさるので――西洋花、溫室もの、造りもすれば、見ぶつもさせ、賣りもすれば、一寸小休みには、手製の汁粉ぐらゐ商ふと言つたのがございまして。其處にな、尾の長い小猿が一匹飼つてございますよ。それをさへ珍しがつて、お客樣方は申すに及ばず、土地の女小供まで、聞さへあれば、からかひに參るぐらゐでございますものな。――お住居の背戸や、畠で、猿が飛廻りますのは、はて、聞きましたばかりでも不思議なやうでございます。」

「何ちうだ、御亭主――身體さ病で、學者で引込んどる人があるだとな。俺も、なし、學校さ仙臺まで出きた事もあるだども、洋服きて青い顏して何するだい。……山林と、田畑と、金子さへありやあ、裸身でつッ轉がつて、野山一杯にふんぞつて居られるでな。」

「御尤で。」

「人はこれ、學校さ行かねえと、世間の橋さ渡れねえと言ふだべが、有るべい橋だら、馬に乘つても渡れるだい。」

「はい、御尤で。」

「無え橋だら、俺が背戸山の鵯が囀つとる朴一本、根こぎにして橋にして、俺が勝手に渡つて見せるだ。」

「御尤千萬で。」

「見さる通り、猿と一所に突轉がつとる人間だあ。」

「御尤……いや、飛んでもない……へゝゝゝ……儀でございます。」

「おゝ、突轉がつとる人間だあども、なし、御亭主、御尤さばかりでねえ事があるだッちう。……そのさ、老手代は、年紀さ取つとるで、若え時も、小供の時も、記憶さ一所に成つて、今もつてに、背戸にがさ〳〵猿でも居るやうに言ふだども、粟の穗で生捉つたは、えッと古い、昔の話だでや。」

「へゝゝ、御尤。」

「いんね、なし、お旦那。……」

「まんづ、待ちろい。……親仁――それさ昔だべが、今現に山さ些と突入れば、づねえほど居るだで、なし、……俺が秋日和に、持山を廻つたと思つてくんろや。崖ふとつ向うの、小平てえ山懷の、暖とい日向にさ、大きい親猿が一匹よ小猿が十五六匹、ぐるらッと輪さに成つて坐ッて居べいが。――俺もはじめて見た。何するだと、目眼を開けると、親猿が、なし、ぴかッと陽に光るものさ掌で頂いた。――寶ものだべ。」

「へゝい、へい。」

「遣つて見べいか。」

と床の間にさし置いた、件の緋羅紗の大袋へ手を突込むと、ざくりと音がしたが、茂庭村の茂十郎、其の時一片の金貨を手にした。

「そんま、それ、恁うやつて、……其の親猿が頂いてな。鄰の小猿に渡したれば、其の小猿がまた、同じ事にさ頂くだ――御亭主、それ、遣つて見さろい、おもしろいで。」

と金貨を廻すと、

「はッ、恁やうにいたしますので。」

「あはゝ、頂いたらば取つて置けさ。御身がに、さッくれべいで。」

「いや、此は何うも、――御前樣。」

「何が、何が、順々に次から次さ、小猿どもが、おなじやうに頂いては廻し〳〵するだて、なし、はて、あの品さ何だ

ちかと思へども、谷向ひだで、分らんぞ。」

「如何樣、これは分りません。」

「お旦那は、のし、御亭主、それから、道を廻つて、谷づたひに、向うの丘へ出きめさつたけな。のし、樹の根でも、岩さ角でも、土地所で馴れてござるで、のし。」と老手代が引取つた。

「わい、と發けたら、キャッと共聲にぶッ騷いで、飛散る發機に、小猿が手から振落いて、慌てゝ逃げたで、其の光るものを拾うて見たばや。」

「勾玉、眞珠、砂金の類？。」

「何が！……柄の拔けた、眞赤錆の、小刀だか、鑿だか、小こい鐵の刃ものだのし。あはゝ、埒もねえ。——だが、なし、御亭主、其の一匹づゝ畏まつて、頂いては順に廻らかいた處さな、いんま思うても面白いやで。」

と再び袋から金貨を取つて、

「親猿が先づ頂くだ。や、御亭主、人數がなうては場が開けぬ、女中でも男衆、ずらりと其處へ並べめさろい。」

いや、さて亭主の發奮んだ事。

「これよ、これよ。」

ぽん／＼ぽんと、拍子にかゝつて手をたゝく。

「あ——い、あい。——」

女ども、男衆が、ぐるりと大廣間に輪に成つて、順々に金貨を廻すと、次手に「雷ちうをはだけろ。」と轟くが如く言を放つた。……例の、陰で障子を叩いて、どか／＼と鳴つて落ちる、落ちたものに、其の金貨を得させると言ふのである。——立入つた事のやうだが、亭主をはじめ、此は廊下へ出て、雷に成るものがなかつた。處で、その、陰氣な老手代が按摩取のやうな形で、トトトトと障子を叩いて鳴したのである。

二度めからは、金貨を所得したものが代つて立つた。此奴のたゝきやうの陰氣さは、其の騷ぎに、宿の女房が、小供を連れて出て來ると、音が響いて、「何ですかい。」などゝ云つて、金口の煙草を吹かしながら入つて來た客がある。騷ぎを詰つたのではない。「壯ですなあ。」となかまへ入る。——

頭の上の雷をきゝつゝ、

「あゝ、やれも草臥れた。」と茂十郎は、どたりと横に成つた。其のまゝ、ぐう／＼と鼾を搔いた。

雜と此の調子の人で。……

たゞ、謹求婚。の意味は、旗と錦木を立てた他に、何も言ふ事はない、とばかりで、四五日の間に、大分の金を使つて、馬に乘つて、もとの山路を歸つたものであつた。

酒屋、床屋など、人よりのする處で、土地の娑婆氣のあるものは、銀山閣、雪松の娘の、もう一人姉の方が、錦染子と言つて、いまや、東都で人の知つた女優であるから、或はそれが、此の土地で興行をするのに、人の不意に出た風がはりの宣傳か、それでなくとも、久しぶりで故郷へ歸省するのに、飾る錦の、其の染子を、勝手の違つた方角から出て、奥州第一の美人と騷がせる人氣取であらうも知れないと、喧しく噂した。が、何の事なく、町の床屋、酒場などの前を通つてむかしの米澤街道へ、木蔭を暑さうに、てく／＼と歸つたのに、また呆氣に取られた。

怎くては、求婚の武者修行である。

眇の神

一

時に、今秋の、此の乗込である――

――其處を通拔けると、もう溫泉間近の、遊廓の大門を前に、磨いて化粧した床屋の店前まで馬が出ると、仕事着を着た主人と並んで、巡査が一人立つて居た。――別に人動搖を制したほどの事ではない。が、巡囘の途すがら自然ら立淀んだものである。

飜然と下りた、此を見ると茂十郎が、馬を辷つて、引毫るばかりに帽子を脱いだ。

のみならず、口髭を捻つて、横つちよへすべりと引剝いだ。附髭である。……人は何と見るだらう、茶番のやうな練業して、警官の前を乘打するのは失禮だと思つたらしい。

で、丁寧に叩頭をした。

はじめから、苦笑をするばかり、別に咎める氣もなかつた處を、尙ほ恁う敬意を表されて視ると、惡い氣はしなかつたに相違ない。巡査はニコ〳〵と笑ひながら、

「や、景氣が可いですな、乘りたまへ。」

「御免されませい。」

と、老手代の治平が、ともに膝を撫でゝ腰を折つた。

すぐに鞍に直つて、廓へ乘る。

此の野芝居の信長のやうな、さしものとゝもに高く突反つた形が、ひよつくり、てつくりと馬の尻とゝもに靑櫻々々の暖簾に搖れつゝ、道は凸凹だし、廂の上へ肩が乘つて、廓の眞中へ行つたと思ふと、大袋から一攫み、紙幣をパッと高らかに撒いたのが、一度、御幣が靑空へ舞昇つたやうに見えて、ぱら〳〵と亂れてこぼれる。

「あれ、お紙幣だのし、銀貨だよ。」

――せめて鳶の片羽あらばと、のんのこさい〳〵、飛んで行きたやお江戸までとさ、のんのこ――と鼻唄で、緋めりんすを高端折して、雜巾がけをした手を休めながら、表二階の欄干に突立つて、此の馬を瞰下して居た、眞晝間のおいらんが、頰べたをたゝく柳の枝の餅ではない、此の紙幣と銀貨に、けたゝましい聲を上げて、逆にころけ落ちなかつたのが見つけもの、舞を舞つて表梯子から角兵衛獅子のやうにころけつゝ飛出すと、どつと聲を合せて、軒並みに人なだれを衝いて出た。

門際の人立まで、息を切つて駈合せて、百人ばかり、一齊に馬の周圍へ哄と寄る……

恁くとは知つても、其の用心はなかつたらう。ヒイ、ンと馬が棹立に怯えると、茂十郎は帽子を飛した、其の帽子と上下に、どんと落ちた。

馬は仰向けに馬士を投げた。鬣を風に飛して、魔の如くに逸れたでないか。

此の時である。旋風のやうに砂煙を捲いて、廓の出口へ、狂つて出た馬の前へ、ものをも言はず、スックとばかり突立つた、白き神の如き、脊高い男の姿があつた。

鳥打帽して、仕事着のやうな上被を絡つた、肩から紐で提げた目のあらい籠に、薔薇、カネーション、秋とは言へど、絢爛たる溫室の色を裝つたが、頭を白く、片目を白く、ぐる〳〵と繃帶して、目一つ輝く。然も松葉杖を左脇に支いたのが、ハタと其の一眼の光を放つて立つと、馬は身震ひをして、たゝらを踏んで後へ退いた。

二

「これは――これは、御前。」

と蕨館の大式臺前で、番頭が驚くと、茂十郎は長靴で踏はだかつて、裾の埃を拂き〳〵、

「其處さへ、矢張り押立つて置いてくれろや。」

「押立つて置けておつしやつて……」

「何ちうだ、難澁づらかい。」

「いえ、錦木で、根を飾りまして、記標の旗に「奥州第一之美人」……何か、手前どもに、乙姫様のやうなお娘さんでもありますやうで、難澁どころではございませんが……傍に其の、唯今、氣が着きましたが、（雪松三葉子殿）と遊ばした、此の、此でございますがな、御前様。」

「何としたちう。」

亭主も出て、中腰に屈みながら、一寸此に腕を拱いたし、女どもゝ顔を三つほど重ねて覗く。

「へい、些と何うも此は穩かでありません——いえ、あのお娘はな、いまの乙姫様ではありませんが、辨天様のおつかひ姫だ、と土地では皆が申しますくらゐで。此の奥州第一は、至極結構でございますが、恁うお認めなさいました處では——三葉子を嫁にくれ——と早い話が、へゝゝ、へい、門へ貼出しましたと同じ事で、へい、此をお認めなさいましたからには、御前様、御存じでございませうが、此の雪松と申しますのは銀山閣と言ひまして、軒並びの、へい、手前ども同業の娘ごゆゑに、穩かでございませんな、些と何うも、へゝ。」

と續け狀に頭を搔いた。

「軒ならびでも、門ならびでも、飯坂の立派な町が、此のお天氣に、何が穩かでねえちうだ。他さ女房、妾でねえ、はこいりの娘ッ子を、嫁に欲しいと喚いたばとて、交番でも町役場でも、何を、これ咎めるだ。承知のうして、くれるくれんは、さき樣の勝手だべし、嫁にくんろ言ふは、俺の方の勝手づらい。」

「御尤で……」

と亭主も、やゝあつて、納得して、

「いや、仰に從ひ、明細に立てゝ置いて、差支へございますまい。……」

「知れた事、なし。——いや、ゆいもねえ、そんねえな事より、篤と談合をせずば濟まん事が、こゝに一つ發起つたゝ。」

「とに角、まづ、お座敷へ。」

「然うでねえし、此の相談が、胡坐かいたり、湯さ流れたりしては相成んねえだ、なし、番頭。」

「は、は。」

「俺は、間違うて强い失策を遣つたゝよ。いんま、荒馬を、しやッきと引留めてくれせつて、小兒らに怪我過失もねえで濟んだ、恩に成つた人をや——俺は癈兵が花を賣るか思うたべし、（此は癈兵殿、有難うあります）ちて、金子一包を出いわす。あの時にぴかりと光つた目玉を見たか、眼がそれも唯一つだ。足が跛だ。身軀半ペラの怪ものだ。何が、これ、俺等が道中で、萬世トンネルの眞中で、人魂に逢へばとつても、あれほどには押魂消べいとは思はねえ。ふかッと俺、氣が着いた。夏來た時に話さあつた、花畑へ引込んだちう學者どもあるだかなし。何でも不氣味だで、此處まで遁込んだべよ、おとろしい。」

「えゝ、いえ、何でございまして……あの人は貴方樣——實はお馬が十綱橋袂へ見えたと申すのが響きますと、直ぐに、手前お迎ひに出ました處、飛んだお間違ひでございまして……いえ、却つて口を出しますも如何と存じて故と差控へて居りましたが——然やうではございません、あの人は、貴方、へゝ、此の奥州第一之美人、三葉子さんの兄さんでございますので。」

「や、や。」

「義理の……ですがな。」

「ふゝむ。」

「雪松謙吉さんと申します……騎兵の……たしか中尉かで居たんですから、馬を扱はしちやあ、へゝ、あの通りで。——えゝ怪我だか、我武者らだか、病氣だか、其の邊はよく分りませんが、何でも片目と、片足を、怪我不具に成つたんださうでして、それがために、此の夏中、金澤の聯隊から。——手前どもは、暑中休暇かと思つて居りましたのが、休職とか

退役とか言ふのでして。」

「はてな。こりや金子を出して、片目で睨まれたは無理でねえ、なし。」

「金子なら睨まなくても可いんでけすが」と亭主が金歯をチラリと笑つて、

「一體が、變つて居ますんでしてな。彼方の番頭も噂をしますが、五年ぶりとかで、ふいと歸つて來たのが、其の體でして、兩親の前へ兩手をつくと、(不孝ものを、お許し下さい。)と言つて湯へ入つて、(お母さん御飯を)と、その三葉子さんのお給仕で、かッ込むと、いきなり鍬を引背負つて、すた〳〵山の根の我が家の畠へ出て行つたと言ふ隊長さんで——氣になさる事はありやしません。」

「何ちうかせん事には成るまい。だが、はあ、娘子と一所に、其のさ、銀山閣に居るだか、なし。」

「いえ、其の花畑の學者さんが、もう五年越で、すつかり病氣が本復をしました處で、持つた寶で氣が變つて、もう一度東京へ出て歸咲をなさるについて、そつくり居抜き——(病氣をさる)——とまた御細君が緣起を祝つて——猿までが居抜きに成りましたのを、そつくり、あの方が買取つて、唯今は、誂があれば自分でもあゝ遣つて配達をして居ります。花畑の主人なんでございますが、何ですか、赤川の暗夜などに、一眼を光らして居る處は、とんと(ぬし)と言ひたい形なんでございましてな。」

「あゝ、お手代、それは、もし、は、はゝ。」

と蕨屋の亭主が不意に笑つた。唯、老手代の治平は、旦那の靴を拜むやうに蹲まつて居たのであるが、魔よけに成るとか言つて、巫女が持つやうな狼の牙の根附をつけた、大館わつぱの角形の提煙草入から、煙草を繼いで、煙管を伸ばしうつかりして、火だと思つたらしい、錦木の束の、中でも緋に染めた葉を掻廻しつゝも、陰氣な顏の、いま其の口を突出した處なので。

「ほい。」と、煙管を引込めるのと同時であつた……

「あ熱々っ」と、靴を脱いで不行儀に投出して居た足を引いて、茂十郎は跳上つた。市が榮えて、此を機に、温泉宿の廊下へ。……

ドッと大勢笑聲が引いて行く。玄關前の植込へ、山の影颯とたそがれて、亂れた上草履が、ばら〳〵と落葉した。

「あ、八百屋お七に、火の柴を積んだやうだ。」

温泉の雫の音がする、此の釣瓶落しの秋の日の夕暮に、紅々と殘る旗の根の錦木の葉に包まれた、旗にかいた娘の名を、さながら其のまゝの白い姿のやうに見た。……

見たのは、其の植込を透した門際に、もの見高く人立したうしろから、肩越に、密と覗いて、靜と立つた、眉の清らかな、しかしもの窶れした若ものである。日中暖かすぎたのが、厠がへしに雨もつ雲の、岩代の空を蔽へる下に、坵はつかぬが、羽織も着ない、うすら寒さうな姿して、片袖に、木片、木屑を堆く裝込んだ笊を抱へた、渠は一雛の雛吉である。

小春の狐

朝――此の湖の名ぶつと聞く、鯉の汁で。……燗をさせるのも面倒だから、バスケットの中へ持参の、ウィスキーを一口。鯉汁にウィスキーでは、些と取合せが妙だが、それも旅らしい。……

いゝ天氣で、暖かゝつたけれども、北國の事だから、厚い外套にくるまつて、そして溫泉宿を出た。

戸外の廣場の一廓、總湯の前には、火の見の階子が、高く初冬の空を抽いて、そこに、うら枯れつゝも、大樹の柳の、しつとりと靜に枝垂れたのは、「火事なんかありません。」と言ひさうである。

横露地から、すぐに見渡さるゝ、汀の蘆の中に舳が見え、艫が隱れて、葉越葉末に、船頭の形が穂を戰がして、「其の船の胴に動いて居る、が、あの鐵槌の音を聞け。印半纏の威勢のいゝのでなく、田船を漕ぐお百姓らしい、もつさりとした布子のなりだけれども、船大工かも知れない、カーン〳〵と打つ槌が、一面の湖の北の天なる、雪の山の頂に響いてその間々に、

「これは三保の松原に、伯良と申す漁夫にて候。萬里の好山に雲忽ちに起り一樓の明月に雨始めて晴たり……」

と謠ふのが、遠いが手に取るやうに聞えた。――船大工が謠を唄ふ――一寸餘所にはない氣色だ。……剩へ、地震の都から、とぼんとして落ちて來たものゝ目には、まるで別なる乾坤である。

脊の伸びたのが枯交り、疎に成つて、蘆が續く……傍の木納屋、苫屋の袖には、しをらしく嫁菜の花が咲殘る。……あの戸口には、羽衣を奪はれた素裸の天女が、手鍋を提げて、其の男のために苦勞しさうにさへ思はれた。

「これなる松にうつくしき衣掛れり、寄りて見れば色香妙にして……」

と謠つて居る。木納屋の傍は菜畑で、眞中で朱を輝かした柿の樹がのどかに立つ。枝に渡して、ほした大根のかけ紐に青貝ほどの小朝顔が縋つて咲いて、つるの下に朝霜の焚火の殘つたやうな鷄頭が幽に燃えて居る。其の陽だまりは、山靈

に心あつて、一封のもみぢの音信を投げた。玉章のやうに見えた。

里はもみぢにまだ早い。

露地が、遠目鏡を覗く狀に扇形に展けて視められる。湖と、船大工と、幻の天女と、描ける玉章を掻亂すやうで、近く歩を入るゝには惜いほどだつたから……

私は——

（これは城崎關彌と言ふ。筆者の友だちが話したのである。）

——道をかへて、たとへば、宿の座敷から湖の向うにほんのりと、薄い霧に包まれた、白砂の小松山の方に向つたのである。

小店の障子に貼紙して、

（今日より昆布まきあり候。）

……のんびりとしたものだ。口上が嬉しかつたが、これから漫歩と言ふのに、こぶ卷は困る。張出しの駄菓子に並んで、笊に柿が並べてある。これなら袂にも入らう。「あり候」に挨拶の心得で、

「おかみさん、此の柿は……」

天井裏の蕃薯は眞赤だが、薄暗い納戸から、いぼ尻まきの顏を出して、

「其の柿かね。へい、食べられましない。」

「はあ？」

「まだ澁が拔けねえだでね」

「はあ、ではいつ頃食べられます。」

きく奴も、聞く奴だが、

「早うて、……來月の今頃だあねえ。」

「成程。」

まつたく山家はのん氣だ。つい目と鼻のさきには、化粧煉瓦で、露臺と言ふのが建つて居る。別館、或は新築と稱して湯宿一軒に西洋づくりの一部は、なくては成らないやうにして居る盛場でありながら。

「お邪魔をしました。」

「よう、おいで。」

また、をかしな事がある。……くどいと不可い。道具だてはしないが、硝子戸を引きめぐらした、いゝかけんハイカラな雜貨店が、細道にかゝる取着の角にあつた。私は靴だ。宿の貸下駄で出て來たが、あを桐の二本齒で緒が弛んで、がたくり、がたくりと歩行きにくい。此店で草履を見着けたから入つたが、小兒のうち覺えた、こんな店で賣つて居る竹の皮、藁の草履などは一足もない。極く雜なのでも裏つきで、鼻緒が流行のいちまつと洒落れて居る。いや何うも……柿の澁は一月半おくれても、草履は駈足で時流に追着く。

「これを貰ひますよ。」

店には、丁度適齡前の次男坊と言つた若いのが、もこ〳〵の羽織を着て、のつそりと立つて居た。

「貰つて穿きますよ。」

と斷つて……早速ながら穿替へた——誰も、背負つて行く奴もないものだが、手一つ出すでもなし、口を利くでもなし唯にや〳〵と笑つて見て居るから、勢ひ念を入れなければならなかつたので。……

「お幾千。」

「分りませんなあ。」

「誰かに聞いてくれませんか。」

若いのは、依然としてにや〳〵で、

「誰も今居らんのでね……」

「ぢやあ歸途に上げませう。ぢき其處の宿に泊つたものです。」

「へい、大きに――」

まつたく何うものんびりとしたものだ。私は何かの道中記の挿繪に、土手の薄に野茨の實がこぼれた中に、折敷に栗を鹽尻に積んで三つばかり。細竹に筒をさして、四もんと、四つ、錢の形を描き入れて、傍に草鞋まで並べた、山路の景色を思出した。

二

「此の蕈は何と言ひます。」

山沿の根笹に小流が走る。一方は、日當の背戸を横手に取つて、次第疎に藁屋がある、中に半農――此の潟に漁つて活計とするものは、三百人を越すと聞くから、或は半漁師――少しばかり商もする――藁屋草履は、ふかし芋と此の店に並べてあつた――村はづれの軒を道へ出て、そゝけ髪で、紺の筒袖を上被にした古女房が立つて、小さな笊に、眞黄色な蕈を裝つたのを、恁う覗いて居る。と笊を手にして、服裝は見すぼらしく、顏も窶れ、髪は銀杏返が亂れて居るが、毛の艶は濡れたやうな、姿のやさしい、色の白い二十あまりの女が行む。

蕈は軸を上にして、うつむけに、ちよぼ〳〵と並べてあつた。

實は――前年一度この温泉に宿つた時、矢張り朝のうち、……其の時は町の方を歩行いて、通りの煮染屋の戸口に、手拭を頸に菅笠を被つた……此のあたり濱から出る女の魚賣が、天秤を下した處に行きかゝつて、鮮い雜魚に添へて、つまと云つた形で、おなじ此の蕈を笊に裝つたのを見た事があつたのである。

銀杏の葉ばかりの鰈が、黑い尾でぴち〳〵と跳ねる。車海老の小蝦は、餡色に重つて萌葱の脚をぴんと跳ねる。魴鮄の鰭は虹を刻み、飯鮹の紫は五つばかり、斷れた雲のやうにふら〳〵する……こち、めばる、青、鼠、樺色の其の小魚の色に照映えて、黄なる蕈は美しかつた。

山國に育つたから、學問の上の知識はないが――蕈の名の十やら十五は知つて居る。が、それはまだ見た事がなかつた。……それに、私は妙に蕈が好きである。……覗込んで何と言ひますかと聞くと「霜こしや。」と言つた。「はゝあ、霜こし。」――十一月初旬で――松蕈はもとより、しめぢの類にも時節は些と寒過ぎる……そこへ出盛る蕈らしいから、霜を越すと言ふ意味か、それとも此の蕈が生えると霜が降る……霜を起すと言ふのかと、其の時、考ふる隙もあらせず、「旦那さん何うですね。」とその魚賣が笊をひよいと突きつけると、煮染屋の女房が、づんぐり横肥りに肥つた癖に、口の輕い剽輕もので、淑女の方々に高い聲では申兼ねるが、猪は此のあたりの方言で、……お察しに任せたい。

「買うて遣らさい。旦那さん、酒の肴に……はゝゝゝ、そりやおいしい、猪の味や。」と大口を開けて笑つた。――紳士唄で覺えた。

藥師山から湯宿を見れば、しゝが髪結て身をやつす。

否……と言つたばかりで、外に見當は付かない。……私は其の時は前夜着いた電車の停車場の方へ遁足に急いだつけが――笑ふものは笑へ。――そよぐ風よりも、湖の蒼い水が、蘆の葉ごしにすら〳〵と渡つて、おろした荷の、その小魚にも、蕈にも颯とかゝる。霜こしの黄茸の風情が忘れられない。皆とは言はぬが、再び此の温泉に遊んだのも、半ば此の蕈に興じたのであつた。

――ほゞ心得た名だけれど、したしいものに近づくとて、あらためて、いま聞いたのである。

「此の蕈は何と言ひます。」
何が何でも、一方は人の内室である、他は淑女たるに間違ひない。――其の眞中へ顏を入れたのは、考へると無作法千萬で、都會だと、これ交番で叱られる。
「霜こしやがね。」
と買手の古女房が言つた。
「綺麗だね。」
と思はず言つた。近優りする若い女の容色に打たれて、私は知はず目を外した。
「此方は、」
と、片隅に三つばかり。此の方は笠を上にした茶褐色で、霜こしの黄なるに對して、女郎花の根にこぼれた、茨の枯葉のやうなのを、――爰に二人たつた渠等女たちに、フト思較べながら指すと、
「かつぱ。」
と語音の調子もある……口から吹飛すやうに、ぶつきらぼうに古女房が答へた。
「あゝ。かつぱ。」
「ほゝゝ。」
かつぱとかつぱが顱合せをしたから、若い女は、うすよごれたが姉さんかぶり、茶摘、桑摘む繪の風情の、手拭の口に笑をこぼして、
「あの、川に居ります可恐いのではありませんの、雨の降る時にな、これから着ますな、あの色に似て居りますから。」
「そんで幾干やな。」
古女房は委細構はず、笊の縁に指を掛けた。

「然うですな、此でな、十錢下さいまし。」
「どえらい事や。」
と、しよぼ〳〵した目を睜つた、睨むやうに顏を視めながら、
「高いがな〳〵――三錢や、えつと氣張つて。……三錢が相當や。」
「まあ。」
「三錢にさつせえよ。――お前もな、青草ものゝ商賣や。お客から祝儀とか貰ふやうには行かんぞな。」
「でも。」
と蕈が映す影はないのに、女の瞼はほんのりする。
安値いものだ。……私は、その言ひ値に買はうと思つて、聲を掛けようとしたが、際がない。女が手を離すのと、笊を引手繰るのと一所で、古女房はすた〳〵と土間へ入つて行く。
私は腕組をして其處を離れた。
以前、私たちが、草鞋に手鎌、腰兵糧と言ふもの〳〵しい結束で、朝くらいうちから出掛けて、山々谷々を狩つても、見た數ほどの蕈を狩り得た驗は餘りない。
たつた三錢――氣の毒らしい。
「御免なして。」
と背後から、跫音を立てず靜に來て、早や一方は窪地の蘆の、片路の山の根を摺違ひ、愼ましやかに前へ通る、すり切草履に踵の霜。
「あゝ、姉さん。」
私はうつとりと聲を掛けた。

三

「――旦那さん、その蟲は構うた事には叶ひませんわ。――煩うてな……」
もの言もやゝ打解けて、おくれ毛を撫でながら、
「ほつといてお通りなさいますと、ひとりでに離れます。」
「隨分居るね、……此は何と言ふ蟲なんだね。」
「東京には居りませんの。」
「いや、雨上りの日當りには、鉢前などに出はするがね。こんなに居やしないやうだ。よくも氣をつけはしないけれど……（しやうゝ）より最と小さくつて煙のやうだね。……また此處にも一團に成つて居る。何と言ふ蟲だらう。」
「太郎蟲と言ひますか、米搗蟲と言ふんですか、どつちかでございませう。小さな兒が、此の蟲を見ますとな、旦那さん……」
と、言が途絶えた。
「小さな兒が、此の蟲を見ると？……」
「あの……」
「何うするんです。」
「唄をうたうて囃しますの。」
「何と言つて……其の唄は？」
「極が惡うございますわ。……（太郎は米搗き、次郎は夕な、夕な。）……薄暮合には、よけい澤山飛びますの。」
……思出した。故郷の町は寂しく、時雨の晴間に、私たちも矢張り唄つた。

「仲よくしませう、さからはないで。」
私はちよつかいを出すやうに、面を拂ひ、耳を拂ひ、頭を拂ひ、袖を拂つた。茶番の最明寺どのゝやうな形を、更めて靜に歩行いた。――眞一文字の日あたりで、暖かさ過ぎるので、脱いだ外套は、其の女が持つてくれた。――歩行きながら、
「……私は蟲と同じ名だから。」
しかし、此は、蟲にくらべて謙遜した意味ではない。實は太郎を、浦鳥の子に擬へて、潔に思上つた沙汰なのであつた。
湖を遙に、一廓、彩色した龍の鱗の如き、湯宿々々の、壁、柱、甍を中に隔てゝ、いまは鐵槌の音、謠の聲も聞えないが、出崎の洲の端に、ほつゝりと、烏帽子の轉がつた形に成つて、あの船も、船大工も見える。木納屋の苫屋は、さながらその素袍の袖である。
――今しがた、此の女が、細道をすれ違つた時、蓐に敷いた葉を殘した笊を片手に、行く姿に、ふとその手鍋提けた下界の天女の佛を認めたのである。そゞろに聲掛けて、「あの、茸を、……三錢に賣つたのか。」とはじめ聞いた。えんぶだごんの價値でも說く事か、天女に對して、三錢也を口にする。……さもしいやうだが、對手が私だから仕方がない。「えゝ」と言ふのに押被せて、「馬鹿々々しく安いではないか。」と義憤を起すと、せめて言ひねの半分には買つて貰ひたかつたのだけれど、「旦那さんが見てゞあつたしな。……」と何か、私に對して、値の押問答をするのが極が惡くもあつたらしい口振で。……「失禮だが、世帶の足に成りますか。」ときくと、そのつもりではあつたけれど、まるで足りない。煩つて居なさる母さんの本復を祈つて願掛けする、「お稻荷樣のお賽錢に。」と、少しあれたが、しなやかな白い指を、縞目の崩れた晝夜帶へ挾んだのに、さみしい財布がうこん色に、撥袋とも見えず挾つて、腰帶ばかりが紅であつた。「姉さんの言ひ値ほどは、お手間を上げます。あの松原は松露があると、宿で聞いて、……客はたて込む、女中は忙しいし、……」一人で出て來たが覺束ない。次手に、いまの（霜こし）のありさうな處へ案内して、一つでも二つでも取らして下さい、……私は茸狩が大

好き――」と言つて、言ふうちに我ながら思入つて、感激した。

はかない戀の思出がある。

もう疾に、餘所の歴きとした奥方だが、その私より年上の娘さんの頃、秋の山遊びをかねた茸狩に連立つた。男、女たちも大勢だつた。茸狩に綺羅は要らないが、山深く分入るのではない。重箱を持參で莫蓙に毛氈を敷くのだから、いづれも身ぎれいに裝つた。中に、襟垢のついた見すぼらしい、母のない兒の手を、娘さん――そのひとは、厭はしげもなく、親しく曳いて坂を上つたのである。衣の香に包まれて、藤紫の雲の裡に、何も見えぬ。冷いが、時めくばかり、優しさが頬に觸れる袖の上に、月影のやうな青地の帶の輝くのを見つゝ、心も空に山路を辿つた。やがて皆、谷々、峰々に散つて蕈を求めた。かよわい其の人の、一人、毛氈に端坐して、城の見ゆる町を遙に、開いた丘に、少しのほせて、羽織を脱いで、蒔繪の重に片袖を掛けて、ほつと憩らつたのを見て、少年は谷に下りた。が、何を祕さう。その人のいま居る背後に、一本の松は、我がなき母の塚であつた。

向つた丘に、もみぢの中に、晝の月、虚空に澄んで、月天の御堂があつた。――幼い私は、人界の茸を忘れて、草がくれに、偏に世にも美しい人の姿を仰いで居た。

辨當に集つた。吸筒の酒も開かれた。「關ちやん――」私の名を、――誰も呼ぶものゝないのに、その人が優しく呼んだ。刺すよと知りつゝも、引つかんで聲を堪へた、茨の枝に胸のうづくばかりなのを尚ほ忍んだ――これをほかにしては、最うきこえまい……母の呼ぶと思ふ、なつかしい聲を、いま一度、もう一度。くりかへして聞きたかつたからであつた。「打棄つて置け、もう、食ひに出て來る。」私は傍の男たちの、しか言ふのさへ聞える近まにかくれたのである。草を嚙んだ。草には露、目には涙、縋る土にもしと〳〵と、もみぢを映す絲のやうな紅の清水が流れた。「關ちやん――關ちやんや――」澄み透つた空もやゝ翳る。……もの案じに聲も曇るよ、と思ふと、その人は、たけだちよく、高尚に、すらりと立つた。――此の時、日月を外にして、其丘に、氣高く立つたのは、其人唯一人であつた。草に縋つて泣いた蟲が、いまは堪らず蟋蟀のやうに飛出すと、する〳〵と絹の音、颯と留南奇の香で、もの靜なる人なれば、せき心にも亂れずに衝と白足袋で氈を辷つて肩を抱いて、「まあ、可かつた、怪我をなさりはしないかと姉さんは心配しました。」少年はあつい涙を知つた。

やがて、世の狀とて、絶えて其の人の俤を見る事の出來ずなつてから、心も魂もたゞ憧憬に、家さへ、町さへ、霧の中を、夢のやうに徜徉つた。――故郷の大通りの辻に、老鋪の書店の軒に、土地の新聞を、日毎に額面に挿んで掲げた。表三の面上段に、繪入の續きものゝあるのを、ほんやりと彳んで見ると、さきの運びは分らないが、丁度思合つた若い男女が、山に茸狩をする場面である。私は一目見て顔がほてり、胸が躍つた。――題も忘れた、いまは朧氣であるから何も言ふまい。……その戀人同士の、人目のあるため、左右の谷へ、わかれ〳〵に狩入つたのが、ものに隔てられ、巖に遮られ、樹に包まれ兇漢に襲はれ、獸に脅かされ、魔に誘はれなどして、日は暗し、……次第に路を隔てつゝ、恁くて兩方でいのちの限り名を呼び合ふのである。一句、一句、會話に、聲に――がある……がある……！　が重る。――私は夜も寢られないまで、翌日の日を待ちあぐみ、日毎に其の新聞の前に立つて讀みふけつた。が、三日、五日、六日、七日に成つても、まだその二人は谷と谷を隔てゝ居る。！……も、――も、もゝ、邪魔なやうで焦つたい。が、しかしその一つ一つが、峨々たる巖、森とした樹立に見えた。……さへ深く刻んだ谷に見えた。……赤新聞と言ふのは唯今でも何處かにある……土地の、その新聞は紙が青かつた。それが澄渡つた秋深き空のやうで、文字は一づゝもみぢであつた。作中の娘は、わが戀人で、そして、とぼんと立つて讀むものは小さな茸のやうに思はれた。――石に成つた戀がある。少年は茸に成つた。「關彌。あゝ、勿體ない。……餘りの樣子を、案じ案じ捜しに出た父に、どんと背中を敲かれて、ハッと思つた私は、新聞の中から、天狗の翼をこぼれたやうにぼかんと落ちて、世に返つて、往來の人を見、車を見、且つ屋根越に遠く我が家の町を見た――

なつかしき茸狩よ。

二十年あまり、恁くてその後、茸狩らしい眞似をさへする機會がなかつたのであつた。

「……おともしますわ。でも、大勢で取りますから、茸があればいゝんですけど……」

湯の町の女は、先に立つて導いた。……

湖のながれに道を廻ると、松山へ續く畷らしいのは、ほか〳〵と土が白い。草のもみぢを、嫁菜のおくれ咲が彩つて、枯蘆に陽が透通る。……その中を、飛交ふのは、琅玕のやうな蟲であつた。

一つ、別に、此の畷を挾んで、大なる潟が湧いたやうに、苅田を沈め、鴉を浮かせたのは一昨日の夜の暴風雨の餘波と聞いた。蘆の穗に、橋がかゝると渡つたのは、横に流るゝ川筋を、一つらに渺々と汐が滿ちたのである。水は光る。

橋の袂にも、蘆の上にも、隨所に、米つき蟲は陽炎の如くに舞つて、むら〳〵むらと下へ卷き下つては、トンと上つて、むら〳〵と又舞ひさがる。

一筋の道は、湖の只中を霞の渡るやうに思はれた。

汽車に乘つて、がた〳〵來て、一泊幾千の浦島に取つて見よ、此の姫君さへ僭越である。

「眞個に太郎と言ひます、太郎ですよ。——姉さんの名は？……」

「……」

「姉さんの名は？……」

女は幾度も口籠りながら、手拭の端を俯目にくはへて、

「浪路。……」

と言つた。

——と言ふのである。……讀者諸君、女の名は浪路ださうです。

あれに、翁が一人見える。

白砂の小山の畦道に、菜畑の菜よりも暖かさうな、おのが影法師を、われと慰やうに、太い杖に片手づきしては、腰を休め〳〵近づいたのを、見ると、大黑頭巾に似た、饅頭形の黃なる帽子を頂き、袒なしの羽織を、ほかりと着込んで、腰に毛巾着を覗かせた……片手に網のついた春を下げ、じん〳〵端折の古足袋に、藁草履を穿いて居る。

「少々、ものを伺ひます。」

ゆるい、はけ水の小流の、一段ちよろ〳〵と落口を差覗いて、その翁の、又一息憩うた杖に寄つて、私は言つた。

翁は、頭なりに黃帽子を仰向け、髻のない圓顏の、鼻の皺深く、すぐにむぐ〳〵と、日向に白い唇を動かして、

「此の丶、私がいま來た、此の縱筋を眞直ぐに、づい〳〵と行かつしやると、松原について畑を横に曲る處があるでの。……其を何處までも行かせると、沼があつての。その、すぼんだ處に、土橋が一つ架つて居るわい。——それ〳〵、此の見當ぢや。」

と、引立てるやうに、片手で杖を上げて、釣竿を撓めるが如く松の梢をさした。

「ぢやがの。」

と頭を緩く横に掉つて、

「それをば渡つては成りませぬぞ。(と强く言つて)……渡らずと、橋の詰をの、些と後へ戻るやうなれど、左へ取つて小高い處を上らつしやれ。其處が尋ねる實盛塚ぢやわいやい。」

と杖を直す。

安宅の關の古蹟とゝもに、實盛塚は名所と聞く。……が、私は今それをたづねるのではなかつた。道すがら、既に路傍

の松山を二處ばかり探したが、浪路がいぢらしいほど氣を揉むばかりで、茸も松露も、似た形さへなかつたので、獲ものを人に問ふもをかしいが、且は所在なさに、連をさし置いて、いきなり聲を掛けたのであつたが。

「いゝえ、實盛塚へは――行かうか何うしようかと思つて居るので、……實はおたづね申しましたのは。」

「ほん、ほん、それでは、此ぢやらうの。」

と片手の春を動かすと、ひた〳〵と音がして、ひらりと腹を翻した魚の金色の鱗が光つた。

「見事な鯉ですね。」

「いや〳〵、此は鮒ぢやわい。さて鮒ぢやがの……姉さんと連立たつせえた、こなたの樣子で見ればや。」

と鼻の下を伸して、にやりとした。

思はず、其の言に連れて振返ると、つれの浪路は、尾花で姿を隱すやうに、私の外套で顏を横に蔽ひながら、髮をうつむけに成つて居た。湖の小波が誘ふやうに、雪なす足の指の、ぶる〳〵と震へるのが見えて、肩も袖も、其の尾花に靡く。……手につまさぐるのは、眞紅の茨の實で、その連る紅玉が、手首に珊瑚の珠數に見えた。

「ほん、ほん。こなたは、これ。(や、爺い……其の鮒をば俺に讓れ。)と、姉さんと二人して、潟に放いて、放生會をさつしやりたさうな人相ぢやがいの、ほん、ほん。おはゝ。」

と笑ひながら、ちよろ〳〵瀧に、春をぼちやんとつけると、背を黑く鮒が躍つて、水音とゝもに鮒が鳴つた。

「憂慮をさつしやるな。割いて爺の口に啖はうではない。――此は稻荷殿へお供物に獻ずるぢや。お目に掛けましての上は、水に放すわいやい。」

と寄せた杖が肩を抽いて、背を圓く流を覗いた。

「此の魚は强いぞ。……心配をさつしやるな。」

「お爺さん、失禮ですが、水と山と違ひました。」

私も笑つた。

「茸だの、松露だのを些とばかり取りたいのですが、霜こしなんぞは、何の邊にあるでせう。御存じはありませんか。」

「ほん、ほん。」

と黃饅頭を、點頭のまゝに動かして、

「茸――松露――それなら探さねば爺にかて分らぬがいやい。おはゝ、姉さんは土地の人ぢや。若いばつちりとした目は、爺などより明ぢや。よう探いて貰はつしやい。」

「これはお隙づひえ、失禮しました。」

「いや、何の嵩高な……」

「御免。」

「靜にござれい。――よう遊べ。」

「何うかしたか、――姉さん、何うした。」

「あゝ、可恐い。……勿體ないやうで、ありがたいやうで、あゝ、可恐うございましたわ。」

「……」

「いまのは、山のお稻荷樣か、潟の龍神樣でおいでなさいませう。風のない、うらゝかな、こんな時にはな、よく此の邊をおあるきなさいますさうですから。」

いま春を引上げた、水の音はまだ響くのに、翁は、太郎蟲、米搗蟲の靄のあなたに、影に成つて、のびあがると、日南の背も、もう見えぬ。

「しかし、樣子は、霜こしの黃茸が化けて出たやうだつたぜ。」

「あれ、もつたいない。……旦那さん、あなた……」

五

「わ、何ぢやい、これは。」
「霜こし、黄い茸。……あはゝ、こんなばゝ蕈を、何の事ぢやい。」
「何が松露や。ほれ、こりや、破ると、中が眞黑けで、うじや〳〵と蛆のやうな筋のある（狐の睾丸）ぢやがいの。」
「旦那、眉毛に唾などつけつしやれい。」
「えらう、女狐に魅まれたなあ。」
「これ、此の合羽占地茸はな、野郎の鼻毛が伸びたのぢやぞいな。」
戻道、橋で、ぐるりと私たちを取巻いたのは、あまのじやくを訛つたか、「じやあま。」と言ひ、「おんじや。」と稱へ「阿婆」と呼ばるゝ、濱方屈竟の阿婆揩媽々。町を一なめにする魚賣の阿媽徒で。朝商賣の歸りがけ、荷も天秤棒も、腰とゝもに大胯に振つて來た三人づれが、蘆の横川にかゝつたその橋で、私の提げた笊に集つて、口々に喚いて囃した。その或ものは霜こしを指でつゝいた。或ものは松露をへし破つて、チエッと言つて水に棄てた。
「ほれ、眞個の霜こしを見さつしやい。此ぢやがいの。」
と尻とゝもに天秤棒を引傾けて、私の目の前に搖り出した。成程違ふ。
「松露とは、一寸、こんなものぢや。」
と上荷の笊を、一人が敲いて、
「ぽんとして、ぷんと、それ、香しかろ。」
成程違ふ。
「私が方には、ほりたての芋が殘つた、旦那が見たら蛸ぢやろね。」

「背中を一つ、ぷん撲つて進じようか。」
「ば〻芋持つて、お〻穢や。」
「それを食べたら、肥料桶が、早桶に成つて卽死ぢやぞの、ベッベッベッ。」
私は茫然とした。
浪路は、と見ると、悄然と身をすぼめて首垂るゝ。
あゝ、きみたち、阿媽、しばらく！……
如何にも、唯今申さるゝ通り、較べては、玉と石で、まるで違ふ。が、似て非なるにせよ、毒にせよ。此をさへ手に狩るまでの、こゝに連れだつ、此の優しい女の心づかひを知つてるか。
——あれから菜畑を縫ひながら、更に松山の松の中へ入つたが、山に山を重ね、砂に砂、窪地の谷を渡つても、餘りきれいで……たま〳〵落ちこぼれた松葉のほかには、散敷いた木の葉もなかつた。
此の浪路が、氣をつかひ、心を盡した事は言ふまでもなからう。
阿媽、此を知つてるか。
忽ち、口紅のこぼれたやうに、小さな紅茸を、私が見つけて、それさへ嬉しくつて取らうとするのを、遮つて留めながら、浪路が松の根に氣も萎えた、袖褄をついて坐つた時、あせつた頰は汗ばんで、その頸脚のみ、たゞさしのべて、討たるゝやうに白かつた。
阿媽、其を知つてるか。
薄色の桃色の、その一つの紅茸を、燈の如く膝の前に据ゑながら、袖を合せて合掌して、「小松山さん、山の神さん、何うぞ茸を頂戴な。下さいな。」と、やさしく、あどけない聲して言つた。
「小松山さん、山の神さん、

何うぞ、茸を頂戴な。
下さいな。――」
眞の心は、其のまゝに唄である。
私もつり込まれて、低聲で唄つた。
「あゝ、ありました。」
「おゝ、あつた。あつた。」
ふと見つけたのは、唯一本、スッと生えた、侏儒が蛇目傘を半びらきにしたやうな、洒落ものゝ茸であつた。
「旦那さん、早く、あなた、こゝへ、こゝへ。」
「や、先刻見た、かつぱだね。かつぱ占地茸……」
「一つですから、一本占地茸とも言ひますの。」
先づ、枯松葉を笊に敷いて、根をソッと抜いて据ゑたのである。
續いて、霜こしの黄茸を見つけた――その時の歡喜を思へ。――眞打だ。本望だ。
「山の神さんが下さいました。」
浪路はふたゝび手を合した。
「嬉しく頂戴をいたします。」
私も山に一禮した。
さて一つ見つかると、あとは女郎花の枝ながらに、根をつらねて黄色に敷く、泡のやうなの、針のさきほどのも交つた。
松の小枝を拾つて掘つた。尖はとがらないでも、砂地だからよく抜ける。
「松露よ、松露よ、――旦那さん。」

「素晴しいぞ。」
むくりと砂を吹く、飯鮹の乾びた天窓ほどなのを掻くと、砂を被つて、ふら〳〵と足のやうなものがついて取れる。頭をたゝいて、
「飯鮹より、これは、海月に似て居る、山の海月だね。」
「ほんになあ。」
じやあま、あばあ、阿媽が、いま、(狐の睾丸)ぞと言つたのはそれである。
が、待て――蕈狩、松露取は闌の興に入つた。
浪路は、あちこち枝を潜つた。松を飛んだ。白鷺の首か、脛も見え、山鳥の翼の袖も舞つた。小鳥のやうに聲を立てた。
砂山の波が重り重つて、餘りに二人のほかに人がない。――私はなぜかゾッとした。あの、翼、あの、帶が、ふと恁る時、色鳥とあやまられて、鐵砲で撃たれはしまいか。――今朝も潛水夫の如きしたゝかな扮裝して、宿を出た銃獵家を四五人も見たものを。
遠くに、黒い島の浮いたやうに、脱ぎすてた外套を、葉越に、枝越に透して見つけて、「浪路さん――姉さん――」唯、音の戀に、聲がくもつた。――姿を見失つたその人を、呼んで、やがて、茫爾した顔を見た時は、戀人にめぐり逢つた。
世にも嬉しさを知つたのである。
阿婆、これを知つてるか。
無理に外套に掛けさせて、私も憩つた。
着崩れた二子織の胸は、血を包んで、羽二重よりも滑である。
湖の色は、あを空と、松山の翠の中に朗に沁通つた。
故のやうに、就中遙に離れた汀について行く船は、二艘、前後に帆を掛けて辷つたが、其の帆は、紫に見え、紅

く見えて、そして浪路の襟に映り、肌を染めた。渡鳥がチ、と囀つた。

「あれ、小松山の神さんが。」

や、や、如何に阿媽たち、——此の趣を知つてるか。——

「旦那、眉毛を濡らさんかねえ。」

「此の狐。」

と一人が、浪路の帶を突きざまに行き拔けると、

「濱でも何人拔かれたやら。」一人がつゞいて頤で掬つた。

「また出て、魅しくさるづらえ。」

「眞晝間だけでも遠慮せいてや。」

「女の狐の辯にして、睾丸をつかませたは可笑なや、あはゝゝゝ。」

「そこが化けたのや。」

「おゝ、可恐やの。」

「やあ、旦那、松露なと、黃茸なと、眞個ものを賣つてやろかね。」

「たかい錢で買はつせえ。」

行過ぎたのが、菜畑越に、縺れるやうに、一齊に顏を重ねて振返つた。三面六臂の夜叉に似て、中にはおはぐろの口を張つたのがある。手足を振つて、眞黑に喚いて行く。

消入りさうなを、背を抱いて引留めないばかりに、ひしと寄つた。我が肩するゝ婦の髮に、櫛もさゝない前髮に、上手がさして飾つたやうに、松葉が一葉、靑々と然も婀娜に斜にさゝつて、(前こぞう)とか言ふ簪の風情そのまゝなのを、

不思議に見た。茸を狩るうち、松山の松がこぼれて、奇蹟の如く、おのづから挿さつたのである。

「あゝ、嬉しい事がある。姉さん、茸が違つても何でも構はない。今日中のいゝものが手に入つたよ——顏をお見せ。」

袖でかくすを、

「いや、前髮をよくお見せ。——一寸手を觸つて、當てゝ御覽、大したものだ。」

「えゝ、」

ソッと拔くと、掌に輕くのる。私の名に、もし松があらば、けに其のまゝの刺靑である。

「素晴らしい簪ぢやあないか。前髮にさゝつて、その、容子のいゝ事と言つたら。」

涙が、その松葉に玉を添へて、

「旦那さん——堪忍して……あの道々、あなたがお幼い時のお話もうかゞひます。——眞のあなたのお賴みですのに、何うぞしてと思つても、一つだつて見つかりません……嘘と知つて居て、そんな茸をあげました。餘り欲しうございましたので、私にも、私にかつて眞個の茸に見えたんですもの。……お恥かしい身體ですが、お言のまゝ、あの、お宿までもお供して……もし其の茸をめしあがるんなら、屹とお毒味を先へして、血を吐くつもりで居りました。生命がけでだましました。……堪忍して下さいまし。」

「何を言ふんだ、飛んでもない。——さ、一寸、自分の手で其の松葉をさして御覽。……それは容子が何とも言へない、よく似合ふ。よ。賴むから。」

と、かさに掛つて、勢よくは言ひながら、胸が迫つて聲が途切れた。

「後生だから。」

「はい、……あの、かうでございますか。」

「上手だ。自分でも髮を結へるね。あゝ、よく似合ふ。さあ、見て御覽。何だ、袖に映したつて、映るものかね。此處

は引汐か、水が動く。――此方が可い。あの松影の澄んだ處が。」
「あゝ、御免なさい。堪忍して……映すと狐になりますから。」
「私が請合ふ、大丈夫だ。」
「まあ。」
「ね、そのまゝの細い翡翠ぢやあないか。琅玕の珠だよ。――小松山の神さんか、龍神が、姉さんへのたまものなんだよ。」
こゝにも飛交ふ蟲の翠に。――
「いや、松葉が光る、白金に相違ない。」
「えゝ。旦那さんのお情は、翡翠です、白金です……でも、私はだん〳〵に、……あれ、口が裂けて。」
「えゝ。」
「目が釣上つて……」
「馬鹿な事を。――蕈で嘘を吐いたのが狐なら、松葉でだました私は狸だ。――狸だ。……」
と言つて、眞白な手を取つた。
湖つゞき蘆中の靜な川を、ぬしのない小船が流れた。

胡桃

旅人が言つた。

雪國の、緋葉の頃である。大通りに道普請に敷いた、一面の小砂利に、人のつけた路も、積つた雪を踏分ける一條路も、おのづから同じ形だと思ひつゝ、故郷の町を歩行いて居た。

小ぎれいな菓子屋がある。

彼は、その店へ入つた。

「胡桃の砂糖にくるんだのはありますか。」

旅人は土産を買ふつもりであつた。

「はい、ございます。」

と答へたのは、桃色の手絡で、艶々しい圓髷に結つた、綺麗な婦人であつた。脊のすらりとしたのが、やゝ大柄に見えたのは、一つは其の着つけの所爲であらう。……上下大島の緋を着て居た。羽織の紐を細くあはせたので、肉づきのいゝ胸も優しい。……襟も清らかで、肌着の緋が幽に覗く、八ツ口のきちんと正しく、内端に人形の衣裳に似て合つたのに、めりんすだと思ふ……眞新しさうな友染も花やかだが、藤紫の襟が深い、肩のあたりの、何となく、さみしいとよりは陰氣なのは、雪にうまれた女たちの例である。

「……唯今。」

然う言つたのは、先客があつたからで。……年紀は二十、二ツ三つ越したらうか。まだ初々しい、嫁さんらしい其の女は、小さな折を上包みの紙につゝみかけて居た處であつた。

何か膏の上で、うしろ向きの羽織の肱の柔かく動くのか、緋の袖なぞへにほのめいた。あれが、縞だと、透通る。……

向直つて、衣ずれの音をすつ〳〵と、前褄が捌かれると、店の正面へ出て、少し斜かひになつて——其處に、髪の赤縮

れた丸顔の女中の立つたのを、親しみのある態度で見ながら莞爾した。

「紅屋さんの女中さん、……あの……」

「へい。」

と、寒さうな聲を出す、兩の手首を筒袖へ引込めて、肩をすくめて居た。

「一寸、其處の砂糖の空箱の上に、先刻お客樣にお貸し申したまゝで、小皿に糊の入つたのがあるんですよ。……後生して、一寸取つて下さいましな。」

「へい。」

「おつかひ立て申して濟みませんこと。……お心安だてに……ほゝゝゝゝ。」

と微笑む。——瓜核顔の鼻筋の通つた、目の淸しいのが……微笑むと、……白い齒の、上の齒莖が漏れた。桃の熟した色がある。惜い、が、此が人間だ。然うでないと、品が好すぎて神々しからうと思つた。

「へい〳〵。」

「ね、何うぞ。」

と言ひかけて、在所を、目で知らせて、恁う氣組みに、袂の端を片手に取つた。

糊の皿は、ふと見ると、丁ど旅人の立つたうしろの荒けづりの箱の端にある。成程、明箱だ。折から時雨の晴間だつたが、まだ雫する番傘が一本立掛けてあつた。

旅人は借りた傘を縱について佇んだのであるが、店はぐるりと高く取つて、細い臺のやうに仕切つてある、土間に置いた瀨戸の火鉢も、傘の脊ほどに突立つ。いま其の氣組んだなりで、ひよいと褄さきを、もろに上げて、のしかゝつて乘出して、腕をずつと伸ばせば此のうつくしい嫁さんの手は皿に屆く。

女中を賴んだのは、旅人を憚つて控へたのである。……と氣がついて、

「此ですか。」

「あれ、まあ、……難有う存じます。」

と不意に打たれて口籠つたのを、すぐ、しとやかに言つた。が、やゝ急ぐやうに、爪先を浮かして疊を切つた。

上包みを糊で封じて、其の紅さしを拭布で反して、淸めながら、またいまのやうに、袂を袱紗に折つて、紅梅色の裏仄に、しとやかに八口へ挾んで、白やかな手を宙に伸した。天井に枠の車で、淺葱のテップが卷いてある。

肩も腰も大島もやゝ伸びたが、もう些とで指のさきが屆かない。——前に、短く戻し過したからである。

「よ……」

と小さく言つた。

頭もともに鬢が搖れて、うしろ狀に背を反す。其の高く縋らうとする指さきは、天井の雲の靑空に、紅い千代紙の袖口から、眞白な折鶴の舞ふ風情である。

旅人が恍惚する時、あさぎの紐は折鶴を卷いてすらりと下つた。

此の擧動に、ずるりと落ちた、袂を、口に銜へながら輕い吐息をして結んだ。

「お待遠さま……」

女中の、折と傘を引抱へて、前屈みに成つて、紺足袋で歸つたあとで言つた。

「折を一つ見せて下さい。」

「はい。」

二つ並べて、小さな方を此方へ寄せる。……賣る人が內端なため、旅人はその大い方を誂へた。

店の正面の硝子戶棚の、上の段に、カステーラと、西洋菓子の花のやうなのが並んで、胡桃は下の長箱に入つて居た。

嫁さんは橫顏で、伏目に膝をついたが、襟の色も紫に映つて、溫室の戶を開けたやうで、旅人の手さきを翳した火鉢の

灰も、此の時は溫い。

はら〳〵と、靜な音を立てゝ、白い胡桃は、撓ふ指とゝもに、折に並ぶ、と、見るうちに、一顆笑つたやうに、いや拗ねたやうに、あらず、からかつたやうに、ひよいと手を辷つて、ころんと疊に轉がつた。

此が、奇怪な、世の中の賽であつた。

頤で斜に視つゝ、撮んで拾つて、しづかに折に入れようとするのを視た。

「あゝ。」

旅人は聲を掛けた。

「不可い……東京へ歸つて、遣ひものにするんですから。」

嫁御寮はハッと色を染めた。恥ぢて、ハタとついた膝で、且はずむやうに衝と立つて、素直に店から戸外へ投げようとした。

また袖口に、天女の弄ぶ、白い筑羽根のやうな眦が見えた時である。

「勿體ない——勿體ないぞ——」

中仕切の、もの蔭から、人とも獸ともつかず、たとへば九官鳥の呟くが如き聲を發した……。

がらり〳〵がらり、ざら〳〵、……その蔭に、金平糖を搔くらしい音がする

あはれ、御寮は、胸を打たれたが、あわたゞしけに、もとの箱へ戻さうとしつゝ、また旅人を見て猶豫つた。

袂に入れようとしてたゆたつた。

時に、兩手を、雙の掌を、拜むやうに合せて、薄手なその甲に、圓髻の傾くばかり、頰を押あてながら、立つて旅人を視て言つた。

「……何うしませう、私、何うしたら可いでせう。」

「半分づゝ食べませう。あなたと……」

旅人は決然として言つた。

「……手で破つては不可ません。……私は此の國のものです。胡桃を知つて居ます——破ると碎けて了ひます。あなたの口で……あとを半分。」

「えゝ。」

睜いた瞳に、うまれて以來の、あらゆる影、過世の幻、未來の地獄さへ宿しつゝ、口の蕾が爽に開いた。あゝ、その齒莖もきれいだ。且つ血が上つて、たゞれたかと見る中に旅人はおのが舌の先が、白い魂になつて轉ぶよ、と其の胡桃を視た。

大な猿の山猿は、雪を澄れた實のやうに、半分嫁さんの掌から頰張つて、さつとかゝる片時雨の暗い軒を、傘もさゝず逃出した。

町に久しい金看板の老鋪の藥店の、金雲圓の門深き中庭に、千とせ年經る老松の、道をさしのぞいた梢に、ハタと目を打たれて、突當るやうに思つて振返ると、振上げ振廻す金平糖の掛鍋が火のやうに見えた。……片腕で摑伏せた夫の下に褄を染葉に、手を散して、肌を亂して、髻を水々と倒れて居た。

旅人は、瞬間、お伽話の魔神の犧牲の姫君を思つた。

が、あの肉體、手足は半分に裂く事は出來まい。……胡桃でないなら。

それにしても、甘い肝のやうに、いま咽喉を通つた胡桃の、此の一顆は、山深くあつた時、山の神樣が不思議なお禁厭をして置きなすつたのであらう。

松の梢にその山の影がさす。——

旅人は……然う思つた。……なほ、いつさんに逃げながら。

と旅人が言つた。

火のいたづら

欠

がら土間に獸の尾を曳く如く、吹込む雪が土間に吹敷く。

四

「まだ居ますわ、居ますんですよ。……あなた、何うしたら可いでせう。」

密と隙見をした表二階の白く成つた肱掛窓から、寒さと不氣味さに、お辻は肩をわな〳〵と、奥――と言ふ程もない、裏へ向いた――六疊ばかり、炬燵の傍へ、爪立つやうにして引返した。……

薄暗い電燈に、衣服の色もあせて、細い羽織の絣さへ雪にまみれたやうである。

「だん〳〵何うも人間業ではなくなりましたよ。」

「えゝ。」

と彌が上に引合せる、前褄、膝もがく〳〵して、お辻は見るにもいぢらしい。

「然うかと言つて、決して鬼だの、魔だのゝする事だなぞと思つては不可ません。――獸の所業ですよ。」

と淳吉は、其の炬燵に嚙りつくやうにしながら言つた。が、言ふものゝ、既にこの炬燵には火を入れない。實は火のない炬燵なのである。火どころか、傍に火鉢もない。二階も下階も、凡そ家中に、火の氣と言ふものは、餘さず皆消して居るのである。寒國の吹雪の夜に、之は宛然狂人の爲す業。

が、岩膜阿闍梨の擧動と言つたら、はじめて頷かれようと思ふ。

あの行者は、先刻に腰障子を外に出ると同時に、あともしめないで、ぎよろりと白眼に毒を漲らして、見返り狀に、片足をバツと擧げ、膝を掛けたが、みしりと眞中から太杖を挫折つた。

向側なる神社の裏垣の前に、其の杖を組違へて、さす叉形に、ふり積む雪に突さすと、むずと腰を落して掛けて、お辻の店を眞正面に、滋團扇で、屋の棟をこきおろすやうに上から、ねだ柱を掬ふやうに下から、上下に煽ぎはじめたので

欠人

ある。

淳吉が、びつしやり腰障子を引くと、お辻はその上へ蔀の櫺戸をおろしたが。

風はすさび、雪はしきつて、時ならぬ熊、鯨のあれとも思ふ、眞夜中に成つても、聊も其處を動かないで、いま、煽ぎ續けて居ると思はれよ。……

帳場の火鉢さへ、淳吉が指圖して、火種も殘さないで消さした。土間に松明、篝火をも焚いて、邪惡の氣を打拂ふべき地位にある淳吉の此のたよりなさは。——

是非もない、節分の夜に續けて火沙汰のあつたと言ふ、其の二度までも、實は少年の折の淳吉の粗相で、二度とも、二階の炬燵のために過失をしたのであつた。火伏のために、九ッの燈明皿に火を配つて、其の燈心の火を守るのに部屋々々を廻つて、だゞ廣い臺所……廁までも、人ずくなの侘しい折から、四年目の節分には、少年ながら責任を感じて、凄さと、可恐さと、心細さと、何よりも不氣味さに、ほろ〳〵涙を流したと言ふほどの弱蟲であるから。

と言ふのも、今は燒けて、もう影もないが、此町々の窓を覗く、向う山の山の端に、三本松と稱へた松は、天狗の棲家と恐れられた。其の松の焚けたのは、春のたけなはな深夜であつたが。折から以前の家の此二階に、病の床について居て、夜も寐られなかつた、淳吉の、まだうら若い母が、ほッと障子に映る炎の影を、誰より眞先に見て、肱掛窓に手を掛けると目前に見える山の峰の、三幹の大松明の、火花を散して燃ゆるのを見て、「あゝ、綺麗だ、綺麗だね。」と言つた——

火事だ。「あれ、大變。」と驚けば、恐れゝば可かつたのである——と除夜ごとの火沙汰を懸念して、淳吉の父が、鬼神に通ずると稱へられた易者に占はせた時、易者が言つた。——往昔からもまゝある事、天狗の火とて、眞個は燃えるのではない。不意に大なる炎を上げて、人の驚き恐るゝのを可笑がる、魔屬の徒然の惡戯である。三本松の火も、實はそれであつた。……町において最初に見たであらう淳吉の母の、「綺麗。」と言つた、思つたのがおどすつもりの魔の心に背いて、天狗は憤りをなした。腹だちまぎれに、眞に、その住家の三本松を焚いたのである、その祟だと、易者が言つた。

誰に聞いたか、占つたか、事實は其の通りであつた。

但し火のたよりは、母のなくなつた翌年からはじまつたので、家の焚けたのは五年目であつた。

それ〳〵の記憶のあるために、今度、縣の學校に聘せられて、着任したのはわづかに昨日の事であるのに、故郷の可懷さに、そゝろ町へ出ると雪に逢つた。もとの中學校がよひを思出して、故と合羽うる店で、菅笠や莫產の支度をした。その時、合羽屋の、臺所で、豆を煎る香いにほひに、今日の節分を知つた。

氣づかはるゝのは以前住んだ家のあたりの、火沙汰である。

いま住む人の人柄によつて、もし、言ふべくば、笑はるゝまでも迷信の注意をしようと實は、そのために故らに訪ねたのであるから、四辻の滋團扇の希有な形は、彼奴よりも淳吉の方が先に氣に掛けたほどなのである。

第一、美しい人の心弱さに對する、暴言に反抗ふために、水は清し、冷し、潔しと言ひは言つた。けれども、井戸水の其の實は、鐵氣よりも、むしろ薄く溝のにほひを帶びて、且つ濁つて居た。

これ、家のために相して、祝すべき事ではなかつたのである。

此の心で、恁く人妻と家を守るのである。焦慮は實に察すべきであつた。

「旦那さん、何うなりませう。」

「此のくらゐ用心をすれば大丈夫です。」

「行者は死にはしますまいか。」

と、おど〳〵して言ふ。

「幾人も女房を病氣にして死なせた奴です。彼奴の死ぬのは勝手だけれど、絶間も、隙間もなく煽いで居られるのは煩いですよ。」

「いくら其處等を閉めましても、ふう〳〵風の來ますこと。」
既に表二階と言ふのが、――焚出されて、彌が上に不工面だつた淳吉の父が、半作事に床を張つたばかりで世を辭した。
――あとの二代もそれなりで、疊はこの一間のほか今もつて敷いてない。
床板のあはせ目、すき間を、下の土間から吹き上げる風が、襖を突拔けて、みし〳〵と梁が鳴る。團扇で拂はれるやうに身に應へる。芥子粒の火の粉でも、この煽に誘はれると忽ち一面の炎に成りさうで懸念に堪へない。
「天井裏で、パチ〳〵音がしますが何でせう。」
「鼠。」
「あの、猫が騷ぎまして、此四五日、ちつとも鼠は居りません。」
「漏電でもすると不可いなあ、然うだ、危い、早速お消しなさい。」
「眞暗で……」
「構ひませんとも。」
「旦那さん、矢張煽いで居ませうねえ。」
「仕方がない。たゞ夜のあけるまでの辛抱です。確乎なさいよ。」
「はい、……くらがりで、冷酒ですけど、もうお一つ……。」
「いや、酒は澤山。もう口に泥みました。……あゝ、煙草が喫みたい。――いゝえ、私はもの好きです。勝手に火の番をするんです。――先刻から言ふ通り、恩にも被せられません、恩にも被ません。あなたが氣を揉むには決して當らないが、煙草だけはのみたいのですよ。」
「後生でございますから、めしあがつて。……煙草をめしあがるくらゐは、――あなた。」
「それが不可い。嚥にしろ、火打石でさへ、天井から白いものが……。」

「あれ、可恐うございます。」
「燐寸ぢやこの風に、どんな怪我があらうも知れません。」
「私、何うしたら可うございませうね。」
お辻はもう、ひつたりと寄添つて居たのである。
「お腹もおすきで在らつしやいませうし……せめてお餅でも焚いてと思ひましても、それも出來ません。火のない炬燵にあて申して。――あれ、まあ、炬燵蒲團の上が、さら〳〵しますのは、吹込んだ雪でございますよ。――何とも何うもまるで地獄へお落し申したやうな。……私、私の身體で出來ます事なら……旦那樣、さつき、あなたはお香々の淺漬の絡がお氣に入りました。私の、私の身體を網の目に刻んでも、さしあげたう存じます。」
白い膚がちら〳〵と、網の目のやうに、幻の暗に浮いて、袖の花の咲くのが見える。
「お辻さん。」
雪と雪と打つやうに、唇の觸れた音。
「いやな、お煙草――お煙草ですわ……お煙草ですわ。」
「あなたの綺麗なのに迷ひました。――餘り算盤じみるんですが、交番へ屆けるのが、一番よく、化行者を防げたのかも知れません。……知つてしなかつたのではない、それさへ氣のつかないほどに、私は迷つたんです。お辻さん、あなたが、その窓を覗いたやうに、毎日、二階から憧憬れて居ながらも、わけあつて其の人の死にゝ、身投げに行くのを、雪の降る晩、――十六七の少年ですから何うする事も出來なかつた。その時の娘さんに、あなたはそつくりなんです。――(今晩は。)(はい、)と言つて、その窓の、上と……下で、それが別れで……」
と言つて聲もせまつた。
しばらくすると、樞は水に浮くやうに靜に浮いて、腰障子が盜むやうに開いた。淳吉と、お辻の姿は、ふしまろんで戸

口へ出た、いや並んで立つて出たが、横吹の雪に吹廻されたゝめに、然う見えたのである。

二人は、家も身も守るに堪へなかつた。

且つ恁うするのが、のろひの澁團扇を防ぐに、最上の策であることに氣づいたからである。嫉ましいものゝない空家をば煽ぐまい。何故早く心が着かなかつたであらう。

行者の軀は、堆く成つて、眞白な瓦燒の竈が、口から火を吹くやうに澁團扇が渦に動いて居た。

颯と通抜けたが、しかし、同じ所を同じやうに、煽ぐのが留まなかつたのである。

大きな榎で坂が知れる。――二人が吹雪の峠を越したやうに、一坂、下町へ下りた時、どゞッと風が空へ、火の手が上つた。

恰も酒店の家の眞上である。雪に籠つて擴がる火は、櫻が霞んだやうである。

お辻は打たれたほどに、腰を落した。炎の影は、紅に膝にこほれて、褄が雪を染めて美しい。

吹取られた笠を手に取つて、女を庇つた淳吉の姿は、ちぎれる樣に白かつた。

失火の原因はわからない。

心中をしたとか。行方が知れないとか聞く。――二人は若かつた。故郷の濕地の老蝦蟇が、冬眠ればとて、凍死などするものか。……樞をおろしたあとの或時間を經てからは、垣長く結んで破團扇ばかりが、恣に吹雪に荒れ狂つて居たのであつた。

假宅話

新しい襖から、あどけない、上品な顔で、一寸まぶしさうに覗きながら框へ出た、――引詰の銀杏返も油氣のない埃だらけ、かすりの綿入の襟附に、めりんす友染の半幅帶、きぬてんの足袋と云ふ、煤拂の上被だけ唯今脱ぎましたやうな風を見ると、横町邊、此の土地で、看板といひ、姉さんといひ、名の聞えた元藤家のお取次らしい樣子はない。いや、その取次ではない。かうした家の取次をする抱妓、雛妓、仕込とか言ふものらしくさへないほどに、引かぶつた姿だが、

「あゝ、これが内の娘だ。しと、いま訪れた男には一目で分つた。

媚かしく褄を取つたり、品よく裾を曳いた、お母さんの風采には似る筈もないけれど、目鼻だちから、すらりとした脊恰好は、此の年ぐらゐの若い時の、その、お母さんにそつくりである。

唯、框と土間で斜違ひに向合ふと、豫て聞く一人娘の秘藏だから、惡く下目づかひをしたり、額で人の顔を覗きなどするのではない。何の蟠もないやうに、ぼんやりと客を見て立つた。裾にこぼれた紅入の襦袢の端にも、年らしい色氣は見えないのである。

「お内かい……」

それでも、お母さんとは言はなかつた。

「姉さんは？」

「はあ、あの……」

「お留守。」

「いゝえ、あの……」

藝妓家を訪ねて、お取次が此の調子では、大概分る。――客は最う引返しさうにして、

「いや、些とも用事のないものです。……また重ねて……」

「誰方。」

と、こゝで輕く手を支いた。

「桑……」

と皆まで言はせずに、

「分りました。――おほゝ。」

と、しとやかなものごしで、すぐ一重へだての襖を細目に、口許はかくしつゝ、うつくしい鼻筋を斜に、三日月眉の凜とした目ばかりで差覗いた。色の白い頸脚が、無理なあがきの姿態ゆゑ、伸びるばかりにスッと長いのに、ちらりと搦んだのは、透通るやうな紅羽二重で、

「ほゝゝ、分つては居たんですが、こんな、うまい態だもんですから。」

と言ふうちに、掛けた手のおもみで、襖が辷つて、思はず露れた半身は、おなじ其の紅で、雪の二の腕をくびつたやうな筒袖の間着ばかりで居たのであつた。

これは、しどけなさを通越して、人丈の京人形を裸身にしたやうなのを、顔を見せながら、襖一枚に隱さうとは、忍術つかひでないと難かしい。……

桑――と言つた男は、すぐに見て取り、

「これは。」と口の裡で。……すり硝子の戸口の方へ片足を退いて言つた。

「お出掛けの處だね。」

時刻も丁どである。

「秋島さんへ、五時のお約束。……えゝ、それだもんですから。」

そのまゝ襟を引合せて、

「まあ、一寸何うぞ。――こんなひどいバラックですが。」

「あなた、お上んなさいましな……さあ、あなた。」

と案内ぶりに、娘も立つた。

桑は左右猶豫つたらしかつたが、二人が襖へ隱れたので、潮時の暮方の、土間を、釣上げられた形に、ぽつんとして框へ上つて、

「でも、しかし、何だね、お邪魔をしますね。……實はね。……松江さん……」

「御免なさいましよ。」

と、姉さんの松江は、いまの冷かに燃ゆるやうな羽二重のなりで。――また居間から引返したのが、外套の肩と摺違つた。眞黑な水瓶に紅梅の影が映す風情で、框の三疊へ入交る。間着の褄の淺さにも、やゝ忙しい足の運びに、白脛の隱れたのは、友染のかくれ蓑、長襦袢を絞つて、萎して、腕に掛けて居たからである。

六疊の眞中へ、瀬戸ものゝ火鉢に、更紗形の座蒲團で、一寸見迎へて娘が招ずる。向つて、斜に、紙に格子を入れた芝居の書割のやうな小窓の下に、小さな鏡臺が据つて、一隅を取つた戸棚の前に、出來あひの長火鉢が置いてある。

松江の氣勢が、みどりを籠めて、薄紅に映るやうな、框の三疊の片隅へ、桑は外套を丸げて押した。

「飛んだお騒がせをして、濟まないね。」

「いゝえ、些とも構ひません。でも餘り失禮で。」

「すぐに（村咲）からと思つたんだけれど、此方の都合が何うだか知ら。……此頃は復興で、大分忙しいと聞いたから、お前さんが來てくれないと少々困る事がある。――太くお腹が空いて居るんです。待合へ行つて、いきなり御飯でもあるまいし、また御飯にした處で、生意氣に一人で食べるのもさみしいし……此方で、お約束でもあつて手間が取れるやうだつたら、鳥屋か、何か、一度底を入れて置いて、それから出掛けようと思つてね。一寸覗きに來たんだがね。」

「結構ですわ……紐はそつちのを。」

と、娘に低聲で、

「此の頃は、あなた、料理屋さんが何處でも嚴格になりましてね、三時間かつきり貰へません。……ですが、八時前には伺ひます。……あなた餘程……お腹がすいて在らつしやいますか。」

「あゝ、餘程すいて居ますよ。」

けはひに振返ると、覗いた顏が微笑んだが、

「まあ、お火がないぢやあないか、絹ちやん、——一寸、あちらへ何なさいよ。御免かうむつて。」

默つて、笑ひながら娘が來て、長火鉢の前へ、また蒲團を直して、

「何うぞ。」

と、輕く顏を傾けた。

「些と其處へは差出たやうだが、——では推參をしようかね。」

蒲團も薄い。……座につくのが落込むやうに床も薄い。火も薄い。灰も薄い。五德の影が黑く映る。底も薄いのに、ふと觸ると、鐵瓶の膚は冷くつて、肩の上の戸棚の隙間から、生壁のにほひとゝもに、二月の寒い風がぞつと身に沁みる。耳許に岩を打ち、石を切るやうな、鐵槌の音、手斧の響が、暮方を乂一しきり、トンカントンカントンカンと冴返ると、木を起す音、寢かす音、臼を、投げるやうな響きが交つて、づしん、どしんと鳴るたびに、眞新しさも、白く薄い、床も羽目も、障子も、襖も、ぶる〳〵と搖れ渡る。——炎のやんだ灰の山に、此の薄い家は、たゞ柱を纔にした船である。

男は惻然として四邊を視た。

あゝ、數へて、ものゝ一年はまだ經たない。——横町に此家一軒、朋輩だちが「衣裳藏」と呼んだ、小ぢんまりとした土藏を門に控へて、しもたやのやうに取り靜めた、千本格子の土間深い奥の居住には、さながら錦繪を散らしたやうに、

娘分も、かゝへも雛妓も居たものだが、今めかしく言ふまでの事もない、九月一日の宵、唯一時に灰となつた。——うはさの出た村喚と言ふ——町が背中合せに成る——土地の草分で、埃も塵もこぼれ萩、電燈の影も月あかりのやうに奥床しかつた待合の、おとなしい女房が、地震の日の家を守つて、藏の前の茶の間に籠つて、丁度此元藤家の二階の窓から火を噴出したのを視て、もうお了ひだ、と水を一杯、長煙管で一服吸つて、煙管を置くと、靜に立退いた、と言ふのを、——桑は、のちに訪ねて來た、おなじうちの女中に聞いた。

とばかりで、皆がちり〴〵ばら〳〵だから、當時は誰の行方も分らず、勿論、松江の消息も絶えた。……何の中で、なにまでも、十五六年來の馴染である。

四谷の方の山の手から、前に、はじめて界隈を訪ねたのは、十月も、もう半ば過ぎ、電車の築地行きと思つたのが、日比谷から一なぐれに仙女香の邊まで燒原を持つて行かれた時は、大袈裟でも何でもない。見知らぬ島へ放たれた氣がした。風の、日の朱の色の旗の南の天に高く飜るのを、あれは朝日新聞と、路傍の人の指すのを聞くと、濛々たる砂煙の中に、大煉瓦の青く顯れたのを見て、やがて、銀座の空の方角を思つたのであつた。

二時さがり眞日中である。日本橋の大通を行くのが、風に吹きまくらるゝ野中の開帳場の小屋掛を通るやうで、ふかし芋と草鞋を賣る乾店のうらの燒あとに、圓髷の御新姐風の、色白な婦の、盥で行水をする姿が、戸で圍ひつゝも露呈であつた。

赤い雲が其の空を浮いて行く……

どれが何處の町だか、辻だか、一時寫眞によく出た、薇蕨を黑く束ねたやうな、あの、鐵骨のあとを見るまでは、途に迷つて見當が着かなかつた。

杖なしには行き惱む……西中通、大工町、檜もの町邊、三味線の三筋の巷は、一面に燒瓦と壁と泥の丘に成り、土手を築き、崖に窪んだ、其の間を、奥つて縱つて、赤く亂れた細露地は鼓を壞したやうであつた。

思ひも掛けず清水が湧く。燒灰の中から、挫げながら水道の鐵管が覗くのである。中に小さな池を湛へて、一處さらさらと松葉の波紋の寄るのがあつた。これに何となく彳まれた。手に掬ふと、ほんのり白粉の匂がして、溝板をあゆみに投げた丸木橋に、ぬけ毛も梳も可哀であつた。

こゝを行つて、恁う入つて、たしか、此の邊と思ふ元藤家の燒あとに、硝子の缺は光つたが、錦の帶の灰もない。尤も時經つて、雨も風も幾通りか通つた。立退さきの立札の見えないのは其筈である。切組んだ杜、積んだ木は、ばら〳〵に散つて見えながら、まだ、大工の影も少なかつた。一軒、さいはひに、周圍が建ち、トタンが覆つた假宅に、おもて四枚の硝子戸を半ば開けた、……土間に鉋屑の散らばつたのが、ばら〳〵と風に亂るゝ中に婦が一人向うむきで、棧敷裏に憩ふやうに腰を掛けて居るのが見えた。「御免下さい。」こんな中で、藝妓家のたよりを聞くほど、氣の怯ける事はない。

「少々伺ひたいんですが、御近所に、たしかお鄰だつたと思ひますが、」「はい、おやまあ……桑さん。」「やあ、お仙さん」

「まあ、あなた御無事で。」「お前さんも無事で可かつた。」「おかげ樣で、……あなた、松江さんを、おたづね下すつたのね。……あの人も無事ですよ。」と唇がしまると、聲が濕んで、ほろりとして、「御安心なさいまし。……でも、もう皆散々よ。——此の通りさ、あなた。——まあ、お掛けなさまいし、此方へ。……私の家ぢやないんですがね。——お葉さん。」「あいよ。」と此の假宅のあるじ、おなじなかまで、色の淺黑いすつきりしたのが、引掛け帶の姉さんかぶりで働いて居た、手拭をはらひながら、框へ買ひたての可恐く綿の厚い座蒲團を敷いてくれたのに、腰をおろすと、傍のつんどの火鉢が、また脊が高くて灰が其の……燒あとで灰が少いは可笑いが、客商賣で此は綺麗にならしたから底の方に沈んで居るので、煙草をつけるのに、覗込むのも、やるせがない。「此方はね、當分、てんぷら屋をなさるんですから、ちとお通りがゝりに。……すぐ明日が店開きで。」とお仙が言ふと「此の體裁で、いゝ氣なもんでせう。弟が河岸に居ますから、魚は請合ひますが。料理方は私ですから、その思召しで御贔屓に。」「お前さん、うまくあがつたかい。」「あゝ、お午に揚げて見たよ。……お前さんの饅頭のやうなものぢやあないやね。」「おや、憚り。」と言つて笑つた。お仙は以前、吉

原の仲の町に居た。二十ばかりの若い時、いろが出來て、無理に引いて、苦勞して、馬道で小饅頭を蒸して賣つた。うどん粉が一つもかへらないで、義理で買つたものは皆腹を瀉したと言ふのである。

桑は煙草をつけて吻とした、が目のさきに堆い燒砂を捲きつゝ、河岸へ哄と吹き通る、黃に赤い土煙は、それなり神田を突拔けに九段下まで大波を打つて凄じい。唯一息吹靜まると、たとへに言ふも憚るけれど、箱根の大地獄を箕で打覆けたやうに見える、假宅の端居は巖端の孤屋に憩つた氣がした。大通りの電車、自動車も湯の湧く音に轟いて、響く手斧は研である。「夢のやうだね。」「全くよ、あなた。」と向直つた、お仙の姿のかはりやう、氣も八端の不斷帶、縮緬育ちの姉さんが、紡績の黑絣に、背負あげの紫、色はあせて、更紗の帶もめりんすらしい。肩を引いて、お仙は輕く胸を叩いた。「此の體です。夏の盛に此處らは餘計暑いでせう。私なぞ、手拭浴衣を着た切で遣ゆましたよ。」とお葉は茶を汲んで差置いた。「でも此方はじめ、私たち、白裝束で、日本橋の橋ばしらに立つ氣です。あつち、こつち、おともだちを捜しあひましてね、……はじめて顏を見ると、誰でも、ついうれしさに、そッと莞爾するあとから、ほろ〳〵と皆——お葉さんや、仙ちやん、松江さん——と一度名を呼合つちやあ泣くんですよ。……あゝ、肝心あなたが、おたづねの松江さんも、あんな、かうとうな人ですが、白裝束の勢です。歸つて來ます。うちも矢張り此の鄰家へ建てます。……實は昨日逢ひました。……一旦目黑の方へ遁げましてね。靜岡に堅氣のいとこさんがあつて、其處へ引取られて行きなすつたが、昨日の話で復興に極まりました。勿論、一度歸つたんですが、もうやがて四五日うちに來るでせう。隨分大變な目に逢ひなすつてね、——松江さん許ぢやあ、いきなり入口の衣裳藏が崩れたから、若い妓なんざ町内のかしらが出窓から裏口へ抱出したほどだつたんです——そこへ掛けちやあ私なんか身輕だけれど、それでも「どうも。」何うして……何處へ遁げたんだね。」「船で鍛冶橋へ遁げるものもあるし、富士子ちやんなんか其の方です。包を抱へて靑く成つて、河岸を駈出すのもありますね、仲通りの道の眞中にずらりと並んで、洋傘をさして、ラムネをのんで、三味線と、鼓を並べて、お花見だなんて眞赤になつて、言つてるのもあるかと思へば、お櫃一つ前に置いて、毛布に坐つて、拜んでる人もありま

すね――私は何しろ、目の惡い老女を控へて居ますから、莫蓙一枚、老女の手を曳いて、抱妓さんが三味線を持つて呉服橋を遁げたんですがね。……何うでせう、あの廣い橋の上が、渦を捲いて、兩方の欄干へ、半分づゝ人の身體が横に湧上つて噴溢れて居たぢやありませんか。――渡つた處の土手の傍に、材木が積んでありました。……その材木にさ、お前さん――少々此處を拜借つて、何をとつちたんだかお辭儀をしてさ、莫蓙を敷いて老女を坐らせて、さあ一息と思ふと、何處からか、大な火の粉がばら〳〵落ちて來るんだもの。もう何うしようと思つて居る處へ客のない自動車が一臺、楫の折れた船見たいで、ふら〳〵と泳いで行きます。――運轉手さん後生ですから、盲の婆を助けると思召して――まあね、いひ種は可厭だけど、……抱妓さんが然う言つて手を合せて拜んだのが利いて、お乘んなさいさ、お前さん――何でも構はず、往來の人が此の自動車へ乘上つたり、推込んだりするのに、また此の盲の婆がどのくらゐ御利益があつたか知れません――盲の婆さんが、然うか、と言つて、下りもすれば通してもくれたんですよ。それでもね、日比谷へ行くまでは眞晝間、平家の波がかぶつたやうに、車のまはりへぶら下つたり、攀上つたり、窓へ首を突込んだり。どかッと、それが、日比谷の處で、人間の雪崩のやうに離れて落ちましてね。吻と自分たちの身體になつたんですが、車は、私の伯父のうちの澁谷へ向けて馳つたんです。處がさ、――その抱妓さんが、何うしたんだか、窓から顏を出して、肩へ附着けるやうにして、運轉手の背中を敲いて、貴方は神樣だ。佛樣だ、救世主だ、アーメンなんて言出したぢやないの。……何うでせう、まるで夢中の樣子でね、實に俠氣だよ、俠だよ。消防夫だわよ、め組の喧嘩だわ。江戸兒だわ。こんな中で私たちを助けて下さるんだもの、ないわ、とても、探したつてないわ。お幾つでせう、まだおわかいのに、粹よ、ちやき〳〵よ。花川戸の何代目でせう、なんのつて、のべつ幕なし。……餘りなお世辭だから、聞いて居るものははら〳〵する。運轉手が腹を立てやしないかと、盲の老女は氣を揉んで、私の袖を引張るんでせう。袖を引張つたつて、背中を突いたつて、氣が上づッて、分りやしません。お禮を言ふわ、禮拜をするわ、時々黄色な聲を出して、大贊成、なんて喚くんでせう。のべつ幕なし、何うでせう、日比谷を出てから青山の終點あたりまで、息もつかずさ、お前さん、洒落や串戲ひ

ない、證據には顏が青ざめて目が血走つて、唇がひつゝッてゝ、其で片時も饒舌りやまない、弱りましたよ、何うもね――。」默つて、そつと入つて、土間に踞んで、お仙を拜んだ若い妓がある。「姉さん、何うぞ、何うぞ、もう。」「此の妓さ、桑さん。」――「いまは覺えて居ませんわ。」弱い聲して、「もう堪忍して、姉さん。」「おや、誰も叱言を言やしないよ。」「極が惡うござんすわ。少し氣が何うかして居たんです。……運轉手さんの心意氣が嬉しかつたもんですから。」と言ふ。「心意氣と言へばね、桑さんや、……それで居て、お賃を取らうと言はないんです。何うしても要らないと言ふのを、まあ、無理に、心持ばかり推つけましてね。」「姉さん、判を。」と小さな包を。「あゝ、水道の屆けは濟んだかい。」桑は茫然として聞いて居た。「お仙さんの許も、もう直きかね。」「さいはひ、伯父が大工だもんですから、建てるばかりにして持つて來るつもりで、澁谷で切組んで居るんですよ。――まるで社會が違ふでせう。來る人の取次なんか畏つて、入らつしやいまし、なんて言はうもんなら、先方で、よッと言つて吃驚さ。精々、おう、來や、上んなゝんか、勉强して、出來合の小姉えで居ますがね。朝の早いのと、お汁の辛いのには弱るんです。別して當節の事だから、あけ三時半、井戸端さ、お前さん、煮立つたお汁にうつかり口をつけやうもんなら、ほう〳〵ほう、惡くひよつとこに成りさうよ。」「あもう、安値なもんでも騙らうかね。」「いゝえ。今日は然うしては居られません。」と輕く褄さきを組んで言つた。「では、いづれ、私も、失禮しよう。」あゝ、あなた、まあ、ご緩り。――晩の掃除ではありません。こんな處でも、奥へお通し申さうと思ひますのに、餘り塵埃が酷うござんすから。」とお葉が箒の手を止めた。「氣になすつちや可厭ですよ。」「飛んでもない、何事も此際です。すべて、バラックで結構ですよ。」「ざつくばらんを、以來バラックと言ひませうかね、――ほんとにね……松江さんが聞いたら喜ぶでせう……屹とお宅へも伺ひますよ。」「いや、そんな大した客ぢやない。……家は燒けなかつたが、御同然にバラックさね。」聲を揃へて、「お近いうち。」桑は洋杖を滯ぐやうに取つて、煉瓦の露地を河岸へ、ふら〳〵と辿つて出た。

「お鄰家は繁昌しますか。」

「めしあがりたいの。」

と裾を曳いて、帶とけひろげの、朱のさや形の長襦袢を踏みくゞんで、白足袋ですつと松江が入つた。

娘が袖の傍を向うへ潛つて、窓下の姿見の藏を拂ふと、その、お絹と、面影もあはせかゞみに、伏目に見据ゑて、ふつくりとおとなしく頤で一寸撓めて、する〳〵と一枚小袖の衣紋を合せ、ぐいと扱いて、輕く襟を拔いた手に、すぐ下じめをきりゝとしめつゝ、

「——待合さんをなさいますので、あの通り、夜を掛けて御普請中で、もう天麩羅屋さんは休業なんですよ。」

「然う、——いや、まさか、此處で、てん丼は食ひはしない。そんなに地まはりには馴れないから。」

「些と御勉强なさいましな。——あゝ、いゝよ。」

と、娘が當てた帶をまはして、お太鼓にしやんとしめて、一寸帶腰にあがきを取ると、留の金具が、パチンと鳴つた。

切火を打つた、潔い音である。

長火鉢の前へ、端然と坐つて、

「失禮をいたしました。」

頸脚の又白さ……銀杏返も艶を增した。こゝは一服と言ふ處を、煙草を喫まぬも人がらである。

時に、向合つて顏を見た、桑の目を遣る方へ、松江も連れて——早や薄暗い欄間の方へ頭を向けた。燒けない以前の此の見當に、もう一昨年なくなつたが、旦那なる人の寫眞が掛つて居たのである。

それも燒けたが、今はない。

「何となく、晩方はさみしいね。」

「えゝ、つい無人だもんですから、あの娘がさみしがりましてね。」

「あなた、些とお遊びに。」

と、脫ぎかへを疊みながら、娘が罪のない目でぱつちり見た。

「震災當時にね、あなた、まだ一度もお目にもかゝりませんのに——燒出されました時はあの娘が、何なんですよ。」

「あなたの處へおたより申さうと言つたんですよ。」

桑は思はず、胸が切つた。

「心だけも嬉しいな——來ればいゝのに。」

「ですが、」

と一寸下ぶせに目を外した。

「あゝ、唯今お茶を——」

「いや、時間だ。——さあお出掛け。……家業が肝心だから。」

「御飯は？」

「どうにか我慢が出來さうだ、村咲へすぐ行きます。」

「ちやあ、然うして下さいましな。一口めしあがつてゝ下されば、三時間たらず、じきたちますから。……精々時間を切詰めます。」

「それぢやあお約束の方が迷惑だ。大丈夫待つて居ます——然やうなら。」

「あれ、氣が早い、お待ちなさいまし、御一所に、其處まで……」

「あゝ、然う——秋島はおなじ見當だつけ。」

門口を衝と出ると、溝の溢れで、溝板が浮いて、足が留つた。

「姉さん。——」

と娘が呼ぶ。

松江は駒下駄を穿いた處。

「お母さんとお言ひ――此方は大事ないんだよ。」

「えゝ、お母さん――早くね、早く歸つてね。」

「何だね、お絹。」

「だつて、私、さみしいんですもの。」

「あいよ――ねんねえで困つちまひます。」

「……」

「足場が惡いんですから、お氣をつけなすつて……」

「……」

桑は默つて、うつむいて辿つた。

傍へ並びもせず、二三尺内端にさがつて、お端折りながら、すら〳〵と、梅のかをりの衣の音。

「……のちほど。」

横町へすつと切れる。

「や、もう來たか。」

燒あとは、大分の町並が、つい目の前で、辻に打撞つたやうに驚いて分れたが。――「一度も、お目にかゝりませんのに――燒出されました時は、あの娘が……あなたの處へお頼り申さうと、」……桑はしみ〴〵と思の胸に繰返した。――

「お母さん、早く歸つてね、あたし、さみしいんですもの。」更に身に沁みて繰返した。

ぶつかり放題、角の煎餅屋で、煎餅をめちやくちやに買つて、大きな包みを、風呂敷もなしに引かゝへて、つか〳〵と元藤家の門へ引返した。

お絹の起居の影法師を、臺所に透して、廂合を裏へ廻ると、母さんの手だすけに、此の裏口を店にして、娘がお煮染を拵へて賣つて居る。近所の女中の買手が一人。――天鵝絨の足袋で立働いて、鉢に裝つて渡すのを待つて、入かはつて桑は樹のやうにすつくり立つた。

「お絹ちやん――」

あはれ、逢初めてから十幾年、力のないのを憚つて、口へは出さない、思ひ戀ふる一念が、松江の乳を通つて、娘の血には徹つたのである。

しばらく言葉が途絶えたが、

「ありがたう、私は絹ちやんに禮を言ふ。」

と、娘の顏を熟と視た。

お絹は鬢を撫でゝ莞爾した。

きん稲

「おもてに案内がある、案内とは誰そ――」洒落て抜からない男だと、「いや、それがしでござる。」とでも言ひさうな處だが、何うした用事か知らないが、眞晝間、檜物町の藝妓家を訪ねたのが――聞かない振をなさい――實は私……だから苦笑ひをして突立つた。

取次ぎに出たのは渾名を河童と云ふ、雛妓から一本に成りたてのお俠で、自分の好きだか、誰かの註文だか、藤間へ通ふ隙に、大藏流を嚙つて、清水、伯母ヶ酒どころ二三番覺えたのが、（ざんざと鳴るはの、よしの葉のよい女郎）……と、姉さんの名が芳乃だから、一寸叱言が出さうだが、出ると、（その、女郎ではござんせんよう。）と唇を飜へしさうな狂言諭で、小舞の稽古をやつて居た處へ、「今日は」が打撞つた次第である。「これは横どの、あなたなれば、案内におよびませうか、つゝとお通りはなされないでっ」と圓い目をして額で笑つて、素の眞顏で、「何う……ぞ。」と言ふ。「何うぞはいいが、内なのかい。」「然やうでござる、賴うだものは、今日山一つあなたへ寺詣をいたしてござる。」「留守か。」「いゝえ、――知つてゝよ。すぐ歸るわ。……然う言つて出掛けたのよ、ぢきですわ。取つてくれた火鉢ほどの陽氣ではなかつたが、引寄せて煙草を吹かして、「河童子、あひかはらず化けるなあ。」「知らなくつてよ。」「皆は？」「えゝ、お稽古だの、お湯だの。」「これは。」と私は小指を出した。

藝妓家で、内證で聞くのに小指はをかしい。が、此はもう妙齡に成つた――芳乃の實の娘がある……姉さんがきちやうめんな處へ、また内氣で、一人では西河岸の地藏樣の緣日にも出ないほどだと、豫て聞く。……まだ見た事のないのであるが、然うした堅氣だけに此のおとづれは、何となく、其の娘に顏を見られるやうで、きまりの惡い思がした。――昨夜だつけ――四五人で一座の時、何が緒だつたか、深川の「きん稻」の話が出て、一度是非と姉さんが言ふのに、友だちは皆品行方正だし、いそがしいから、私が其の選に當つて、で、今日の約束をしたのであつたが――河童は、眞仰向に二階を見上げて、「おごうは此でござる。」と忽ち俯向いて手で針の運びの眞似をする。「感心だなあ、ちよ見習へよ、」「さうは化け切れなくつてよ。」「此奴。」「おほゝ。」とついと立つ。――いさゝか通力があるくらゐ敏捷いから、奥が可

なり深い所へ、靜にあいた格子の音。私には一寸分らなかつたのを――すぐ聞きつけて出迎へた。姐さんが歸つたのである。「入つしやい――向うの角を曲りますと、あなたが横町へお入なさるのを遣くから見ましたんですよ。」急いだかして、輕い上氣。火鉢の横へ膝をついたのが、次の室に茶を淹れて入る河童の方へ……澄した目遣ひながら、何だか氣がさしたやうに瞳を返して、伏目に指を反して、たけなが指の白く撓ふのを一寸見て、片手で綿大島の羽織の襟を扱いて、「すぐお供をしますから。」と障子のしまつた縁の傍の、鏡臺の方へ、斜に肩を反して横向に成つた樣子は、かう何だか悠揚として、如何なる時でも、しつとり落着のある座敷のとりなりとは急に違つて、三十を越した姉さんにも、娘の頃が偲ばれた。こんな男の入込む家風でないのが察しられる。……馴れないから河童に對して、やゝ含羞んだものらしい。と、座にもよく着かないで、「一寸。」と次の室へ、それなりすぐ立つて、茶を出して引退る河童の背中へ、悪りかゝるやうにした姿。脊がすらりとして居るから、奴が化けて出た顱の上へ、袖の柳が靡いたやうで、「萬年堂へ行つて、ね、あゝ……急ぐんだよ。」「構つちやあ困ります、それに、とに角一杯と言ふ處だから、甘いものは……」「いつかおいしいとお言ひなすつた。鯨羊羹があれば可うございますが――少し時節が過ぎましたから。いゝえ、お相伴に……今日は佛樣にも。」と、簞笥の前へスッと行く。

承塵の壁に、引伸しの寫眞が金の額縁で掛つて居る。……年配は……だが、父さんにしては當世過ぎる。勿論、亡く成つたと聞く旦那である。工面はわるくても、こゝは作者だ。書く方の融通はつく。でつぷり肥つて、高切つたとやりたいが、然うは行かないから默つて置く。第一、私より年紀が少い。――「……だね。」と片膝を立てゝ、見るやうに見ないやうに、其方の頬邊へ平手を當てると、姉さんは、はめ込の對の簞笥に並んだ衣裳に手を掛け、肩で脫ぎがまへの羽織の紐をいぢりさまに、ほんのりと瞼を染めて、「姉の日ですよ。」「横を向いて、ありがたい。」とうつかり言つて、きよつとして茶を飲んで、「お寺は？」「深川なんですよ。」「それだと二ざいに成るね。」「いゝえ、結構です。……ひどい埃ですこと。」と脫いだのを衣裳に掛けて、「一寸、失禮を、撫つけますから。」で、向うむきに鏡臺の蔽を拂つた。早い處、膝だけついて少しうかした、帶腰がきりゝとする。八口がしまつて、內では何處か所帶じみて見える處が、藝妓と言ふより、年增のお師匠さんの風采がある。「六すが」と書いた札の、横櫛子の柱に掛つたのは、何とか店とか、町とかの名とりだらうが、長唄より、其の、踊のお師匠さんの風采がある。

かた〳〵かたと土間が鳴つて、「急いでござる……たのうだ人。」と言ひかけて、わるく默つて、急に寂然して、茶棚の鉢を取出す音。「あつたかい。」「あの……」「いま行くから。」で羽織を小濱の黑の紋に着換へて、其茶の間へ出て、「然う……生憎だつたね……あなた、お目に掛けますばかり。」これは頂かないと、わけ知りの友だちに叱られる。私は烏羽玉を半分食べた。――あゝ甘い。

姐さんは木皿に取つて、佛壇に備へた。遠慮ではあるまい、額の中のは酒だらう。一寸拜んで、その綺麗な指に、鏡臺の抽斗から、つき膝で、紅玉の指環を取つて通した。「お待遠樣でございました。」「行つていらつしやい。」「たのむよ。留守を」「其の段な、ちつともおきづかひなされますな。」ドブンといふやうに奥へ飛込む。まだ戸を出ない前である。

戸外の日は眩しかつた。――姐さんは町內を拔けるまでは涼傘をさゝないで、すこし退つてあとについた。それだのに、眩しいのに、私は何故か柳の影を行くやうな氣がした。そして、其の影に、半襟と背負上げの色が淡く映つて、しつとりと肩にかゝる思がして、胸に何となく小唄がきこえた。

たゞし此の邊兩側は、日中取澄して、靜まりかへつて、稽古三味線の音も漏さない。

電車は洲崎行を吳服橋で待つた。が、見る〳〵うちに人間の埃と成つて、……砂煙に動搖むばかりで、乘れさうな樣子はない。

その人垣に、惱んだ卯の花のやうなのが少し寄つて、「自動車にしませうか。」「成程。」私はぎくりと胸にこたへた。藝妓を誘ふのに自動車を心得ないのは不覺であつた。「何處か此處等に。」「知つて居ます。」すぐ右側の横町を入つた處に組立てたやうな構の店がある。姐さんが其處へ立つと、艶かな黑塗のが、ぐうつと土間を動いて、勾配を下りるやうに、傾

いてづんと据る。

「永代を眞直に――」何うかすると、何處かの內室には見えても、藝妓らしくはないのだから、其の段は仔細ない。が、あの、雜沓の中である。馴れない私は、唯はら〳〵して殆ど口も利けなかつた。驚いた事には、激しい人ごみは八幡樣の前まで續く。――覺えて近い頃までは、もう永代を越すと、汐時でなければ、いかに込んでも入江の水鳥の群れたやうな景色だつたものである。「その邊、その邊だよ。」姐さんがちやんと用意した祝儀を渡した。「いくらだい。」「いゝえ。」とおさへて、「檜もの町の……分りましたか。」「附添が、存じて居ります。」自動車の搖據つたのが、またけたゝましく湧上るやうな音を立てゝ居る傍へ姐さんは靜に立つた。その爾く靜なるにつけて、私は少々心の焦つた。汐見橋――を前にして細々とした露地を二つ三つ覗かないと、裏通りに、殆ど水と水に圍まれた……また其が風情の、きん稲の場所が、澄して、ついでは知れにくかつたからである。「一寸、お待なさいよ。」前へ、しるべの露地を見ようとして出かゝつた時である。自動車はまだけたゝましく鳴つて居る。ト私たちが立つた空を、片側なんぞは二階家までもない、屋根上の低い處を、赤い底をスッと飜して、一機の飛行機が、その腹に、凡そ自動車ぐるみ前後の往來、八九十人一息に呑んで泳ぐ樣に通つた。不思議に音がしない。同時に水の町も、青い空も、颯と雲と煙とで灰色に暗くなつた。私はトボンとした。不意に目の上を泳いだ赤い船である、中から落された樣でもあり、あはや吸上げられさうでもある。――驚いたと言ふよりも押魂消たと言ふ方が顏色にも似合つて可い。と思ふ〳〵、海手南の天へ斜に遠く霞んで行く。振返ると涼象をついて一人路傍に彳んだ芳乃の姿が、武藏野の果のあしの一本に似て寂しく見えた。――何故だらう。……「八幡樣から先方は初めてです。」そのくらゐな話は車の上でした。少くとも、此の時は、たゞ導かれなければ成らない私に一寸離れた間の心細さであらうも知れない。が、私は又、うつかりすると、その、空の船が、水際の立つた、あの樓から、根こぎに宙へ引攫つて行きさうな氣がしたのである。否、唯姐さんばかりではない。此の不意に顯れた空を漕ぐ赤い船は、江戸のむかしの面影を半ば其のまゝの、もとの深川を、包んで飛んだやうな氣がした。

雛妓の太郎冠者などは實はどうでも可い。私は此の心を言ひたいのである。……また不思議に、何う云ふ氣、何の考もなしに、其の日も、それから後も、此の飛行機の事については、一言も話の觸れなかつたのも、思へば希有である。姐さんも言はなければ、私も言はない、言はうと思つても逢ふとゝもに忘れた。

何しろ、妙に、これがために心持が顚倒した。きん稲は材木堀に浮いて、座敷が中二階のやうに水に臨む。水から水、水から水へ入込んだ內堀だから、浸した材木は、時に微に動いても、筏も漕がなければ船は來ない。前後にも、此の時とも、五六たびは行つたであらうが、中で唯一度、いなせな半纏着が、角材をぐる〳〵と、さゞなみに乘つたのを見たばかりである。其の棹は水とゝもに眞靑であつた。――と言ふ家なのであるから、窓を隔て、小緣を越し、欄干に水を挾んでこゝに見る美人の風情は類がない。――よそで見る美人は、たとへば錦繪のやうであるとする……こゝで見るのは、錦繪、が活きるのである。

めづらしく、國貞の繪そのまゝな、姐さんと、こゝに二時を相對したかつたのが、心持であつた。――第一、遠出の謝儀なしに、誘き出して、深切ではあるが、高價くはない御馳走で、いま時錦繪の魂など云ふ……然うした不料簡だから打壞れたのに無理はない。

空の船は、繪の魂を人間に返した。從つて浮世離れた水の寮に於ける其の日の話も、偏に物價高値の共鳴であつたに過ぎない。――水馬を視めて、蛙を聞いた。

見得のない姐さんは、折を提げた。

「あら、お珍しい。」汐見橋へ出る、電車の處で、いま其處へ下りた圓髷の若いのが聲を掛けた。私は微醉の勢で、つかく〳〵と寄つた。「まあ、どちらへ。」「儲口を搜して居るんだよ。」「あんなことを言つて――お寄んなさいな。」「いや、いづれ。」――「意氣なおかみさんですね、どちら？……」暮迫る人ごみの寄せつ返しつ亂るゝ中で、姐さんが聞いた。

「引手茶屋の――あれは娘だよ。」「場所ですわね。」と感心したやうに言つた切。で、「御遠慮なく」とか何とか一寸こだ

はりがあると寸法はいゝのだが、姐さんのは、唯當日の夕刊記事を一寸覗いたと言ふ樣子である。——安心をなさい、きん稲の場面に色氣のない事は此で知れよう。

その年十月の下旬である。薄ら寒いから羽織を引掛けて、まだあかるかつたが、暮方の所在なさに、戸外へ出た——今日は、おとなりの番かな。ぢき辻の角の夜警小屋の張出しを覗いて、ほんやりと立つと、ふと人通の途絶えた町を、麹町の大通の方から——もう其處に近く來た、黑犬が一疋ちよろ〳〵とうしろに、夕霧の薄い中に、ほの白い瓜核顏と、霧に包まれたやうな姿を見た。私はあつと言つた、「おすがさん。」思はず實の名を呼んで衝と寄つた。——大地震、大火のゝちに、はじめて逢つた其の人であつた。ダイヤも紅玉もなしに、めんねるの單衣に、琉球がすりの中古なのを、胸を細りと、痩せて居た。

顏を今見合せたトタンである。飛行機が一臺、小さく一つ星の空を飛んだ。辻の小屋に木の葉が落ちた。

私はゾッとした。……燒野原でなしに、遠い水から雲を傳つて、空から下りて來たものゝやうに見えたからである。

其の晩、うちの茶の間で話が出たが、汐見橋の飛行機を、芳乃は何も知らなかつた。

日ならず……九九九會のお友だちと、一同が座敷で逢つた時、ほかのは、いろ〳〵の色に、衣ものに苦心をしたのに、此の人は、おなじ姿で、黑繻子の帶で、目まじろぎもせず、端正として居た。

御最眞に——

眉かくしの靈

木曾街道、奈良井の驛は、中央線起點飯田橋より一五八哩二海拔三二〇〇尺、と言出すより膝栗毛を思ふ方が手取早く行旅の情を催させる。

こゝは彌次郎兵衛、喜多八が、とぼ〳〵と鳥居峠を越すと、日も西の山の端に傾きければ、兩側の旅籠屋より、女ども立出でゝ、もし〳〵お泊りぢやござんしないか、お風呂も湧いて居づにお泊りな〳〵――喜多八が、まだ少し早いけれど――彌次郎、もう泊つてもよからう、なう姐さん――女、お泊りなさんし、お夜食はお飯でも、蕎麥でも、お蕎麥でよかあ、お はたご安くして上げませづ。彌次郎、いかさま、安い方がいゝ、蕎麥でいくらだ。女、はい、お蕎麥なら百十六錢でござんさあ。二人は旅銀の乏しさに、そんなら然うと極めて泊つて、湯から上ると、その約束の蕎麥が出る。早速にくひかゝつて、喜多八、こつちの方では蕎麥はいゝが、したぢが惡いにはあやまる。彌次郎、そのかはりにお給仕がうつくしいからいゝ、なう姐さん、と洒落かゝつてもう一杯くんねえ。女、もうお蕎麥はそれ切りでござんさあ。彌次郎、なに、もうねえのか、たつた二ぜんづゝ食つたものを、つまらねえ、これぢやあ食ひたりねえ。喜多八、はたごが安いも凄じい。二はいばかり食つて居られるものか。彌次郎……馬鹿なつらさ、錢は出すから飯をくんねえ。……無慙や、かけなしの懐中を、けつく蕎麥だけ餘計につかはされて悄氣返る。その夜、故郷の江戸お簞笥町引出し横町、取手屋の鐶兵衛とて、工面のいい馴染に逢つてもとの山寺に詣でゝ鹿の鳴聲を聞いた處……

……と思ふと、ふと此處で泊りたく成つた。停留場を、もう汽車が出ようとする間際だつたと言ふのである。

此の、筆者の友、境贊吉は、實は蔦かづら木曾の棧橋、寐覺の床などを見物のつもりで、上松までの切符を持つて居た。霜月の半であつた。

「……然も、その（蕎麥二膳）には不思議な緣がありましたよ……」

と境が話した——

昨夜は松本で一泊した。御存じの通り、此の線の汽車は鹽尻から分岐點で東京から上松へ行くものが、松本で泊つたのは妙である。尤も、松本へ用があつて立寄つたのだと言へば、それまでゝ雜と濟む。が、それだと、しめくゝりが緩んで些と辻褄が合はない。何も穿鑿をするのではないけれど、實は日數の少いのに、汽車の遊びを貪つた旅行で、行途は上野から高崎、妙義山を見つゝ、横川、熊の平、淺間を眺め、輕井澤、追分をすぎ、篠の井線に乘替へて姥捨田毎を窓から覗いて、泊りは其處で松本が豫定であつた。その松本には「いゝ娘の居る旅館があります。懇意ですから御紹介をしませう」と、名のきこえた寶家が添手紙をしてくれた。……よせばいゝのに、昨夜その旅館につくと、成程、帳場には其らしい束髪の女が一人見えたが、座敷へ案内したのは無論女中で。……さてその紹介狀を渡したけれども、娘なんぞ寄つても着かない、……ばかりでない此の霜夜に出がらの生溫い澁茶一杯汲んだきりで、お夜食ともお飯とも言出さぬ。座敷は立派で卓は紫檀だ。火鉢は太い。が火の氣はほつちり。で、灰の白いのにもかみついて、何しろ嗳いものでお銚子をと云ふと、板前で火を引いてしまひました、何にも出來ませんと、女中の素氣なさ。寒さは寒し、成程、火を引いたやうな家中寂寞とはして居たが、まだ十一時前である……酒だけなと、賴むと、お生憎。酒はないのか、ございません。——ぢや、麥酒でも、それもお氣の毒樣だと言ふ。姐さん、……境は少々居直つて、何處か近所から取寄せて貰へまいか。へいもう遲うございますで、飲食店は寢ましたでな……飲食店だと言やあがる。はてな、停車場から、震へながら俥で來る途中、つい此の近まはりに、冷い音して、川が流れて、橋がかゝつて、兩側に遊廓らしい家が並んで、茶めし、赤い行燈もふはりと目の前にちらつくのに——あゝ、怨うと知つたら輕井澤で買つた二合罎を、次郎どのゝ狗ではないが、皆なめてしまふのではなかつたものを。大歎息とゝもに空腹をぐうと鳴して可哀な聲で、姐さん、然うすると、酒もなし、麥酒もなし、肴もなし……御飯は。いえさ今晩の旅籠の飯は。へい、それが間に合ひませんので……火を引いたあとなもんだでなあ——何の怨か知らないが、怎う成ると冷遇を通越して奇怪である。なまじ紹介狀があるだけに、喧嘩面で、宿を替へるとも言はれない。前世の業と斷念めて、せめて近所で、蕎麥か饂飩の御都合は成るまいか、と恐る〳〵申出ると、饂飩なら聞いて見ませう。あゝ、それを二ぜん賴みます。女中は廻腰のもつたて尻で、敷居へ半分だけ突込んで居た膝を、ぬいと引つこ拔いて不精に出て行く。

待つ事少時して盆で突出した奴を見ると、丼が唯た一つ、腹の空いた悲しさに、姐さん二ぜんを賴んだのだが。と詰るやうに言ふと、へい、二ぜん分、裝込んでございますで。いや、相わかりました。何うぞお構ひなく、お引取を、と言ふまでもなし……ついと尻を見せて、すた〳〵と廊下を行くのを、纖兒のやうな目つきで見ながら、抱込むばかりに蓋を取ると、成程、二ぜんもり込みだけに汁ぢがほつちり、饂飩は白く乾いて居た。

此の旅館が、秋葉山三尺坊が、假綱權現へ客を、たちものにした處へ打撞つたのであらう、泣くより笑だ。

その……饂飩二ぜんの昨夜を、むかし彌次郎、喜多八が、夕旅籠の蕎麥二ぜんに思較べた。聊か仰山だが、不思議の緣と言ふのは此で——急に奈良井へ泊つて見たく成つたのである。

日あしも木曾の山の端に傾いた。宿には一時雨颯とかゝつた。

雨ぐらゐの用意はして居る。驛前の俥は使らないで、洋傘で寂しく凌いで、鴨居の暗い檐つたひに、石ごろ路を辿りながら度胸は据ゑたぞ。——持つて來い、蕎麥二膳、で、昨夜の饂飩は暗討だ、——今宵の蕎麥は望む處だ。——旅のあはれを味はふと、硝子張の旅館。一二軒を故と避けて、軒に山鴛鴦と干菜を釣し、土間の竈で、割木の火を焚く、侘しさうな旅籠屋を烏のやうに覗込み、黑き外套で、御免と、入ると、頰冠をした親父が其の竈の下を焚いて居る。框がだゝ廣く、爐が大きく、煤けた天井に八間行燈の掛つたのは、山鴛鴦と對の註文通り。階子下の暗い帳場に、坊主頭の番頭は面白い。

「入らつぜえ、」

蕎麥二膳、蕎麥二膳と、境が覺悟の目の前へ、身輕にひよいと出て、慇懃に會釋をされたのは、燒麩だと思ふ（しつぽ

く）の加料が蒲鉾だつたやうな氣がした。

「お客樣だよ――鶴の三番。」

女中も、服裝は木綿だが、前垂がけの薩張した、年紀の少い色白なのが、窓、欄干を覗く、松の中を、攀上るやうに三階へ案内した。――十疊敷。……柱も天井も丈夫造りで、床の間の誂へにも聊かの風味がない、玄關つきとは似もつかない、しつかりした屋臺である。

敷蒲團の綿も暖かに、熊の皮の見事なのが敷いてあるは。はゝあ、膝栗毛時代に、峠路で賣つて居た、猿の腹ごもり、大蛇の肝、獸の皮と言ふのは此れだ、と滑稽た殿樣に成つて件の熊の皮に着座に及ぶと、すぐに臺十能へ火を入れて女中さんが上つて來て、惜氣もなく銅の大火鉢へ打まけたが、又夥多しい。青い火さきが、堅炭を搦んで、眞赤に烘つて、窓に沁入る山風は颯と冴える。三階に此の火の勢は大地震のあとでは、些と申すのも憚りあるばかりである。

湯にも入つた。

さて膳だが、――蝶脚の上を見ると、蕎麥扱にしたは氣恥かしい。わらさの照燒はとにかくとして、ふつと煙の立つ厚燒の玉子に、椀が眞白な半べんの葛かけ、皿についたのは、此のあたりで佳品と聞く、鶴を、何と、頭を猪口に、股をふつくり、胸を開いて、五羽、殆ど丸燒にして芳しくつけてあつた。

「有難い、……實に有難い。……」

境は、其の女中に馴れない手つきの、其も嬉しい…酌をして貰ひながら、熊に乘つて、仙人の御馳走に成るやうに、感動に禮を言つた。

「これは大した御馳走ですな。……實に有難い……全く禮を言ひたいなあ。」

心底の事である。はぐらかすとは樣子にも見えないから、若い女中もかけ引なしに、

「旦那さん、お氣に入りまして嬉しうございますわ。さあ、もうお一つ。」

「頂戴しよう。尙ほ重ねて頂戴しよう。――時に姐さん、此の上のお願ひだがね、……何うだらう、此の鶴を別に貰つて、此處へ鍋に掛けて、煮ながら食べると言ふわけには行くまいか。――鶴はまだいくらもあるかい。」

「えゝ、笊に三杯もございます。まだ臺所の柱にも束にしてかゝつて居ります。」

「そいつは豪氣だ――。少し餘分に貰ひたい、此處で煮るやうに……可いかい。」

「はい、然う申します。」

「次手にお銚子を。火がいゝから傍へ置くだけでも冷めはしない。……通ひが遠くつて氣の毒だ。三本ばかり一時に持つておいで。……何うだい。岩見重太郎が註文をするやうだらう。」

「おほゝ。」

今朝、松本で、顏を洗つた水瓶の水とゝもに、胸が氷に鎖されたから、何の考へもつかなかつた、こゝで暖かに心が解けると、……分つた、饂飩で虐待した理由と言ふのが――紹介狀をつけた畫伯は、近頃でこそ一家をなしたが、若くて放浪した時代に信州路を經歷つて、その旅館には五月あまりも閉籠つた滯る旅籠代の催促もせず、歸途には草鞋錢まで心着けた深切な家だと言つた。が、あゝ、其だ。……おなじ人の紹介だから旅籠代を滯らして、草鞋錢を貰ふのだと思つたに違ひない……

「えゝ、此は、お客樣、お粗末な事でして。」

と紺の鯉口に、おなじ幅廣の前掛した、痩せた、色のやゝ青黑い、陰氣だが律儀らしい、まだ三十六七ぐらゐな、五分刈の男が丁寧に禮際に畏まつた。

「何ういたして、……實に御馳走樣……。番頭さんですか。」

「いえ、當家の料理人にございますが、至つて不束でございまして。……それに、斯やうな山家邊鄙で、一向お口に合ひますものもございませんで。」

「飛んでもないこと。」

「つきまして、……唯今、女どもまでおつしやりつけでございましたが、鵜を貴方樣、何か鍋でめしあがりたいといふお言で如何やうにいたして差上げませうやら、右、女どもゝ矢張り田舍ものゝ事でございますで、よくお言がのみ込めかねます。ゆゑに失禮ではございますが、一寸お伺ひに出ましてございますが。」

境は少なからず面くらつた。

「そいつは何うも恐縮です。――邊方の處を。」

と浮り言つた……

「串戲のやうですが、全く三階まで。」

「何う仕りまして。」

「まあ、此方へ――お忙しいんですか。」

「いえ、お膳は、最う差上げました。それが、お客樣も、貴方樣のほか、お二組ぐらゐよりございません。」

「では、まあ此方へ。――さあ、ずつと。」

「はッ、何うも。」

「失禮をするかも知れないが、まあ、一杯。あゝ、――丁度お銚子が來た。女中さん、お酌をしてあげて下さい。」

「は、いえ、手前不調法で。」

「まあ〳〵一杯。――弱つたな、何うも、鵜を鍋でと言つて、……其の何ですよ。」

「旦那樣、帳場でも、あの、然う申して居りますの、鵜は燒いてめしあがるのが一番おいしいんでございますつて。」

「お膳にもつけて差上げましたが、此を頭から、その腦味噌をするりとな、ひと嚙りにめしあがりますのが、おいしいんでございまして、えゝ飛んだ田舍流儀ではございますがな。」

「お料理番さん……私は決して、料理をとやかう言うたのではないのですよ。……弱つたな、何うも、實はね、ある其の宴會の席で、其の席に居た藝妓が、木曾の鵜の話をしたんです――大分酒が亂れて來て、何とか節と言ふのが、あつち此方ではじまると、木曾節と言ふのがこの時顯れて、――きいても可懷い土地だから、うろ覺えに覺えて居るが（木曾へ木曾へと積出す米は）何とかつて言ふのでね……」

「然やうで。」

と眞四角に猪口をおくと、一つ提の煙草入から、吸ひかけた煙管を、金の火鉢だ、遠慮なくコツ、ンと敲いて、

「……（伊那や高遠の餘り米）……と言ふでございます、米、此の女中の名でございます、お米。」

「あら、何だよ、伊作さん。」

と女中が横にらみに笑つて睨んで、

「旦那さん、――此の人は、家が伊那だもんでございますから。」

「はあ、勝頼樣と同國ですな。」

「まあ、勝頼樣は、こんな男振ぢやありませんが。」

「當前よ。」

とむつゝりした料理番は、苦笑もせず、又コツ、ンと煙管を拂く。

「それだもんですから、伊那の最眞をしますの――木曾で唄ふのは違ひますが。――（伊那や高遠へ積出す米は、みんな木曾路の餘り米）――と言ひますの。」

「さあ……それは孰ちにしろ……その木曾へ、木曾への機掛に出た話なんですから、私たちも醉つては居るし、それがあとの贄川だか、峠を越した先の藪原、福島、上松のあたりだか、よくは訊かなかつたけれども、其の藝妓が、客と一所に、鵜あみを掛けに木曾へ行つたと言ふ話をしたんです。……まだ夜の暗いうちに山道をづん〳〵上つて、案内者の指揮

の場所で、かすみを張つて囮を揚げると、夜明前、霧のしら〳〵に、向うの尾上を、ぱつと此方の山の端へ渡る鵜の群がむら〳〵と來て、羽ばたきをして、かすみに掛る。じわ〳〵とつて占めてすぐに焚火で附燒にして、膏の熱い處を、ちゆッと吸つて食べるんだが、そのおいしい事、……と言つて、話をしてね……」

「はあ、まつたくで。」

「……ぶる〳〵寒いから、煮燗で、一杯のみながら、息もつかずに、幾口か鵜を嚙つて、あゝ、おいしいと一息して、焚火に獅嚙みついたのが、すつと立つと、案内についた土地の獵師が二人、きやッと言つた——その何なんですよ。藝妓の口が血だらけに成つて居たんだとさ、生々とした半熟の小鳥の血です、……と此の話をしながら、うつかりしたやうに其の藝妓は手巾で口を壓へたんですがね……たら〳〵と赤いやつが沁みさうで、私は顏を見ましたよ。觸ると撓ひさうな痩せぎすな、すらりとした、若い女で。……聞いてもうまさうだが、これは凄かつたらう、その時、東京で想像しても嶮いとも、高いとも、深いとも、峰谷の重り合つた木曾山中のしら〳〵あけです……暗い裾に焚火を搦めて、すつくりと立つた上つたと言ふ自然、目の下の峰よりも高い處で、霧の中から綺麗な首が。」

「可厭、旦那さん。」

「話は拙くつても、何となく不氣味だね。其の口が血だらけなんだ。」

「いや、如何にも。」

「あゝ、よく無事だつたな、と私が言ふと、何うして？と訊くから、然う云ふのが、慌てる銃獵家だの、魔のさした獵師に、峰越の笹原から狙撃に二つ彈丸を食ふんです。……場所と言ひ……時刻と言ひ……昔から、夜待、あけ方の鳥あみには、魔がさして、怪しい事があると言ふが、まつたく其は魔がさしたんだつて、覿面に綺麗な鬼に成つたぢやあないか……何うせ然うよ。……私は鬼よ——。でも人に食はれる方の……なぞと言ひながら、でも可恐いわね、ぞつとすること、又口を手巾で壓へて居たのさ。」

「ふーん。」

と料理番は、我を忘れて沈んだ聲して、

「えゝ。旦那、へい、何うも、いや、全く、——實際、危うございますな。——然う言ふ場合には、屹と怪我があるんでして……よく、その姐さんは御無事でした。此の贄川の川上、御嶽口。美濃よりの峽は、よけいに取れますが、その方の場所は何處でございますか存じません——藝妓衆は東京のどちらの方で。」

「何、下町の方ですがね。」

「柳橋……」

と言つて、覗くやうに、熟と見た。

「……或はその新橋とか申します……」

「いや、その眞中ほどです……日本橋の方だけれど、宴會の席ばかりでの話ですよ。」

「お處が分つて差支へがございませんければ、參考のために、其の場所を伺つて置きたいくらゐでございまして……此の、深山幽谷の事は、人間の智慧には及びません——」

女中も俯向いて暗い顏した。

境は、此の場合誰もしよう、乘出しながら、

「何か、此の邊に變つた事でも。」

「……別にその、と云つてございません。しかし、流に瀨がございますやうに、山にも淵がございますで、氣をつけなければ成りません。——唯今さしあげました鵜は、これは、つい一兩日續きまして、珍しく上の峠口で獵があつたのでございます。」

「さあ、それなんですよ。」